

母の手毬歌

柳田国男

青空文庫

この書を外国に在る人々に呈す

母の手毬歌

一、正月の遊び

皆さんは村に入って、うちに静かに暮らしているような時間は無くなつたけれども、その代りには今までまるで知らずにいた色々の珍らしいことを、見たり聞いたりする場合は多くなってきた。村には前々からの生活ぶりをよく覚えていて、親切に話をしてく

れる人があるものである。そういう話の中には、いつまでも役に立ち、また、永くなが楽しみになるものが多い。注意して聴きいてかえり、年をとった人々、また弟や妹たちにも御土産おみやげにしなければならぬ。その一つのお手本として、わたしがもう六十何年ものあいだ、忘れずにいたことを一つ書いて見よう。

このごろの田舎いなかのお正月は、もうどういふふうに変つてゐるかわらぬが、十年前までは女の子の初春のあそびには、羽根はね羽子はこ板いたと手毬てまりとがあつた。この二つは、自分の手とからだと思ふように動くことを知る、初めての機会であるゆえに、たいていの子どもには嬉うれしくて止めやめられず、大きくなつてからも正月が来るたびに、いつも思い出すたのしい遊びであつた。ゴム毬のゴムがなく

なつてしまつた淋^{さび}しき、それを南洋の人々から、わざわざ送りとどけてもらつたよろこびなどは、今でも忘れずにいる人がきつと多いことと思う。ところでその、ゴムというものの日本にあらわれたのは、明治の世の中もやや後^{のち}になつてからのことで、田舎ではみなさんのおかあさまぐらいの人までが、小さいころにはまだお正月に、木綿糸^{もめんいと}を巻いてこしらえた手毬を突いていたのである。白い木綿糸を、まんまるに巻きあげ、その上を力ガルといつて、紅^{あか}、青、黄、紫のあざやかな色の糸で、花や菱^{ひしがた}形のうつくしい形に飾つたので、そのうつくしさを女の児^こが愛していたために、ゴム毬になつてからのちも、なおしばらくのあいだは、そのゴム毬の上をもとの糸かがりの通りに、いろどつて塗つたものが

流行していた。木綿糸の手毬も作って店で売っていたけれども、そういうのは中味が綿ばかりで、糸は少ししか巻いてないので、つぶれやすくもあり、またちつとも弾まなかった。女の児たちが自分で作った手毬は、できるかぎり巻きつける木綿糸を多くし、その芯にはごく少しの綿をまるくして入れ、またよくはずむようにといって、竜の髭の^{りゆうひげ}みどり色の^み実をつつんだり、蜷貝^{しじみがい}に小さな石などをつつみ入れて、かすかな音のするのを喜んだりしていた。手毬に巻く木綿糸などは、もちろん長いものを使うのではなかった。そのころはまだ、家々で木綿機^{もめんばた}を織っていたので、その織糸^{おりいと}の端^{はし}の方の、もうどうしても布に織れない部分、ふつうにキリシネともハタシの糸ともいって、三、四寸は切つてのけ

るものをもらい集めて、それを一本ずつ丹念につないだものであった。一つの毬を巻きあげるにも、なかなか時間がかかった。母や祖母はその子のよろこぶ顔が見たさに、よその家のキリシネまでも無心をしてあるいたり、また手伝ったり指図さしずをしたりして、どこの家でも正月がくるまでに、二つか三つかの新らしい手毬まくらができていた。夜もこの新らしい手毬を枕もとまくらにおいて、もういくつ寝るとお正月と、指折りゆびおかぞえていた子どもは多かったのである。

二、手毬と木綿糸

手毬^{てまり}がこのように美しいものになったのは、木綿機^{もめんばた}が家々で

織^をられるようになってから後のことである。木綿^{もめん}というものの我

が^がくに

邦^{がくに}に知られたのは、相応に古いころからのことであつたようだ

が、木^きわたという作物^{さくもつ}を、諸^{しよ}処^{しよ}方^{ほう}々の田畠^{たはた}にうえ、それか

ら綿を取り糸^{つむ}を紡いで、だれでも木綿の着物を着るようになった

のは、江戸時代も中頃から後のことで、それ以前には、冬^{あさぬ}も麻

布^のの衣服を着るのがふつうであつた。麻糸はさらして真白^{まっしろ}に

することがむつかしく、また、木綿のように紅^{あか}や青のあざやかな

色には染まらなかつた上に、これで織つた布が長くもつので、そ

うたびたびは機^{はた}は立てなかつた。そればかりか、この糸は木綿の

ようにふつくりとはしていないから、手毬に巻き掛けても今のゴ

ム毬のように、ついてよく弾^{はず}まなかつたのである。そのためでもあつたらうか、ちようどこの木綿糸を手毬に利用することが始まつたところから、だんだんと手毬のあそびが變つてきた。近いころの手毬はつくといつて、板の間とか土の上とかに打ちつけて、はね揚^{あが}つてくるのをまた打つという、いくらか間の^ま早い遊戯になつて、それを上手につづけてつくおもしろさがまた一段と加わつてきたのである。

浮世^{うきよまたへい}又平の浮世絵などを見ても、もうあの時代から女の子が膝^{ひざ}を突いて、手毬をつくところが描^かいてあるが、これはそのころには、まだ珍らしい遊びだったのであろう。麻^{あさ}の機^{はたいと}糸の切れはしをつなぎ合わせて、手毬に巻いていたということは、何の本に

も書いてないようだが、木綿糸の多くなる以前には、それをしなかつたら手毬はないはずであり、またそれがあつたゆえに、木綿糸の手毬も、だんだんに流行することになったものと思う。つまりは糸を巻く手毬は新しいものではないけれども、それが木綿の糸にかわつたために、きゆうに手毬というものは珍らしく、また女の子のあそびが以前にくらべて、ずっとおもしろいものになったことだけは争えないのである。

これは『民謡みんよう覚書おぼえがき』という本の中に、くわしく書いておいたから、大きくなつてから読んでごらん下さい。われわれの持ち伝えている手毬歌のなかには、気をつけて見ると二通りの種類がある。その一つは、やや間の早いまつき毬の歌で、

とんとん叩く^{たた}は誰さんじや

とか、または

つくつくぼうしはなぜ泣くね

とかいうような、歌の言葉からもそれとわかるものがある。今ひとつのほうは揚げ毬^{あまり}といって、空に向かつて、二つまたは三つの手毬を投げあげて、手に受けてはまた揚げるといふ動作をくり返すあそびで、このほうは毬の高低^{たかひく}によつて、歌の節^{ふし}を長くも短

かくもするのがまたおもしろく、これならば弾まぬ手毬でも遊ぶことができた。わたしなどの小さかったころには、もうこの二通りの遊び方はともに行なわれていたけれども、わたしの母などの楽しんで歌ったのは、主としてこの高く揚げるほうの手毬歌であった。

三、母と手毬

わたしの母は、今いきていると百六歳ほどになるのだが、もう五十年も前になくなってしまうた。男の子ばかりが八人もあつて、それを育てるのに大へんな苦勞をして、朝から夜までじつとして

いる時がないくらい、用の多いからだであつたのに、おまけに人の世話をすることがすきで、よくたのまれては若い者に意見をしたり、家庭のごたごたの仲裁を試みたり、とかくりくつめいた話が多く、どちらかというところの少ない人であつたが、それでいてふしぎに手毬だけを無^{むじよう}上に愛していた。うちには女の子はひとりもないのに、あまつた木綿糸さえ見ればきつと自分で手毬をかがつて、よその小娘にもやれば、またうちにも置いたので、わたしたちの玩具箱^{おもちゃばこ}には、いつも二つも三つもごろごろしていた。そうして、わたしたちがたまたまついて見たりしている、そばへ寄つてきて正月でない時にも、自分で上手^{じようず}にあそんで見せてくれた。しかし母のはいつでも揚げ毬^{あまり}のほうであ

った。そうして、その歌が村の女の子たちの歌っているのとは、大分^{だいぶん}にちがっていた。それをなんべんも聴^きいているうちに、わざとは真似ることができなかったが、歌だけはわたしも大よそ覚えてしまったのである。

明治の御代^{みよ}のなかごろに、大和田建樹^{おおわだ たてき}さんという国文の先生が、日本全国の手毬歌を集めて、大きな本にして出されたことがある。その時にはもう母はいなかったのだが、わたしはこの書物を読んで見るたびに、母を思い出してなつかしかった。そうしていつか一度は「母の手毬歌」というような文章を書いて見たいものと思っていた。母がうたっていた手毬歌は三通りほどあったが、その中の二つ、

とのは丹波^{たんば}の助^{すけさぶ}三さまよ……

というのと、

寺へさしやげて手習^{てならい}させて……

という歌とは、文句は少しずつかわつていても、日本の東にも西にもあつた。しかし、もう一つの「鎌倉^{かまくら}の椿^{つばき}」というのは、その大和田氏の『歌謡類聚^{かようるいじゆ}』の中にも、またほかの色々な本にも、そっくり同じというものがまだ出ていない。それがわたしに

は非常に興味深く、今でも感ぜずにはいられないのである。

四、あれ見やれ向う見やれ

母は自分でも娘のころというものが、大へんみじかつたといつて歎なげいていた。そうであつたろうと思うことは、たしか十四の年に兄ふたりと、つづいて母親とをうしなつて急に家がさびしくなり、父と小さな妹とを世話しつつ、貧しい家計を立てていた。二十歳でわたしの家の人になるまえに、わずか一年ほど藩はんの大きな武家ぶけへ見習みならい奉公ほうこうに出て、朋輩ほうばいも多かったということだから、その正月のあそびで学んだのかも知れぬが、多分はそれよ

りもずっとまえ、まだ十いくつの幸福な小娘^{こむすめ}だったころに、こういう手毬歌にむちゆうになつていたことがあるのであろう。ともかくも歌の言葉があまりに古風なものだから、何処^{どこ}でもそれを知つていた女たちは皆^{みんな}いなくなつて、近年の採集にはもれたものと思われる。

長い歌だから、少しずつ切つて説明をして見よう。片仮名をもちいた部分は特に言葉を長くのばして歌うところである。揚げ手^{あて}毬^{まり}を高く揚^あげるたびに、文句にも力を入れて時間を合わせるので、それが女の子たちにはこの上もなくおもしろかつたのである。

あれ見イやれむウこう見イやれ

六まい屏風びようぶにすうごろく

すごろくオクに五オばん負けて

二イ度と打つまいかアまくら

鎌かまくウらにまアいるみイちで

つウばき一本見イつけた

屏風びようぶとか双六盤すごろくばんとかは、もとは京鎌倉きようかまくらの家々だけに在あ

るもので、ひさしく名はきいて見たことのないという女や子ども
が多かった。それが少しずつ田舎いなかへも入ってきた始めには、この

ような珍らしい、だれでも見たがるものは他ほかにはなかつた。それ
で手毬の唄には、さいしよに傍そばにいる者がこういうことをいって、

手毬を揚げる者の眼を、ふと手毬から離れさせて、受けそこなわせようとした、たわむれの言葉であつた。それが後にはいつとなく自分でも、そういつてこの遊びをするようになったものらしい。わたしなどの若いころまでは、村に入ってくる遊芸人の群れのなかに、品玉しなだまと称して、三つの手毬を高く投げ揚げて、それをたくみに受けて見せる者があつた。それにはかならずひょうげ役やくというのが脇わきにいて、色々おかしいことをいつて、その芸をしくじらせようとしたものであつたが、それがこういう女の子の歌にも、伝わっていたものと思われる。とにかくに今ものこっている全国の手毬歌には、これと同じように「あれ見やれ」とか「向う通るは」とかいう文句をもつてはじまり、毬の落ちてくるのを見

つめてゐる子の注意を、ほかへ向けさせるようにしたものが多いのである。もとはそういう歌をそばの子供たちがうたつて、囃^{はや}したりはぐらかそうとしたりしたらしいのだが、それにはまた、双六とか六枚屏風とかいうような、珍らしいものの名を出すのがおかしかつたものと思われる。古いころの双六は今ある一枚^{いちまい}刷^ずりの道^{どう}中^{うちゅう}双六^{そうろうく}などとはちがつて、碁^ごや将棋^{しょうぎ}と同じような盤^{ばん}の上の競技であつた。そうしてその遊びをすることを打つといつていた。打つという言葉があるので、大よそこの手毬歌のはじまつた時代の、そう新らしいものでないことがわかつて来るのである。

五、寺と椿の花

すころく

双六の遊びには、昔の人たちは女でもことのほか熱中したもので、絵にも文学にもそういうことはよく出ている。二度と打つまい鎌倉かまくらというのは、少しく意味がはつきりしないようだが、この歌は全部を二句ずつに切つて、そのおわりの言葉をつぎの句の始めに、くり返すようにしているから、これもそのつぎの鎌倉という語を、引きあげて前のほうへつけたまでであろう。

其そのつうばきだアてのつうばき

御寺おてらへもオててそオだてた

日が照エればすうずみどオころ

あアめが降^ふウればやめどころ

にわか雨をさけて、軒^{のき}の下や大^{たい}木^{ぼく}の蔭^{かげ}に、立ちよつて晴^{はれ}間^まを
待つことを、昔の人たちはヤメルといつていた。田^{いな}舎^{なか}では今でも
そういうかも知れぬが、もう標準語ではヨケルとか何とかいうよ
うになっているから、この言葉は古いのである。ダテというのは
質素の反対で、今ならば「ぜいたくな」とでもいうところ、すな
わち雨が降つても日が照つても、この椿^{つばき}は土地の人たちのように、
ほかに出てあるくことはできないというので、椿の花のうつくし
いのを、いつのまにか人のように取^{とり}扱^{あつか}っているのである。お
寺はもと戦国時代といったころには、よく身分のある人の娘や小

さな子の、しばらくあずけられて居るところであつた。寺の庭は広々として掃除がよくとどき、珍らしい花や植木なども多かつたので、椿を人にたとえたということはまだ心づかなくても、これだけを聴^きいても子どもには興味があつた。ただこの歌は二句ずつで話がつぎつぎと移りかわり、切れぎれの小さな絵をならべたようになつていたので、つづき話を好む今日の人たちには、少しばかり勝手がちがうかも知れない。

古いころの文芸のなかには、こういう形のもがまだ色々あつた。連歌^{れんが}というものは殊^{こと}にこれとよく似ている。あるいはこの手毬歌なども、さいしよはもつと長く、もつと連歌というものに近かつたのではないかと思うが、母とわたしの覚えていたもの

では、この歌はもうこれで切り上げてしまつて、そのあとにまる
で縁のない、つぎのような歌がつづいていたのであつた。

そのあアめに降りこめらアれて

お茶もいやいや煙草たばこもいやいや

しよんがいなア、しよんがいな

しよんがい婆ばアばさん

こオとし九ウ十九でくウまアのへ

よオめりしよとおオしやる……

六、しよんがい婆々

このしよんがい婆さんばあというあたりから、手毬の手はきゆうに
早くなり、歌の調子もまるで変わってくるので、もとは明らかにベ
つべつのものであった歌を、二つつなぎ合わせたということがわか
る。そうして後の方あとの歌は、ずっとおどけていて、子どもでも歌
いながら笑うところであつた。シヨンガイナは今のみなさんの
「しよんが無いな」と同じ意味の言葉で、もう今から三百年もま
えの流行唄はやりうたの囃しはやの文句であつた。宮城県などでは、伊達政宗だてまさむね
にはじまったという「さんさしぐれか」という歌にもこの囃しが
ついている。九州のほうでは長崎県の島々にも、また鹿児島県で
開聞岳かいもんだけを詠えいじたという「雲の帯してなよなよ」という歌にも

この囃しがあり、さらに南へ行つて沖縄県の八重山群島やえやまぐんとうなどにも、しよんがいをもつておわる哀れな別れの歌があつた。海上の交通が進んだために、一つの節ふしがこれだけ広く弘ひろまったことはもちろんであるが、なお一方にはまた、ここに出てくる「しよんがい婆々ばばさん」というような、やや滑稽こっけいなことをいう老女なども、この歌を職業にして地方をあるきまわっていたので、こういう手毬歌が女の子たちのあいだにも、行なわれることになったのかと思う。時代からいうと、鎌倉かまくらへ参る路まいみちにというのよりは、また少しばかり後のことのちだったろうと思われる。

しイらが（白髪）三みイすじにたアけエながアけて

おおくば（奥歯）二にイまいベエにかねつウけて

こおれでよおいかとお爺じいさんに問こええば

そおれでよおいよい嫁よめいり入しよとらアくじや

やアまをとオおればいイばらがとオめる

かアわをとオおれば船頭せんどうさんがとオめる……

とあつて、そのあとまだ十句ほどつづいたように思うが、わたしはもう忘れてしまっている。

手毬の上手じょうずだった母のような人たちは、そんな長い手毬歌がおわつても、まだ手毬は消えずにいるので、歌を止やめるか初めへもどることはせずに、それへ勝手にまたべつの歌を、くつつけて

歌ったものと思われる。そのためにいつそう歌の心こころもち持が、脇わきで聴きく者にはわかりにくくなつてしまつたのである。

このおわりに近い文句のなかで、ラクジャという言葉には説明がいかにも知れない。わたしなどの生まれた兵庫県の中部では、もとは東京で「することが出来る」、「してもよい」または「さしつかえない」といい、または東北各地で「するによい」という言葉のかわりに、シヨウトラクジャといったものである。他の地方にもまったく無いというほどではないが、わたしの故郷ではいくぶんかこれを使いすぎていた。しかしこの言葉などは、たしかに後になつてできたもので、初めてこの手毬歌の生まれたころには、またちがつた言い方をしていたものと思う。事によるとまだ

こむすめ
小娘であつた私の母や、その友だち仲間なかまなどがそう言い始めた
くらいがもとであるかもしれぬ。一句一句の感じはよくわかつて
いるものだから、歌の言葉がちつとでも古くさくなると、子ども
はこうしてだんだん歌いやすいように改作してきたのかと思う。

七、伝承者ということ

近ごろの童謡どうようや童詩どうしとはちがつて、手毬歌には見たこともな
いような遠くの土地を歌つたものがある。もともと空想の美しさ
を楽しむとする歌なのだから、京都でも江戸でも、また大阪で
も、その住人よりは、むしろまだ来て見たことのない村里の子

どものほうが、色々と取りはやし、または少なくとも聴^きいて忘れ
 ずにいてくれたのである。もしも鎌倉^{かまくら}が近いころまでのような、
 淋^{さび}しいただの田舎^{いなか}になつていたならば、このような手毬歌は生ま
 れようはずがない。だからこの歌のできたころには、まだこの土
 地が繁昌^{はんじょう}していて、あるいは今よりもつと花やかな、都に
 ついでの文化の一中心であつたことが考えられる。文部省から出
 ている『俚謡集^{りようしゅう}』という本の中には、たしか伊豆半島の物搗^{ものつき}
 歌^{うた}として、鎌倉を詠^{えい}じた民謡が三つ四つ出ており、つぎのよう
 なおどけたものもその中にはまじっている。

鎌倉では女がないとて

猿さるに夜麦よむぎをつウかせる

猿が三びき、手杵てきねが三本

どオれも緞子どんすの前掛まえかけで

しかし、伊豆いずならば頼朝よりともの覇府はふにちかく、また北条氏ともふかい関係があつた。そこに昔なつかしい鎌倉の歌が、大事に保存せられていたとしてもふしぎはない。珍らしいと思うのはその鎌倉から、百数十里も西にへだたつた、中国地方のある田舎に、いつの間にかこんな歌がはいっていて、しかもその歌のこしらえかたが、伊豆の物搗歌などとも似通にかようていることである。京都をはじめとし、京と鎌倉との中間地帯にも、おなじ歌はまだ一つも採

集せられていないが、東京のしゅういの村々のなかには、この

「鎌倉の椿」^{つばき}の歌の断片と見るべきものが、まだ二つ三つはこの

り伝わっていた。しかもおたがいになつたそれを知らず、ただ偶然にわたしが母の歌を記憶していたのだけでも、気がついて見ると一国の文化は、わたしたちの知らぬまに国じゅうに行き通うていたのであつた。皆さんもこれから注意ぶかく、だんだんと見たり聞いたりしたことを積みたくわえて行かれるならば、国の昔の交通の跡^{あと}を明らかにし、昔の人の心^{こころもち}持をよく理解し、またそれを一生^{いっしょうがい}涯、おぼえていることもらくなのである。

千駄焚き

一、地名のおこり

東京のほとんどのまわりには西南のはしに千駄^{せんだ}ガ谷^や、北に片よつて千駄^{せんだ}木^ぎという町があつて、ともに聞きなれぬ地名だから人が注意している。千駄ガ谷はもと郊外の農村だった。古い地誌^{ちし}にはここは広い野で、萱^{かや}が千駄も茹^かれるところから、千駄^{せんだ}萱^{がや}といったの

が村の名のおこりであろうと書いてある。一駄というのは駄馬^{だば}一頭に背負わせるほどの荷物のことだから、萱はかるいといつても二十貫いじようはある。それが千駄も苅れたとすれば、大へんな広い野にちがいないが、武蔵^{むさし}・相模^{さがみ}の高原にかけて、それくらいの野は今でもまだ残っている。べつに地名にするほどの珍らしい事実ではなかった。千駄木のほうもその通りで、もとは一軒の家ですら、年に三駄五駄の木を焚^たいていたのだから、薪山^{まきやま}としてはむしろちつぽけなものであった。

何かこういう地名の生まれるような原因が、ほかにあったのではないかと考えて見ると、日本全国を通じて、いちどに千駄の萱または木を、焚かねばならぬ場合がたった一つだけあった。それ

は夏の初め、農作にもっとも水の必要なころに、雨がちつとも降らぬと百姓がよわつてしまつて、いろいろ雨乞いあまごの祈禱きとうをする。

その最後のものが千駄焚きせんだただったのである。通例はこの火は山の

頂上のいちばん天に近いところに行つて焚くので、それで雲焼くもやき

とも雲焙くもあぶりともいう地方もあるのだが、東京の近くはたれも知

る通り、一日あるいて行つても尖とがつた山がない。それゆえに何処

かやや広々とした野を見つけて、人がそこに寄つて来てこの大き

な火を焚いたものとおもわれる。山の上であつては見に行くこと

も容易でないが、こういう平地ならば老人も女もゆき、幼い児童

もまた連れて行つてもらわれたことであらう。そうして有名にな

つて、その野が世に知られ、のちのち開墾かいこんせられて村になつて

からも、べつに新らしい村名を附けるにおよばなかったであろう。ただ近ごろは東京都の中などに、そういう雨乞いをする村がほとんどないので、どうだろうかと疑う人があるかもしれぬが、以前ごくふつうであつた風習で、今はもうなくなつたものは、この他ほかにもいくつがある。ことに燃料がだんだん足りなくなると、このような事はせずとも、ほかに方法があると思うようになるのはあたりまえで、今はしないということは昔もなかったという証拠にはならぬのである。

二、雨乞いのさまざまの方法

この本を読む人は、ほうぼうの土地で生まれた人、そうでなくとも父や母が、遠くの田舎いなかで育ったという人が多かろうと思うから、この風習がけっして一部の地方ばかりのものでないことを明らかにすべく、こんどは成るだけ多くの実例をあげておくことにしよう。

まず名称のほうからいうと、これは千駄焚き、またはセンダキというところが、もつとも多い。しかし名まえだけではなく、じっさいにも木なり萱かやなりを千把せんばは焚たくので、労力だけとしても容易なことでない。それだから、七日や十日の雨無あめなしには、もつとかんたんな別の方法で雨乞いをするが、それらがどうしても効果なく、いわゆる百計つきたという時になって、思い切ってこの手

段に出るのである。田植や夏物なつものの栽培にたいして、雨がどのく

らい大事なものであつたかは、こういう雨乞いの方法の何十種とい

うほどもあるのを見てもわかる。

にじゅうさんやまち

二十三夜待などとやや似て

いたのは、立待たちまち

といつて氏神うじがみさまの社やしろの前に、

氏子うじこが何人か

交替して立ちどおしに立っていて、そのあいだ鉦かねを鳴らしつづけ

ること、これは静岡県西部の海近くなどにもある。あるいはまた

川の頼待せまちとし

ようして、谷の流れの上に棚をかけて、その上で神

を祭り、または念仏となを唱えることもあつて、

これは土佐の山村に

も行なわれている。雨乞いに鉦を打ち太鼓たいこを鳴らし、それにつれ

て雨乞踊あまごいおどり

をもよおすなどは常の例で、そのなかでも変つてい

るのは紀州の岩代いわしろ

という村などでは、昔は大きな蟹かにをとらえて

踊おどり山やま

山という山の峰にのぼり、その蟹を中において大いにおどり、それからまたその蟹もちだを持出して海上はるかの沖の、大きな岩の上におくと、かならず雨が降ったといつてもいる。

あるいは宮や寺の宝物ほうもつになつてゐる古い仮面めんをかり、釣鐘つりがね

をおろし、また路傍の石地藏いしじぞうのもつとも霊験れいげんのあるというの

を、縄なわでぐるぐる巻きにしたりして、川の淵ふちなどの定きまつた場所

へしずめると雨が降るというのも多かつた。山口県の北の海岸部

には、蛇籠じやかごの祈祷きとうといつて、蛇じやを竹籠のなかに入れて、水の底

にしずめるといふ方法もあつた。もつと気味のわるい方法として

は、ふだんは見ることもない牛や馬の首をきつたのを、ある神聖

なる滝たきの滝壺つぼへしずめに行くといふなども、わたしの子どもの

ころまではあつた。これらは汚きたないことのお嫌きらいな水の神を怒いからせて、大いに暴あばれていただくという趣意らしく、もちろん日本に昔からあつたまじりではない。そのほか硯すずり洗あらいといつて家々から硯を出させ、それを一日に洗つてしまふもの、または百ひやく枿ます洗あらいといつて枿を数多くあつめてきて、水の神の祭つてある池で洗うというものもあつたが、雨が人間の力では自由に降らすことのできぬものであるゆえに、こうでもしたならばという試みがいふいろいろと考えられ、それがまた偶然に、たしかに効ききめ目があるという経験にもなつていたのである。

三、雨たもれの松明行列

千駄焚きは、いよいよそういういろいろの手段がみな無効に
 わり、もはやしんぼうができないというときになって、村が大き
 な決意をもって取りかかる方法となっていたが、燃料がまだゆた
 かで、また人の手にもあまりがあつた時代には、あるいはもつと
 手がるに、そういうくわだてをしたかも知れない。近いころまで、
 それがまだ残っていたのは、東北では岩手県の遠野地方などは千
 駄木、西のほうでは長崎県の下五島久賀島、佐賀県では巖
 木の山村、大分県でも玖珠郡の村々などにこの雨乞いがあり、
 それをセンダキというのもあるが、これらは千駄木ではなく「千
 焚き」であつたかもしれない。数は千というほど多くても、もう

束たばがずっと小さく、したがってまたこれを千把せんば焚たき、もしくは千
ばえ焚たきというところが多いのである。

長門ながとの見島みしまという島などは、畠はばかりの島だから、麦稈むぎわらを千

把ど、岡の上へもって行つて焚たき、これを千把せんば焚たきといっている。佐

渡どの島などは薪まきを千把せんば、山の頂上で燃やす雨乞あまがひいがあつて、それ

を千把せんば焚たきといっていた。信州は山国やまぐにでも、もう薪の少なくな

つた地方の一つだが、それでも各郡にこの千駄せんた焚たきという語はの

こつていて、じっさいはただほうぼうの家から、松の枝などを持

ちより、大きな火を山の上で焚たくだけである。千駄せんたというような

莫ばく大だいな萱いや木を、集めて焚たいたのは遠い昔のことで、今ではた

だ藁わらや篠しの雑ぞう木などの松たいまつ明まつを多く背負そつて、山に登つてゆくの

が通例のようになり、また炬火^{たいまつ}だから夜にはいると、とちゅうからでも火を点^{とも}して、行列をつくつて頂上に到着すると、その残りのものを一^{ひと}ところに集めて、焚いてかえるのが雨乞いになってしまった。わたしなどの故郷では、夏のなかばの真暗^{まっくら}な晩に、この炬火の長い行列をながめるのは、虫送りとともに美しい見ものであつた。あの二つのちがうのは、虫送りは田の中だけを廻つて早くかえつてくるが、雨乞いのほうはだんだんに高くへ登り、また隣の村々の火も遠くから見える。たのしみは長かつたかわりに、虫送りのように、毎年ひんぴんとは実行せられなかつた。そうしておこりは一つにちがいないのだが、これはもう千焚きとも千把焚きとも、わたしの村ではいわぬようになっていたのである。

昔の千駄焚きの壯觀にくらべると、いくら美しくとも、これは事が小さく、思い切った手段ともいえないのであるが、しかも土地の人々は、このために祈願の力が弱くなったとは思わず、ついこのごろまで必死の場合には、この方法によるほかはないと考えていたのは、わたしには深い理由があることと思われる。それをい
ちごん
言でいうならば、村の総員が心をあわせて、ぜひとも雨を得ようと協力することは、燃料の分量とは関係なく、昔も今も同じことだったからである。

四、村の協同

これについて思い合わされる一つの事實は、以前は越後^{えちご}では好
 いおしめりをもとめるために、田植のはじめ^{なわしろ}苗代のおわりころ
 に、農^{のう}やすみの日が何日かあった。早朝に氏^{うじがみ}神さまにおまいり
 して、しばらくすわっているくらいがその日の勤めであつて、な
 にも積極的に働く用はなかつたらしいのだが、それでもなお、こ
 の日業^{ぎよう}を休まずに、常の仕事をしている者はひじように憎まれた。
 そういうことをする者が一人でもあると、夕立雲^{ゆうだちぐも}がおこり雷^{かみなり}が
 鳴り出しても、その村だけは降らずに過ぎて行くともいって、憎
 むというよりもむしろ怖^{おそ}れた。ただの噂^{うわさ}話^{ばなし}だったかも知れぬ
 が、そういう不心得^{ふこころえ}な者の家には、村の若い衆たちがやってき
 て、屋根の萱をひきはいだものだそう。雨が降らずともよいの

なら、この家に屋根は無用だろうといったともいうが、じつはこのあたりの農家はユイ組としようして、村人の協力をもつて屋根を葺^ふいていたから、そういうことも言えるのであった。雇われて働く人々にとっては、休みは一つの権利だったか知らぬが、自分の身をつかつている独立の農民には、それがまた大きな義務でもあったのである。少し手のたりないよく稼^{かせ}ぐ夫婦者などは、休みたいのは人とかわらぬが、ここでもひと区切りはかを行かせておくと、あとがつごうが好いのだがと思うことがしばしばあった。それで人の目をしのんで働いていることもあり、またそれを見つけて憎みおびやかす者もあったのである。

すなわち方式はのちにいろいろと変つてきたけれども、雨乞い

もまた一つの臨時の祭りだったのである。村によつてはこの日村の神社に参集し、または一夜を拝殿のなかに明かすところもまだ多い。それを神職または重^{おも}だつた氏子^{うじこ}にまかせた場合でも、なお一同はめいめいの家に引きこもつて、つつしみの日を送らなければならなかつたので、この日に常の仕事をしてはならぬというのも、古来の物忌^{ものい}みの一つの形であつたことが明らかである。沖縄の島には、ハブという毒蛇がもとは多く、そのなかで金ハブ銀ハブというのはことにおそろしかつたのに、島の人はそれを神さまのお使のように思つていた。どういふ人がこのハブに咬^かまれるかと聴^きいて見ると、主としてウマツリ（お祭）の日に休まず働いていた者が、咬まれるというのは意外な話である。神様はただそう

多数の人が合同して禱^{いの}るならば、助けてやらずばなるまいとおぼしめただけでなく、その合同に加担せぬ者をお怒^{いか}りなされるときまで信じていた人があるのである。そうしてそれがまた、古くからのお約束でもあったかと思う。一族一村の住民のなかに、一人でもちがった感じをいだき、すべきことをせぬ者があるとする、たったそれだけのためにも公共の願い事が、かなわぬ場合があるかも知れぬと、古風な人々は気にしたのであつた。もちろんそのためには最初から、人心の一致を望まれぬような、小さな祈願の祭りは計画することはできなかつたので、それで日本の神さまはいたっておおまかな、公けの大事にしか関与なされなかつたのである。多数の人々がともどもに熱心になつて願うことを、援

助なされるのがわれわれの神さまであった。少なくとも古い人たちはそう信じていた。

五、敬神という意味

しかし皆さんは、まだそういうことを考えて見る役ではない。ただ遠からずこれを決定する人となったときのために、今のうちからもっと多くの事実を、覚えておく必要があるだけである。それがおもしろくもなんともない事柄だったら、おぼえているのもご苦労なわけであるが、村ではこういうことが珍らしくまた新しいものであり、村にはいつていると見まい聞くまいとしても、

気がつかずにいられぬことばかりなのである。そうしてまたこういうことをよく理解するのが、土地に住む人々と、心をひとつにする途^{みち}なのだから、まことに好^よい機会だと思つてよいのである。

村の祭りに一人の例外もなく協力し得るということは、もう大^だ分^{いぶ}ひさしい前から望みがたいことになっている。今日は氏^{うじ}神^{がみ}氏^う子^この範圍がひろげられ、その地に生まれた者はみな、氏神の子と呼ばれているけれども、なお家々のお嫁さんいがいにも、よそで生まれた人が数多くはいつて住んでおり、それが何年住めば氏子になるというきまりもなく、また皆さんのように今に還^{かえ}つてしまふことのわかつている人もたくさんいる。人の願いごとがみな一致するということも、またそう多くの人的一致して願い望むよう

なことも、だんだんと少なくなってきた。それで第二段の私たちの努力としては、そういうなかでもできるかぎり多くの人数を協力させること、さらにまた、わたしなどのように、遠くに住んでいる、めったにそんな祈願に出あわなくても、なお村の人の心こころ持もちだけはよく解わかつているという者を、これでもできるだけ多くすることが考えられるのである。

この二つの中の第一のほうは、しいて引っぱりこんでも、じつはねうちが少ない。これに反して、後のほうは、あとわたしたちの注意によりまた理解によつて、まだまだうんと進めることができそうなのである。非常時になるとはじめてあら顕われるような女の人たちの心掛けのように、今まで知りようのなかったものは是非がな

いが、何によらず田舎いなかの事といえば、ただむつかしくて、説明のしようもないようにきめていた人が多かったのは不注意な話である。

だから、皆さんは先まず最初に敬神ということは、たとえばどういうことをいうのかを注意して見るとよい。これは皇室をはじめ奉りたてまつ、下々しもしもとしても大事なことで、これをどうだつてよいと思つてゐる者はありません。ところが文字のほうから物を学ぶ人たちは、これをただ神のお社やしろを敬うことだとばかり思つて、お社がいの祭りは振り向いて見ようとしのないのみか、氏子がめいめいの神さまを拝む心持が、どのようなかをさえも考えようとはしない。敬神という言葉は大昔から、いろいろの書いたものに用

いられているが、それを見くらべてもはつきりとわかるように、神を敬うのはもとはありがたいと思うから、また多くの者がありがたがっていることをよく知っているからであつた。そうしてこのありがたいは、ただの感謝とはちがうのである。そのはじめの心持は、ありがたいという言葉がしめす通り、ほかにはまったくあり得ないもの、人間の思慮のおよばぬところということであつた。それを数千年間の経験だけによつて、知つてよく覚えているのが信心というものであつた。自分ではもう信心をすることのできぬ者があつても、これはいたしかたがない。ただ人の信心をかるんじたり、または何でもないことのように思つて、深い奥底のあることを認めようとせぬだけはあやまつている。

六、千燈籠と千本幟

人が多くの同志者と共に、同じ祭りをつかえまつる心づよきは、
今では田舎いなかの住人じゆうにんばかりがよく知っていて、都会ではだんだ
んとわからなくなりかけている。田舎では土地にただ一つの神の
お社の祭典やしろうに、不熱心な者のあるのをきらうのみでなく、どうし
てもその統一が保ちがたいと感じはじめると、べつに少数の仲間
だけで申しあわせて、かのききうのうねとう庚申甲子等のいろいろの講こう、あるいは二にじゆ
十三夜講うさんやこうのようなものを組織し、また継続して、その講中だけ
は一人も脱ぬけ落ちず、我人われひとおなじ心に信心をやしなうて行こうと

しているのである。都会もそのひつようは田舎よりは大きいのだから、以前はこの講がことに盛んだったのだが、何なにぶん分各人の願ねがひい望みがまちまちであるために、今では名ばかりのこつて、一年に一どの物もの詣まいりにつき合うだけ、またはほうぼうから集まってくるのみで、あの人はいったいどんな心しん願がんがあるのだろうか、たがいに知らぬ者が、ただおりおり顔を合わせることになっている。その結果としては祈願がますます小さく、またはなはだしく公けでない、身み勝手がってなものになつてしまったのである。

そうしてその以前の痕跡こんせきだけは、まだかすかに残っているのである。たとえば町でも年一どの大祭の日だけは、軒のきなみにそろいの提ちようちん灯ちんを入口へ下げさせる。これは雨乞いの岳たけのぼ登りに、

ひやくたひ　せんぞくしば
百炬火、千束柴を持って出たのと同じものにちがいないのだ

が、今では美観が主になって、何のわけもわからずに、ただ祭りの景気だの、お祭り気分だのという人ばかり多い。昔も平重たいらのしげ

もり
盛が千の燈籠をともしせて、燈籠の大臣と呼ばれたという話

のように、一人の資力によつてたくさんの人を使い、何か自分だ

けの心願のために、数の燈火を神にあげるといふところもあるが、

もとはこれも土地土地の協同であつた。肥前五島の小値賀島ひぜんごとう　おちかの千

燈籠などは、これもまた一部落の雨乞いのためであつて、今は子

どもが主になって岡の上で大きな火を焚き、あとでそれを松明たいまつ

にうつして下つてくるのであつた。各戸が協力し、またどうい

ことが願わしいのかを、はつきりと胸に持っているでなければ、

この大がかりな願望もじつはただの慰みにすぎぬのであったが、それまで考えている者は、はたして町にもあるかどうか、よつほど不確かなものになっている。

それからまた東京の附近などにも、つい近ごろまでは千本せんぼんのぼ幟のぼりというものがあつた。半紙はんしを八つほどに剪きつたのを糊のりで竹の

くしに貼はりつけ、それに拝みに行く神さまの名と月日などを書いて、参詣路さんけいみちの左右に刺すもので、ひと目でその神の信者の多いことがわかり、いわゆる景気のよいものではあるが、その代りには祭りの幟のぼりとは似ても似つかない、そまつな簡略な紙の小幟このぼりばかりであつた。これも現在は平重盛の千燈籠のように、ただひとりの者が、なにか願掛がんかけをするときに、そういう約束を神さまに

むかつてする者が多くなっているようだが、村々のほうでは、もとは千度参りせんどもいと称して、たくさんの人が言いあわせて、新たな大きい祈願をする時だけ立てたもので、千人がそろうということはむつかしくとも、できるだけは一村各家から総出そうでをして、どこに一本ずつ持ってきて立てるのが本意であつた。時とわずかな費用とさえかければ、一人でならば何時なんどきだつてこういう事はできる。ただそれが神さまのおぼしめしにもかかなくと思つたのは、言わばやや勘かんじよう定ずくな、いやしい、また新らしい迷信だつたことは否めないのである。

七、祭礼と幟

のぼり

幟は夏の初め秋のなかば、村にはいつて行く者の気づかずには
いられない、もつともさわやかなころよい印象をあたえるよい
見ものであるが、これを祭りの日に立てるようになったおこりは、
まだ考えて見た人がないらしい。わたしの意見では、さいしょ一
つの高い木の柱を立てる習慣があつて、夜はそのてっぺんで火を
ともし、昼はまた目じるしの白い布をつけたのが、のちのちあの
大きな二幅三幅はばのたてはた旗となり、その布の上に天下てんかたいへい太平だの、
国土安全こくどあんぜんだのの文字を書くことになつてから、それがよく読め
るように、片がわに乳ちをつけ綱をとおし、ついにいま見る形にな
つたものと思われる。近ごろはそとに出た人の家の前などに、何

本となく立てる風習もはじまったが、もともとは定まった場所に、一本または二本ならんで立つのがきまりで、たぶんは神前の幣へいぐ串しとおなじく、これを中心に祭る人々のこころを、統一せしめるのが趣意であつたのである。それを千本幟のように数ばかり多く、ちようど千駄焚きが炬火たいまつにかわつたごとく、めいめいべつべつに持つものにしたことが、すでに変遷であつた。まして一人の手でこのようなことをするのは、ただ外観のためとしか思われない。それをお喜びなされるのは、昔からの神とはいふことができない。人の心の集合と統一とが、こんなものからはほとんど期し得られぬからである。

ところが田舎いなかのほうには、これよりもひとつ前に、日幟ひのぼりさん

といつて、ただ一本の大きな幟を、多くの村人が集まつてきて、一日のうちに作つて立てるならわしがあつた。伯耆ほうきの大山だいせんの麓ふもとの村里などでは、その日は正月下旬のある一日、または秋の収穫がすんでからのちに、一日のうちに木棉綿もめんわたから糸を引き、機はたにこしらえて織りあげたものを、ただちに村はずれの路傍みちばたにもつて行つて幟に立てた。それは容易なことではないためだろうか、近年は糸だけは前もつてしたくし、機はたこしらえからはじめる村もあり、または綿布までよそで買いととのえて置いて、幟に縫うところからはじめる村さえできたということである。佐賀県の綾部あやべ八幡ちまんというお社やしろには、もとは六月十五日、今は七月のおなじ日に、旗はたあ上げ旗はたおろ下しという神事がある。古来十三歳になる女の子

をひとりきめて、一日のうちにその旗の麻を織つて旗に仕あげさ
 せ、これを日旗ひばたと呼んでいた。十三歳の者でなくとも、ひとりの
 娘の子にはそれはむつかしい事であつた。ゆえに物なれた老女が
 世話をやき、今ではまた老女にたのんで織つてもらふようにな
 っている。この旗は、ふつうの幟よりも小さいものらしいが、そ
 れにしてもこの一日仕事に参与する者は、とてもひとりの老女だ
 けではすむまいと思う。越後えちごの七ふしぎの一つなる弘智法印こうちほういんの
 寺などでも、毎年四月八日の御衣おころもがえという日に、もとは海べ
 七浦うばこの姥子うばこたち、おのおの一つかみずつの苧おを持ちよつて、一日
 のうちに紡み績つむぎ織おり縫ぬつて、法印の像に着せ申したのを、日ひじゆ
 中うばた機うばたといったということが、二百何十年かまえの『行脚文あんぎやぶんしゆ』

集』に見えている。今ではもうやめているかも知れぬが、これなどもおこりだけはこの日織さんと同じものであつた。

八、日中機

この協同はだんだんと形をかえて、今ではひとりの願いごとを助けるような習わしになろうとしている。たとえば同じ日中機ひじゅうばたでも、壱岐いぎの島でそういうのは、ある家の幼児の乳呑歯ちのみばが下のほうから生えずはに上から生えるのを、よくないことと恐れ、これには七機ななはた一いつたん反の着物を着せるか、またはこの日中機を織つて着せなければならぬといっている。七機一反はむつかしい言葉だが、

七カ所の機はたで織った布をもらいあつめ、それを継つぎあわせて着物に縫うことで、これをまたナナトコギレともいい、そういう着物を着せて子どもが丈夫じょうぶにそだつという地方に多く、それとおなじにまた七軒もらいとしようにして、七戸の家から米をすこしずつもらつてきて、粥かゆに炊たいて食べると、夏なつ負まけをせぬとも、あるいは病いかなおるともいい、あるいは七雑炊ななぞうすいといつて、正月七日の午前、七つになる児こをつれて七軒をまわり、この日の雑炊を少しずつ乞こい受けて食べさせると、丈夫な児になると信じて、今でもそうしているとことが多い。七つはただ好よい数かずというまでで、つまりはこうして多くの力を集めることが、本人の身の上にたのもしい効果をおよぼすということを経験して、村に住む人たちが

久しいあいだ、たがいに助け合っていた点は皆にている。その七機一反のかわりになるのだから、日中機のほうもまた多くの親しい女たちが集まって、綜^へたり織ったり縫ったりすること、手つだつていたにちがいないのである。

九州でも宮崎県の西南部、霧^{きり}島^{しま}山^{さん}麓^{ろく}の村々などでは、こう

いう場合に織つて着せる布を、ヒゲノノと呼んでいる。これも近

所の女たちがよつてきて、一日のうちに機にかけて織つて縫つて、

その児^こに着せたのち、それを藁^{わら}人^{にんぎょう}形^{がた}に着せたまま川に流した

りする。ヒゲノノというのは日返^{ひがえ}り布、すなわち一日のうちに織

つて縫つて着せて、流してしまうからそういうのかもしれないが、

壱岐^{いぎ}から遠くない五島^{ごとう}の島々が、日返^{ひがえ}り機^{はた}というのなどは、流す

ということではなくて、やはり一日のうちに織つて縫つて着せる。
そうして逆齒さかばの生えるみどり児この全部でなく、
丙午ひのえうまの年に生まれ
た児にそうするといひ、または赤ん坊が夜なきをしてこまる
ときにも、この日返り機を織つて着せる村があつた。最初はかな
らずしも一つの場合にかぎらず、なにか気になるようなことのあ
るさいは、こういう着物を着せて神をおがませたのではないかと
思う。

これらはいずれもぜひ一日のうちに、こしらえ上げねばならぬ
ものではないのだから、むしろ衆人の力を集めているという点に、
なにかわたしたちの、もう忘れた大きな意味があつたのである。
今日こんにちでは人はそう毎日たのめないから、一日で片づけようとす

るのだと解する者も多かろうが、屋根も一日で葺^ふき、味噌^{みそ}も一日で仕込^{しこ}むのみならず、蚊帳^{かや}などもかならず一日で縫^ぬってしまふベきものと、きめている家が京大阪にもある。香川県のある村では、お産の前に死んだ若い婦人のために、洗^{あら}いざらしという五、六尺の布切^{ぬのぎ}れを、路^{みち}のそばの地藏さんの前などに張^はっておいて、通行の人に水をそそぎかけてもらうことは、ほかの地方も同じであるが、この布をまた一^{いち}夜機^{やばた}としようにして、朝から糸を繰^くり機に立てて織^おることにしている。鹿児島県南海の奄美^{あまみ}大島^{おおしま}では、十三歳になる女の子には十^{じゅう}三^{さん}袴^{はかま}といつて、叔母^{おば}さんから赤い腰巻^{こし巻き}をやることになっている。これも全国どこにもあることだが、この島のは特に一日のうちに織^おって染めて縫^ぬってやることになつ

ていた。すなわち、その叔母さんも一人だけではできぬことなのである。

九、子どもの欲しい家

旗や幟のぼりについて、なお二つ三つのかわった話をわたしは知っている。一つは鳥取県のある山村だけで聴きいたことだが、むしろばたた席せき旗はたという五月の節供せつくのまえの晩、子どもが欲しいのに産まれないという家の前に、わかものれんじゅう若者連中がこつそりとやってきて、きまつた方式のとおりむしろにむしろ席せきの旗を立てるときつと子どもができる。その家の者が知っていてはききめがない。その方式というのは、まず

この家より上のほうに男の児をもった家の屋の棟むねに縄なわをゆわえつ
け、つぎにその縄を氏うじがみ神かみさんの社やしろに引き、さらに子どものほし
い家の外庭そとにわまで引いてきて、蓆旗を立てた竿さおのさきにむすびつ
ないでおくのである。縄がとちゅうで地についたり、切れたりし
ていてはいけない。またこの法によつて男の子の生まれた家から
は、縄を引いてこぬという。縄と蓆はあとでこの家がもらい受け
るというが、ともかくも相応の長い縄がいるであらうのに、それ
を当人たちには知らせずに、ひそかに用意をするというのは大き
な好意であり、それをまた、氏うじがみ神かみ社やしろにつなぐというのも、信心
の一つのあらわれであつた。村に丈夫じょうぶな男の子の増加すること
は、神さまばかりか村民にも望ましいことで、いぜんには東北地

方で年切りねんきという行事のように、果樹をたたいて千なれ万なれと、
唱えとなごとをしていた正月十五日の晩、同時に若い嫁たちのお尻を、
産めうめといつて、打つまじないもあつたというが、今ではもう
たのまれもせぬのに、そんな事までする者は村にもおらぬであろ
う。しかし村がまだ淋さびしく弱かつたころには、時をちがえてたが
いにこういう助け合いをするまでに、村の人たちの団結心はつよ
かつたのである。

それからもう一つ、信州の南部から美濃みののほうにかけて、つい
近いころまで、送り旗というおもしろい風習があつた。これは旗
とはいうが幟やしろのことらしく、人がある遠くのお社を信仰して、幟
を一つさしあげたいが参詣さんけいに行かれぬという場合に、それを作

りあげて何里かは自分で持ちはこび、路のかたわらに立てかけてもどつてくる。そうすると通行人のなかから、荷物はなくて信心こころざしの志のある者が、二里でも三里でもお社の方角へ送つて行くのである。その協力がつもりつもつて、しまいには志したところまでとどいたというのは、たれがしたとも知れないだけに、まことにゆかしい我わが邦くにの美風であつた。あるいはまた地蔵送りといつて、石の地蔵を造つて、この方法で遠くへはこぶことが、一時はやつたという話もある。これなどは荷馬車が多くなつた時代に、主として馬方うまかたが篤志とくしではこんだということ、これにもやはり行くさきが書いてあるのを、読める人がもう多くなつたお蔭かげであつた。わたしなども今から二十年ほどまえに、奈良の二月堂にがつどうに献上す

るといふ青竹の束が、あの交通の多い街道の片脇に、いくらもころがしてあるのを見たことがある。川すじや海の上では材木に大きく伊勢木と書いて、山から流したものがよく浮いている。あるいは酒樽に奉納住吉大明神、または金毘羅大権現宝前と書いたのを、海で船頭がひろい上げることもある。いずれも自ら行けない信心者が、おなじ志の者の多いことを信じて、だれともなしにたのみを掛けるので、人ともどもに神を祭るところを、大きな力と想っていた社会でないと、じっさいは思い切つてやれぬことであつた。

一〇、神社合祀

この協同の信心ということは、もとは村かぎりの小さい氏神うじがみ
 の社やしろにおいて生まれ、後のちにおいおいと国の大神おおかみの、たがい知
 らぬ信徒のあいだにも拡ひろがったものと思うのだが、それにしては、
 その本元ほんもとの村や大字おおあざにおいて、やや結合のゆるみ始めたのが、
 少し早過ぎるように思われるのは残念である。しかし、そうなっ
 た原因には、同情しなければならぬ点がいくつもある。その一つ
 は、村で産土うぶすなとも、また氏神ともいうお社がきゆうに大きくな
 ってきて、これをお祭り申す人員が増加し、なかまがいくぶんか
 雑駁ざつぱくになったことである。それはかならずしも明治の御代みよのお
 わりに近く、政府の手で行なわれた神社合祀じんじやごうしによつて、始まつ

たことではない。がんらい産土というのはもとどころ（本居^{ほんきよ}）、

自分の生まれた土地というだけの意味であつて、そこには氏^{うじ}ごとに、一族ごとに、それぞれのちがった氏神を祭っていたのを、故^ふ郷^{さと}が一つで共に出て働いておりながら、めいめいその本居の神

がちがうのはこまるという考えがおこつて、だんだんとこれを一つにするほうへ進んできたものらしい。村にとどまつている人々の中でも、隣の氏神祭りは、人数が多くて、にぎわしく楽しそうなのに、こちらは集まる者がすくなくて心ぼそいという感じがして、時によつては合同してもう一つあらたに御社を建てた。たとえば近くに有力な寺などがあつて、そこに祭っている鎮^{ちん}守^{じゆ}の神の祭りに、住民が参加することになったなどはそれであり、また

外^{ほか}からきた人に勧められて、とおくの尊とい^{おおかみ}大神をお迎え申したのもそれであつた。しかしそういうことはしなくとも、村はおのずから産土さまとして共同に祭つてもよい大きな氏神が一つあつたのである。我^{わがくに}邦では、どんな小さな部落でも、大ていは三つ五つの氏が連合して住んでいる。そうしてたがいに縁組をして、血のつながりは、かえつて一門よりも濃くなつたものが多い。こういう人たちが相談をして、村にただ一つの大きな神社を維持しようということになつたのだから、話はまとまりやすかつたはずである。書いたものにはなつていなくとも、この歴史はまだ記憶する者がある。いくつかある氏々の氏神の中でも、いちばん家^{いえか}数^{かず}が多く、またしつかりとした人のいる氏の神さまを立てて、

そこを中心の神社とし、一同がそこで同じ日に祭りをすることになつてゐるのがふつうのようで、もとよりそのためにほかの氏々の神を廃したのではなく、みんなその場処ばしょに集めたものと解していたのではあろうが、こうなつてくるとそれぞれの氏族の、慣例や利害の差がすこしずつ現われて、古来定まつた常の祭りのほかは、おりおりは一同の一致することのできぬ場合が生ずることをまぬかれなかつたのである。

氏を同じくする一族の結合を、今日ではマキという地方が多いが、そのマキの内でも、氣持のちがうことはまったく無いとは言えないが、その総本家そうほんけの権能はひじょうに古くからのもので、これに楯突たてつくことは世間からも許さないが、多くの氏々の連合に

はそういう中心の力がよい。それを統一するためにまわり神かんぬ主し、または宮座頭屋みやざとうやというかたい約束がむすばれ、あるいは世せし襲ゆうしんしよく神職の家筋いえすじというものが定められたのであるが、これがまた二つとも、あたらしい時代になつて取りつづけて行かれない事情があらわれた。外からきて一時寄留きりゆうする人の多いためなく、村のなかでも大分だいぶんまえから、この点については少しこまつていたのである。

一一、個人祈願ということ

わたしたちのいう個人祈願こじんきがん、一人かぎりの願いごとを神さまに

申しあげることが、日本の神道しんとうにもはじまつてきたのはこの結果であつた。仏法ぶつぽうのほうでも国家のため、または少なくとも一つの郷土のために、祈願をするのがふるい教えであつたのだが、中古以来そのほうはすたれてしまつて、ただ誰かたれのために何事かをいの禱るものばかり多くなつていた。それを朝晩見なれているのだから、神のお社やしろに向かつて一人願いをするのも、格別あやしいこととは思わなかつたけれども、これは我邦わがくにの昔の世にはないことであり、おそらくは神さまにも御意外おんいがいなことであつたろう。神仏のさかい目というものが、このためにいよいよはつきりとしなくなつた。村では毎日のように参詣をしにくる人、そうでなくとも月の三日じつは、かかさず社頭を拝する人と、例祭の日のほかは

一ぺんも顔を出さず、または祭りにすらいそがしいと出てこぬ者があるようになり、家々としても老人か主婦かが代表して、一人はかならず参っている家と、まったく知らぬ顔をしているのができて、かみしんじん神信心の差等が日に増しいちじるしくなってきた。そういう冷淡な人と仲間になつて、祭りをいとなんでも心願しんがんがかなうだろうか、あやぶむ者の多くなつたのも自然である。そこで一村のなかにもまた特に敬神の念の深い者ばかりの、共同ということがはじまつてきた。神社が合祀ごうしせられ氏子うじこが多くなると、そういう小さい団体はかずを増して、たがいに相手の心持こころもちが通ぜず、思いおもいなことをするようになったのである。

信心という言葉の意味が、これにともなつてだんだんと變つて

きて、のちにはかえつて迷いの多い者、大小さまぎまの村の外の神々にも、または神にも仏にも、そちこち、わずかずつ祈願をかけてあるくような者を、信心深い人ということになったのは、考えて見るとへんな話である。もちろんそういう人は外からは笑われる。そうして神信心という言葉までが、そのためにかるがるしく見られるようになったのは悲しいことであつた。しかし村には決してそういう新らしい信心者ばかりがいるわけでない。今でもまだ人のもつとも大きな災厄さいやくきなん危難をすくつてくださるのは先祖代々いつの世からとも知れず、お祭りもうしている村の神さまよりほかにはないということを、信じてうたがわぬ者は半数以上で、それあるがために、国に大きな事件のあるさいにも、なお国民は

向うところを失わずにいられたのである。神のご威力とおぼしめしとを信ずるのは、理論ではなくして経験であつた。親々がみずから体験して、それを最愛の子や孫に語りついたものがよく記憶せられ、その方式のとおりに今も祭りをしてさえいれば、いつでも、わたしたちは安心してゐることができる。これに反して少しでも、以前の条件とはちがつてゐることに気がつく、口には出さずともそれが不安の種^{たね}になつて、何かその代りになる補充になるものを探し出そうとする。小さな色々の堂^{どう}や祠^{ほくら}、またはあたらしい講や教団の現われたのもまつたくそのためであつた。

一一、千垢離

たった一軒の家のうれしいや悩みでも、それが村人のひとりであるかぎり、けつして神さまは打ち棄てて置かれなかつたことは、まえに紹介しておいたむしろばた蓆旗の繩を、うじがみしや氏神社から子の欲しい家へ、引いてきているのを見てもわかり、または逆齒さかばの生えた幼児のために、村の人が集まつて日中ひじゅうばた機を織るのを見てもかんがえられる。こういう信心のもつとも明らかにあらわれているのは、村で大事なうじこ氏子がたいびよう大病にかかつて命のあやういときに、多くの人が出て祈願をするせんどまい千度参り、またはかずまい数参り、たびまい度参りともいうものであるが、これなども最初はもつとひろく、村に何事か大きな憂うれい事がある場合、ことに五月六月におしめりがなくて、

田が植えられなくて苦しむときなどのほうが多かった。女や子どもまでを加えても、村では千人という人はなかなかそろわない。

たぶんはめいめいが二度も三度も、かえつてはまたお参りに行くので、千というのは精確でなくとも、じっさいは千度せんたびよりも多

く、一日の内に神さまの前に出て、口々に同じ言葉を申しあげて、神さまを動かそうとしたことと思う。わたしたちが見てさえ感動

せずにはいられないのは、漁船が沖へ出ているのに暴風雨が起こつて、船がつぎの日までも帰つてこぬ場合などに、母とか妻とか

姉妹とか小さな児童などがあつまつて、この千度せんどまい参りをするありさまである。隠岐島おきのしまの海士村あまむらなどでは、この日の祈願にさき

だつて、浜の小石を千個だけひろいよせて、めいめいがそれを一

つずつ手に持つて、お参りしては拝殿はいでんに置いてくるそうである。人がこれだけ一心になると、たとえば船がよその港ににげこみ、または嵐と入れちがつて無事に帰つてきたとすれば、それを千度参りの力だと思い、また神さまのお助けと信ぜずにはいられなかつたはずである。

そうしてこの浜の小石というのは、本来はただの数取りかずとではなかつたのである。すなわち海の潮うしおをもつて、まず身と心を潔きよくしてから、祈りを神に申すという意味があつた。海から遠くはなれた山奥の村々でも、雨乞いその他の切なる願いがある場合に、やはり川の流れにひたつて一つずつ小石をひろい、それを手に持つてぬれたままで参るまいことが多い。それを千度垢離せんどごりとも千願垢離せんがんごりと

もいうのは、多くの人がくわわり、また数多く参るからでもあるが、もとは瀬^せ垢^ご離^りであつたと見えて、これをまたセンゴリという村も少なくない。三河^{みかわ}の山村ではこういうさいに、七カ所で水を浴びるので七瀬^{ななせ}垢^ご離^りといい、遠州の気多^{けた}川^{かわ}すじではまた五十瀬百瀬などといって、だんだん上流のほうへ場所を変えて、水垢^{みず}離^{ごり}を取つてお参りをする者もあるということである。垢^ご離^りを取るというのは妙な言葉で、どうしてこんな文字を書くのか、まだはつきりとしていないが、ともかくも以前は神を拝する人々が、いずれも全身に水を浴びてから、はじめて神前に近づくのがふつうであつた。今でも古いお社^{やしろ}のそばには御手洗^{みたらし}川^{がわ}が流れており、またそれをもつとも簡略にしたのが、多くの社頭に見られる銅や石の

ちようずばち
手水鉢である。近ごろではここで手を洗わぬ人さえ多くなり、
いわゆる垢離もいっぱんに手がるになつてしまつたが、なお特別
の切なる祈願だけには、真冬まふゆでもこれをしている人があるのであ
る。

一三、見舞参り

村々の年をとつた女の人たちが、わが子わが夫おとの安否を気づか
うのあまり、ふたたび昔の本式の潔斎けっさいをしている者は、近いこ
ろは非常に多くなつていたようであるが、土地の住民が集まつて
きて、同じ神さまに共同の祈願をするために、千垢離せんごりをとる場合

はだいたいになくなった。そうしてふしぎにただ一つだけが、まだほうぼうに残っている。それはある一軒の家に重い病人がある場合で、これには身内みうちや出入の者だけでなく、組合または部落総体から、一戸一人ずつがでて千度詣せんどもいりをする風習が、しばしばこの千垢離をともなっているのである。これを見舞みまい参りといふところもあるのを見れば、今では半分は世の中の義理、前には自分の家も同じようにして助けられたとか、いつかは此方こちらもそうした世話になるのだからとか、村の附合つきあいということが根になっているのだろうが、これが氏神の御心になつて、危篤な病人を恢かい復ふくさせる力になるという事を信じていなかったら、単なる社交だけでは、これまでの協力をなしあう者はなかったらうと思う。

つまりは願ひ事があまりにむつかしく、個人の智恵や技術だけでは^{じようじゆ}成^じ就^{じゆ}の望みがないと思う場合でも、これがただ一つの家だけの私の利益ではなくして、村^{むらびと}人多数のともに切望するところでありますということを明らかにすれば、それならば助けて見ようというおぼし召^めしが神にもあつて、お蔭^{かげ}を被^{こうむ}ることが多いということを、久しくわたしたちの祖先は経験していたのである。村に住む者が吉凶禍福、常にたがいに助け合わねばならぬという考えかたが、たまたまその信仰と結びついたものとわたしは思う。この千度参りを村の人にしてもらつて、危^{あぶ}ない命を取りとめたという者の話なども、注意しておれば折り折りは聞くことができる。土地によつては千度参りの人たちは、社^{やしろ}の前に立つて大きな関^{とき}の

声をあげる。それが病人の枕もとまで聴こえてくることもしばしばある。あるいは参詣の人たちが垢離こりを取った姿のままで、帰りにどやどやとその家に寄って行くこともある。こういう声を聴くと、たとえばようもなく心丈夫こころじょうぶになり、また元気がつくものだそうである。あるいはこういうところにも共同の祈願の隠れたる効果があるのかもしれない。

ところがこの千度参りの人の数というものは、じつさいはだんだんに少なくなってきた。ことに交際のかぎられた都会の人々などはお百度ひゃくどはただ一人で踏むものと思い、なんべんも同じところへ行くことを、お百度を踏むという諺ことわざさえある。大きなお社の鳥居の脇にはお百度石という石が立っていて、手に数取かずとりの

紙^{かみ}縫^{より}や竹の串^{くし}をもつて、脇目^{わきめ}も振らずにそこ社殿とのあいだを、往^ゆき返りする人を毎度見かける。これも病人のためか、または遠いところにいる旅人のための、切なる願い事であることは同じなのだが、今ではそれがもう純然たる個人祈願になってしまっているのである。

一四、千社参り

一つの神さまのお社^{やしろ}へ、百度二百度のお参りをする代りに、つづけて数多くの宮を巡^{まわ}つてあるくという風^{ふう}も、大分前^{だいぶんぜん}からはじまつている。ちかごろではこれもきゆうに盛んになったが、以前も

春と秋の時候のよいころに、または田植のあとの休み日などに、仲間を何人もこしらえて百社参り、千社参りをするのも神信心かみしんじんのうちに算かぞえられていた。京都は大きな神社の数多い土地であり、朝廷でもなにか事があると、一時に全国諸社の奉幣ほうへいを遊ばすので、なにか一つの社だけに願掛けがんがけをすることが、他ほかをおろそかにするように感じられたのであろう。この風習の起こりは都方みやこがたであつた。最初はもっぱら祈願のためだったかも知れぬが、こうして季節をえらみ休日を待ち、または好い同行をさそい合わせるようになる、半分は遠足やハイキングに近い。江戸ではもう二百年近くも前から天愚孔平てんぐこうへいという人がやり出して、千社札せんしやふだとすることがはじまつた。これなどはただ自分の名をいろいろと小

札に印刷して、それをできるだけ多くの堂宮の戸や柱にはつて
あるくだけで、刷毛のついた継竿などを用意して、手のとどか
ぬような高いところにはり付けるのを手柄てがらにしていた。その札が
今でも思いがけず、とおい村里のお社の軒にも見られるのは、ま
だそういうことをする人が少しはあるのである。それにくらべる
と近ごろの千社参りなどは、大ていは外にいる者のためであつて、
ただじつとしては居りにくいような心持こころもちから、そうしてある
く者が多いように思われるけれども、これまでなんの縁も親しみ
もなかった他処よそのお社に、そう数多く願いをかけて見たところで、
それが集まって一つの大きなお助けたすになるとまで考えることもで
きず、むしろ念力ねんりきの分散に帰することはわかつているはずで、

言わばただ一つのまじないだから試みにそうしてみる、みんながするのを見れば効果があるのかも知れないというような、淡いかな望みから出たもので、これもたがいに祈願のすじをよく理解した、よい協力者の得られなくなつたためだとすれば、同情しまた深く考えて見ねばならぬことである。

人が独りひとの力ではどうすることもできぬことでも、多数たつごうの志を集めるならば何とかなるということを、千人針せんになはりというものはよくみとめている。しかしそこには人間以上の高くすぐれたお力があつて、われわれの願いに応じてくださるという信頼はないのだから、これもなおまじないの一種でしかない。日本人のかつてしつかりと持っていた信心は、けっしてそんなものではなかつた。

一つの願い事が公けのものであり、村を同じくしてともに住む者の、ひとしく願わしいものであるときまると、たつた一人の村民を活いかせておきたい、またはたつた一人の赤子あかごを増加したいというような小さな願望にも加担して、その一軒の家を助けて、というよりもむしろそれに代つて、協同の祈きとう禱に熱中したのであつた。それ等とくらべると何千万倍とも知れないほどの大きな願い事は、今やわたしたちの心の中に燃えあがっているのである。そうしてその願いの筋には、各人寸分の差異もない。それを一つにまとめて貫徹させる意気いごみだけが、欠けていつまでも備わらずにいるわけではないと思う。

一五、勢祈祷

岡山県の各郡などでは、村々の氏神社^{うじがみしゃ}で行うこの協同の祈願祭を、総参^{そうまい}りといい、またせい参^{まい}り、せい祈祷ともいつている。このセイももとは千垢離^{せんごり}などの千だつたかも知れぬが、今いる人たちは皆いきおいのセイと心得て、勢参^{せいまい}り勢祈祷^{せいきとう}と、字にも書いている。これはもつともなことだから私たちもそういう言葉を使おうとおもう。勢祈祷も近ごろは病人などのためばかりだから、だんだんと人数が少なくなっているが、この大きな総^{そう}国^{こく}の祈願を機会として、できるならあるだけの人が参加し得るような、かんたんな式を設けたいものである。ふつうの勢参^{せいまい}りでは、まず

神前にうやうやしく拝をしてのちに、歸りに一同がウワーと高い声をあげる。これを聞ときの声ともまた総そうの声ともいった。他の府県の千度詣せんどもいりにもこれはよくあることで、あるいはエイエイと力のこもった大声を出すので、これをエイエイ祝詞のつとという土地もある。もとは年越としこしその他の定例の祭りにも、氏子うじこが集まつてこの総そうの声、またはエイエイ祝詞をあげるお社やしろがあつたそうである。古いむつかしい文章で、祭りの目的をくわしく申しのべる必要は少しもない。神さまは赤子あかこの初宮参りはつみやまいの日から、もう氏子をござんじであつて、それが心に何を願っているかもよく知つていられるものと、昔からわたしたちは教えられていたのである。ただ必要なことは諸人しよじんの熱意が満ちあふれ、しかもみな揃そろいである

ことを明らかにすることであつた。それが明らかになると祈る人々みずからに、神は聴^きき受けたまうべしという信仰が生じたのである。この必要は多数の国民の必要である。少しでも人の熱意を冷しきますようなことは、如何^{いか}なる立場にある者でも、ともどもにこれを慎まなければならない。

親棄山

一、有名な昔話

都会で育った人たちは物わかりが早く、思いやりのある人が多いのだが、周囲がいそがしくて、ゆつくりと話を^きして聴かせる者がすくないので、なにも考えずに大きくなるというようなこともないとは言えない。こんどはちがった土地で年を迎えて、見るこ

と聞くことが皆あたらしく珍らしく、それだけにまたこちらもよく注意をするので、かえってきてからの話の種はどつきりできることと思う。そういう中でもためになりまた楽しみになるものを、ついうっかりと聴き流してしまわぬように、わたしなどが若いころから聴きためて、だんだんと深い意味のわかってきたいろいろの昔話のなかで、おやすてやま親棄山というかわった話を一つして見よう。

親棄山とはけしからぬ話、聴くも耳のけがれと思う人もあろうが、これはそういう驚くような話題をだして、まず聴く者の注意をひき寄せようとする手だてであつて、じつさいは人に孝行をすすめる話なのである。人によつてはまたきろうこく棄老国ともいうが、この名称は外国からきている。昔々、いつのころとも知れない遠い

昔、そうしてまた何処にあるかもはつきりしない、ある一つの国に、親が六十歳になると、山へ棄ててこなければならぬという、とんでもない習わしがあつた。それが一人のよい子ども、もしくは心のやさしい者の行いによつて、もう永久にそんな事をする者がなくなつたという話、その話し方がまた變つていておもしろいのであつた。

この話は日本全国にいつてもよいほど、ひろくほうぼうの土地に行われていた。もとはおそらくは誰でも一度、大きくなるまではないかならず聴いたものと思うが、今日はもう知らぬ子が多い。そればかりか地方によりまた家によつて、その話し方がよほどちがつていて、一人で二通りの話を知っている者はまずないから、

ここと他処^{よそ}とはどういう風^{ふう}にちがうかということに、気がつかずにいるのがふつうである。わたしはよほど久しい前から採集を重ねているので、大よそはその土地土地の変化を語ることが出来る。それがこれからの人にも、好^よい参考になるだろうと思うのである。

二、四通りの話しかた

話を親棄山^{おやすてやま}ということと同じで、事がらのかなりはつきりとしちがっているのが、私のしっているだけでも四種はある。そうしてその二つは、明らかに外国から採用したもの、他の二つはたぶ

ん我^{わが}邦^{くに}に、よほど古いころからあったものである。試みいたれか話の好きな老人にたずねてごらんなさい。事によるとまだ私も知らぬような、また別な珍らしいのを覚えているかも知れない。それからまた次にわたしのいう話を二つ以上、つなぎ合わせて一つにしているかも知れない。どうしてそういうようになるかということも話してみたいが、その前にざつとその四通りの話をくらべて見よう。

第一種の話というのは、ある男が六十になつた親を^{もつこ}畚^{あじか}とか簣^{あじか}と^{むすこ}かに入れて、小さい息子に片棒をかつがせて、山の奥へ棄てに行く。やがて簣も棒もそこに置いてかえつてこようとすると、その孫が父にむかつて、これは家へ持つてかえりましょう。今にまた

いることが有るからといった。それを聴いた男はああそうだったと心づき、親を棄^すてることを止^やめて、またつれてもどったというので、この話はよほど古いころから、支那で有名な話だったということで、いろいろの本にも絵にも彫刻にもなっている。本によつてはその孫の子が、わざとこういうことを言いだして、父の不孝の行いを諫^{いさ}めたのだから、孝行者^{こうこうもの}の手本^{てほん}だといっているが、それならば父についてわざわざ山奥まで出かけるまえに、そう言つてもよさそうに思われる。日本の話では、少年がただむじやきにそんな事を言い出したので、父がびつくりしてなるほどそうだったと思ひ、善心に立ちかえつて棄ててかえるのを止めたと話すものが多いが、いずれにしたところで、これはいささか感心しな

い利己主義であつた。東北地方に行われる一つの例では、その息子が父にむかつて、わたしにはとてもそんな事はできぬと言つて泣いたので、それに感動してふたたび老人を、つれもどることになつたという風^{ふう}に話しているものもあるが、ともかくも孫の少年の言葉によつて、親を山に棄てるというような悪い行いを、止めたという点まではどれも皆同じである。

三、老人の智恵

第二種の話し方は、これよりも今すこしこみ入つていて興味がある。むかしむかしある国の王が、年^{とし}寄りはいらぬものだから皆

棄^すてしまえという命令を出して、それにそむいた者は嚴罰を受けることになっていたさいに、一人の孝行者がどうしても棄てることができず、親を床^{ゆか}の下とか土手^{どて}の陰とかにかくして置いて、そつと毎日の食物をはこんで養っていた。そのうちに敵の国から、こちらの人の智慧^{ちえ}をためそうと思って、むつかしい問題を出してきた。これに答えぬと恥でもあり、また賢い人がないと知つて、攻めてこられるにちがいないので、誰かこの難題を解^とく者があつたら、望みしだいの褒美^{ほうび}をくださるということになった。親をかくしていた孝行なせがれがその話を親にすると、そんな事はなんでもない。こうすればよいのだとかんたんに教えてくれた。それを王さまのところへ申し出て、賞与の代りには親を棄てなかつた

罪^{つみ}をゆるしてくださいというと、王もはじめて老人は賢いものだということに心づき、かつは息子^{むすこ}のやさしい心掛^{こころが}けにかんしんして、約束の褒美をあたえると共に、さつそくそんなまちがった命令を取消^{とりけ}したという話で、これも我^{わが}邦^{くに}へは支那からはいってきたらしいが、もとの起^{いん}こりは印度^{んど}であり、『雑宝蔵^{ぞうほうぞうきよう}経』という仏法の^{きようもん}経^{きん}文^{ぶん}のなかに、出ているということまで今日ではもうわかつている。

しかし、この話の日本にきたのも古いことで、人によつてはこれをこの国であつたことのように思っている者もあるくらいに、今なおほうぼうの農村において語り伝えられている。年を取った人たちには深い智恵があつて、それに教えてもらえば敵の国のあ

などりを防ぎ、またはたくさんのお賞与を受けることもできる。だから大事にしなければならぬ、棄てたりなんかするのは損だというのは、考えて見ると誠まことにいやな話で、とても日本人などのもつともだとは思えないりくつであるが、それとは関係なしに、この昔話のおもしろかったのは、話のなかに出てくるいくつかの試験問題というのが、いずれもちよつと聴きけば不可能のようで、よく聴いてみればなるほどそうだなと思うような、智慧の練習になるものばかりだったからで、親を棄てるなんていうことがあるのかと思う子どもたちでも、このほうには耳をかたむけずにはいられなかったのである。村で昔話のじょうずと言われる老人などが、おどけまじりにこの話をして、だから年としよりは大事にせねばなら

ぬということだなどと、氣がるに笑っていたようすが目に見えるような氣がする。

四、七曲の玉の緒　その他

そこで一体どういう種類のめずらしい難問題が、老人の力でなくてとはとくことができなかったと語り伝えられていたかということとを、少しくわしく話して見ると、日本ではそれが七つほどあつて、どれもこれも相応にひろくそちこちに行われている。この七つのうち、五つはすくなくとも外国からはいつてきたものであつた。ただし我^{わがくに}邦では印度^{いんど}のように、敵の国がこちらの智慧をた

めしにくるなどということはないので、それをごくかんたんにとの殿さまの懸けんしやう賞で、これができた者には一万両の御褒美などというように、翻訳しているのが多いのである。

いちばん有名なのは七ななわた曲まがの玉の緒、一名を蟻ありどお通しという話、

これは今から千年も昔、紀貫之きのつらゆきの時代よりも前の事とさえ言わ

れている。大きな玉に穴がとおつていて、その穴がなかで七つも

曲まがっている。これへ緒をつらぬいて見せてくださいという敵方てきがた

の望みである。これにはだれもよい考えがなく、なんと返事をし

てものかと困まどっていると、老人がそれを聴きいてそんな事はなんで

もない。蜜みつを一方の口の穴に塗ぬっておき、蟻ありの足に絹糸きぬいとをゆわ

えて、こつちの穴から入れてやれば、蜜の香かに引かれてきつとい

つぼうへ抜けて出る。その糸をだんだん太くすればよいと教えて
 くれた。このためにもちろん親を棄^すてずにいた罪はゆるされたの
 みか、のちに神にまつて、ありとおしのみようじん蟻通明神というのがそれだ
 ということになっている。その話は古い書物に書いてあるばかり
 でなく、今も国民の口から耳へ、切れ間^まもなく語りつがれている
 が、村々の子供には玉というもの、それに七曲^{ななまが}りの穴を通したも
 のなどということは考えにくいので、信州の南のほうではこれを
 法螺^{ほら}の貝に緒を通すといい、加賀の江沼^{えぬま}郡などでは榮螺^{さざえ}の殻^{から}の底
 に穴をあけて、蟻をはわせて見よと、いったことにもなっている。
 そうしてこの話をかんしんして聴く者は、大ていはそれがそのよ
 うに遠い昔から、日本にあつた話だということを知らずにいるの

である。

それから次には木の本末^{もとすえ}、および親子馬^{おやこうま}という話があつて、

二つともに八百何十年もまえの、『今昔物語^{こんじやくものがたり}』という本に

出ている。なにか珍らしい三尺ばかりの木の棒の、同じ太さにけ
ずったものを持ってきて、これはどちらが先のほうで、どちらが
根元^{ねもと}かあてて見てくださいと、言つてこられたので困つてしまつ

た。孝行な息子がそつとかくしていた父にたずねてみると、それ
は何でもない。水に流して見てやや沈むほう、または川下^{かわしも}にな

るほうがその木の根もとだと教えてくれた。また毛色のよく似た
同じくらいの馬を二匹ひいてきて、これは親子ですがどちらが親
ですかきめて下さいといった。これも年寄^{としよ}りの智恵によつて、秣^{まぐさ}

をあたえて見て、まず食べるほうが子馬の大きくなつたのであり、それを見ていてゆつくり後あとから食べにかかるのが親だと教えられ、その通りにして見たら果してすぐにわかつた。動物でも親の愛情は深いものだということを、この老人が知っていたのである。

五、外国で作つた昔話

それから是これとやや似た問題で、二つの蛇へびを持ってきて雌雄めおをくべつして見よといったこと、これは印度いんどでできたという『雜宝ぞうほう藏經ぞうきやう』にも出ている。すべすべとして絹きぬの敷物しきもののうえに、二ひきの蛇をのせて見ると、さわいではいまわるほうが雄蛇おすへびであ

り、じつと静かにしているのは雌蛇めすへびということを知っていたので、これがかんたんに答えることができた。今一つは大きな象ぞうを引ひぱつてきて、この象の重さは何千貫かという問いで、これも相応な難題だが、支那の古い本に出ている。日本では象の重さといつても子どもには考えにくいので、それをでつかい牡牛おうしという話にしている。支那のほうでは賢い子どもがあつて、それを考え出したことになっているのだが、我邦わがくにではやはり親を棄すてていた時代に、棄てることを悲しんでかくして置いた老いた父の智恵ということになっている。船を水に浮かべてその上にこの牛をのせ、どこまで沈んだかをしるして置いて、あとでその印しるしのところまで数多い石を積み、その重さを加くわえ算ざんすれば、わけなく牛の目め

方がかたわかるというのである。今の子どもならそうむつかしい問題でもないか知らぬが、以前はそれを聴きいてなるほどそうだったと思う者が多かつたらしいのである。

この以外にもう二つ、老人のおかげで答えられたという難題があつて、これだけは日本で昔話をする人たちが、思いついた趣向だったように思われる。その一つは灰あく縄なわ千束せんたばを献上せよ、今ひとつは「打たぬ太鼓たいこの鳴る太鼓」を持ってこい。どちらもただ人を困らせるだけの命令であつて、どうしてそのような無理をいったのかと思うようであるが、もともとこれは「殿とのさまの難題なんだい」という別の話のなかにあつたものを、借りてきてここに使つていたので、つまりは外国から持ってきた話の種では、じゅうぶんに

日本の子どもを楽しませることができないから、だれかが取りか
えてこれを年寄りの考え深かつた例にもちいたものと思う。灰で
縄をなうということはできる事でない。どうしたらよからうかと
思案投首をしているのを見て、縄を千束ないあげてから、それ
をそっくり焼いて灰にして、献上すればよいじゃないかと、注意
してくれたのがその父であつた。それでは崩れてしまうと
ものが、塩水によく浸してから焼くようにと教えたという話し
かたもある。「打たぬ太鼓の鳴る太鼓」などは何処にもない。さ
てさて困つたと困り抜いていると、それもなんでもない事だと小
さい太鼓の革をはがして、その中へたくさんはちの蜂を入れ、鋏を打
ちなおしてむりな殿さまのところへ持参させた。最後にその蜂が

ぶんぶんと飛び出して、殿さまや家来けらいを螯さしたので、もうこらえてくれとあやまった、などという笑いの結末にもなっている。

六、接穂と台木

少し長たらしかったが、これまでが親棄山の第二種の話であつて、日本にも流行し、また少しずつの作りかえもあつたとは言いながら、本来は支那または印度いんどにはじまつた昔話である。老人はかんがえ深く、またいろいろの好い経験よも積みたくわえていて、なんか困つたことがあると助けてくれる。それだから大切にしなければならぬと言うのでは、親孝行もなんだかかんじようずに

なつて、われわれの心こころもち持とは、一致しない。これがただおもしろいから外国から採用したものであつたのは、むしろそうなくてはならぬことのように思われる。

しかし、こういった外国の昔話が、千年も八百年もまえに、もう我邦わがくにの人たちに覚えられていたということは、こちらにもそれと半分以上似かようなものがあつたためだと見ることはできないであろうか。果樹や花の木の新種しんしゅというものは、実をもうで来て播まいて生やすよりは、台木だいぎを見つけてそれに接穂つぎほをするほうが早く成長する。そしてその台木には大ていは同種どうしゅの木が用いられる。親棄山の昔話にも、そういう台木になるものが前々から、日本にはすでにあつたのではなからうか、わたしは今それを考えて

いるのである。

そう思つて氣をつけていると、この二通りの話し方がいいに、日本にまたべつの親棄山があり、和歌で有名になつて信州更さ級らの姨捨山おばすてやまなども、その一つの残りの形であるような氣がする。姨捨山の話も中世の書物に多くあらわれ、ことには『大和物語のがたり』という本にあるのが、よく人に知られている。この文学のなかでは、棄すてられた人が親ではなくて、伯母おばだつたということになつてゐる。これはたぶん母親を山へ棄てたというのを、あんまりな話と思つてかえたのかも知れぬが、小さい時に母をうしなつて、親代おやがわりにそだててくれた伯母だつたというから、おだやかでないことは同じである。古い日本語ではウバは姥うばと書き、

母でもだれでも尊敬すべき婦人は皆ウバであつた。母をウバまたはウマ・アツパなどという言葉が、田舎いなかにはまだ行われている。京都だけには母をウバと呼ぶ習わしが早くからなかったので、これを伯母を棄てた話にあらためることが容易だったらしいのである。そうしてこの話は和歌を愛した人々のあいだでは、よほど以前から話しかたが大分だいぶんちがつていて、本を読む人の数が多くなるとともに、こればかりがひろく知られることになったものかと思う。そのもとの形かと思られる話が、まださいわいに田舎には今でものこっている。それとくらべて見ると新旧のちがいがよくわかり、本に出ているからそれが最初からの話だったと、言うことのできない証拠にもなるのである。

七、日本でできた昔話

このことをあまり強くいうと議論になり、みなさんの読み物にはむかないから、ここにはただざつと姨捨山おばすてやまとよく似た話が、今でも東北地方にはあるということを述べて、どこまで似ているかを考えて見ることにしよう。前にあげておいた二通りの親棄山、すなわち孫の言葉と老人の智恵才さいかく覚と、二つの外国できの昔話とちがつている点が、こちらの二つの話、すなわち姨捨山と親おや棄山すとではたがいによく似ている。たとえば親が六十になると棄すてなければならぬという、法律ほうりつがあつたということはこちら

では言わない。それから今一つは男は心がやさしく、いつでも孝養したいと思うのだけれども、その女にようぼう房ぼうがはなはだよくない女で、年寄りをうるさがって棄ててしまいなさいと始終すすめる。あまりいろいろというので男もついに負けて、姥うばをだまして山へつれて行くことになる。この二つの点は外国からきた二種の話にはなく、こちらの話では二つとも同じである。ただ『大和物語』などに書いてあるのは、その晩はちようど好い月夜つきよで、じつと山を眺ながめていると悲しくなった。それで男は、

我が心なぐさめかねつ更さらしな級きやおばすて山に照る月を見て

という一首の歌を詠よんで、またふたたび老女をむかえに行つたといふことになつていて、その後あとどうしたかをくわしくは語つていないのに、いっぽうの奥羽おうう地方などに行われている話は、その悪い女房が罰せられたという点がちがうのである。これは日本ばかりにかぎらぬことだが、昔話には舌切したきりすずめ雀のおもい葛籠つづらの婆ばばのように、または花咲はなさかじじい爺やうのとなりの慾深よくふかじじい爺やうのように、善人がしあわせをしたという話には、かならず悪い人が悪い報いを受けたといふことがついている。たぶんは聴きく者にはつきりとひびくように、また話を長くおもしろくするために、裏うらと表おもてと両面から、ていねいに説く習わしがあつたのであらう。そうしてこの民間の親棄山においても、やはり棄てられた老女のふしぎな幸福を

語るために、こんなありそうにもない悪い女房を、引っぱってくる必要があつたものかと思う。

この話は今のところ、わたしの知っているのが五つか六つあるが、土地によつて話し方がすこしずつちがつている。しかしだいたいは皆おなじ結果で、老母は常日つねひごろ心掛こころがけのよい人だつたゆえに、山の神さまのめぐみを受け、またはふしぎの幸運によつて、思うことのなんでもかなう打出うちでの小槌こづちという宝物たからものを手に入れる。それで地をたたいて、まず食べ物や着物を打ち出し、つぎに自分が若くまた美しくなり、それからその山さん中ちゆうを大きな町にして、りっぱな家をその中央に出現させて、店を開いたともいえば、酒屋になつたともいっている。悪い女房はその噂うわさを聴いて、

うらやましくてたまらなかつた。それでこんどは男にたのんで、自分を山のなかに棄てさせたが、あてにしていた宝物は手に入らず、ひどい難儀をして死んでしまったという話で、もちろんわが心なぐさめかねつというような、あわれな三十一文字などは残つてもいないのであつた。

八、昔話と和歌

古いころの昔話には、和歌をとまなうものが、このほかにもいくつかあつた。なかには歌だけが前からあつて、それを説明するために話を取つてつけたものもある。

おばすてやま
姨捨山などはその方であ

ろうという人もあるが、大ていの場合には話をする人が、作つたものと見てよいようである。もともと実際にそういうことがあつたわけではなく、いずれだれかがこしらえて、語りはじめたものであろうから、歌もその時からできていたとも考えられようが、それにしては少しばかり合点のゆかぬのは、同じ一つの話がほうぼうの土地にあつて、あるところでは歌がつき、またあるところでは歌なしにその話をしている。ことに外国に似たような話のある場合などは、言葉がちがうから歌までは持つてくることができな
い。それでわたしなどは昔話の聴き手、すなわち人の話すのを聴いて心をうごかした者が、後におぼえていてつぎの人に伝えるさいに、新たに歌だけをつけ添えることが、しばしばあつたものと

想像しているのである。その一つの好い例として、ちょうど第四種の親棄山、おやすてやまこれも我邦わがくにに古くからあつたもう一つの話を紹介して見よう。それがまたわたしの最初からの目的でもあつたのである。

その第四の昔話というのは、前の三つのどれよりも、かんとんでまた古風こふうであつた。あまりかんたんなためにこの頃では、後あとさき先におまけのついたものが多い。どうして親を棄てることになつたか、もとは明らかになつていなかったらしいのを、このごろでは外国風の棄老国きろうこくにならつて、そういう法令が出ていたやうにいう話もまれでないが、それではこの話の感動は少しうすくなるのである。最初はただ何かよくよくの理由があつて、どうして

も親を山の奥へ送って行くことになり、親もしょうちの上で子の背に負われ、山にはいつて行つたという話だったかと思われる。

老人の智恵という話が多くは父親であるに反して、このほうは母親だったというのがふつうである。その母が子の背に負われていて、路々みちみち左右の木の小枝を折ってゆく。または草をまるめて棄

てて行つたとも、あるいはけしの種子たねを少しずつ播まいたともいうところがある。どうしてそのようなことをなさるか息子むすこがたずねると、おまえがかえって行くのに路に迷わぬように、栞しおりをして

置いてやるのだと答えたので、親の慈愛に深く感動してしまつて、何がなんであろうとも、この親を山にはのこして置けないと、ふたたたびその場からつれてもどつて以前にもまさる孝行をしたとい

う、いたってみじかい話だったようである。けしの種子を撒まいて行くという話の、まちがいであつたことはだれにでもわかる。そんなものを撒いて置いても、息子のかえり路の役には立たぬからで、これはお銀ぎんこぎん小銀というようなまたべつの昔話で、妹が春になつてから、けしの花の咲く路をたどつて、姉をたずねてくるようにこの種子を蒔まくという話をつぎ合わせたもので、もとの話ではなかつたのである。

九、母の愛情

それよりも現代行われている各地の話には、この後へもつてき

て木の本末もとすえや親子馬おやこうま、または灰繩あくなわせんぞく千束などをつけたした
 ものが多く、そのためにまた負われたのを父親とし、その親が詠よ
 んだという和歌までを取りかえているものがある。こんどは日本
 の南の端の一例をあげてみると、鹿児島県の甕こしきじま島しまなどでは、
 その父が息子むすこの背に負われて木の小枝をおつて葉しおりとし、わけを問
 われるとこういう歌を詠んだ。

道すがら枝折しおり々と折り柴しばはわが身見棄みすてて帰る子のため

それで同行していた孫がその歌に感動して、父を説きつけて祖そ
 父ふをつれもどったという点は、第一種の畚もっこをもつてかえろうとい

った話であり、それから家にかくして置くうちに祖父の智慧によつて、蛇の雌雄めすおすと木の本末とを見わけよという敵国の難題をといた第二種の話とを、継つぎたしているのである。話としては外国から輸入したもののほうが、あたらしくまた珍らしいのだから、それが流行したのはやむを得ないが、そういう中にもなお昔からのもつともかんたんな話と和歌とが、遠い島々にはまだ痕跡こんせきをとどめていたのである。

だいたい大体からいうと、昔話はだんだんと興味深くなり、笑つて聴くようなものが多くなつてきている。おもしろいと思つて聴きく者がふえてきたかわりには、心からこれに感じいつて、一生わすれずにまた次の代の若い人たちへ、話しておこうとするような者は

すくなくなつて行くように思う。甕島の老人が詠んだという道すがらの歌なども、古く伝わっているのはもつとよい歌であつた。そうして女の歌であり、また涙をこぼして感動した母親の歌でもあつた。

奥山おくやまにしおる葉しおりたれは誰のため身をかき分けて生める子のため

これをまた「我が身を分けて」と言い伝えている人もあるが、それでは力がずっと弱くなる。身をかき分けてという歌うたことば言葉は、母の口くちずからでないと出てこない言葉であつた。わたしの想像す

るところでは、はじめに和歌を添えてこの昔話をしたひとは、ある一人の母であつた。若いころは心のやさしい娘であつて、かつてしみじみとこの昔話を聴いて、一生のあいだおぼえていたのである。それを年とってから娘たちに、またはかわいい孫たちにして聴かせる時に、思わず知らずこういう歌が心に浮かんで、それを山に棄てられにゆく老女の作のようにして、高い声を出して歌つたので、じつと聴いていた若い女たちも、親のありがたさをじんと胸にひびかせて、おそらくは皆涙ぐんだことだろうと思う。わたしは母にわかれてからもう五十年にもなるが、それでもこの歌を聴くと思ひ出して、いつも孝行の足りなかつたことを悔み^{くや}歎^{なげ}かずにはいられない。

マハツブの話

一、遊戯と觀察

マハツブってなんだろう。そういう人はきつと多いと思うが、それを承知の上でわたしはこの話をする。めずらしい名まえは「ペン聴きくと、いつまでも覚えていものだからである。

マハツブはまたマノハチブともいう人がある。奥羽おうう地方もずつ

と北のほうで、子どもたちのよく知っている一種の植物に、そういう名のものがある。本名はイガホオズキ、またオニホオズキともいうそうで、皆もよく知っている酸漿ほおずきとともに、茄子科なすかに属する草なのである。日本では北から南のはしまで、どこに行っても見られる野生やせいの草だというが、自分などはまだこのおかしい昔話を聴いていなかったもので、見たことはあるだろうが実はもう覚えていない。それでこんどはまず皆さんのために、マハツブの話をして見ようと思うのである。

その前に一つ考えておきたいことは、このごろの酸漿は人が栽培して売りにくるので、実も大きく色も美しく、遊びかたもだんだんとかわって、名は近くても毬酸漿いがほおずきという草の実と、あんな

りよくは似ていない二種のものになった。しかし丹波酸漿を畠
で作り出したのは後のことで、店や縁日えんにちで売ることになったの
は、都会でもそう古くからではないのである。以前の村々の少女
たちは、酸漿もやはり野や路みちばたに生えているのを、採って遊戯
にもちいたのであつた。酸漿の遊びかたはあのよく熟した実をも
んで、ネヤマノネホズキという芯しんを抜き出し、袋にしてかんで鳴
らすことがその一つで、これは多分ずっと前からあつたろうが、
丹波酸漿の口にいったいになるようなのが出てから、この遊びが
ことにおもしろく、ほかのあそびかたは忘れてしまうようになつ
た。千成酸漿せんなりほおずきだけはまだ採ってくる児こもあるが、ただの毬酸
漿などはかえりみる者がなくなつたのである。

それからなお一つ、毬酸漿では遊べない古い遊びかたがあつた。それはこの二種の酸漿のもつともいちじるしいちがいがからきているもので、昔の子どもにはまた注意せずにはいられぬことであつた。ふつうの酸漿の他のもの^{ほか}とかわっている点は、うてなが実の成熟につれてだんだんと伸びてきて、しまいには繋^{つな}がつて袋のよ^ぬうに縫い合^ぬわされ、そっくりあ^{あか}の紅い実をつつんでしまつて、蠅^{はえ}や小蜂^{こばち}に吸^すい枯^からされることを防ぐことである。毬酸漿のうてな^{なす}も茄子などと同じに、実とともにだんだんと大きくなつては行くが、それが途中で止^とまつて、実のぜんたいをおおい隠すまでにはならない。酸漿だけは完全な袋になつてしまうから、永^{なが}く木につけておくと袋の表^{おもて}皮^{かわ}がはげ、繊維だけが蚊帳^{かや}のよう^なにのこつ

て、紅い提灯あか ちようちんだといって持つて遊ぶことができたけれども、
 毬酸漿おずきのほうにはそういう遊びがない。イガホオズキまたは鬼おにほ
 酸漿おずきという名まえは、茎くきに刺毛とげがあるところからつけられたの
 だが、それよりも小さい天然観察者たちには、この点がもつと注
 意を引いていたのである。そうしてマハツブという東北の方言な
 ども、あるいはこういう点にもとづくものではないかと、わたし
 は想像している。少なくともわれわれの一つの昔話だけは、たれ
 が始めたものか、この点を説明しているのである。

二、苧績み宿の夜

そこでいよいよマハツブの話になるが、昔の昔の大昔、酸漿ほおずきとマハツブとは姉と妹、二人の同胞はらからであつたという。この二人が相談をして、めいめい一枚の麻あさのきものをこしらえようということにきめ、苧お糸を績うみはじめた。苧お糸を績うむということとは、もう見たことも聴きいたこともない子どもが多くなっているが、麻の皮をはいで蒸むして乾ほしてよくさらして、白くきれいな部分だけを、爪の先で細かくわつて、つないで撚よりをあたえて一すじの糸にして行くことで、蚕かいこのはく糸の細いものを五つ七つと合わせて行くのとは、仕事がまるで反対になっている。それで同じひとつかみの麻の苧おでも、細くさけば糸が長く、したがって長い布が織れるが、下手へたにあらあらしく太く取ってしまうと、地じの厚い布は

できてすんしゃくも寸尺は足りなくなるのである。木綿もめんが日本にふきゅうするまでは、麻布あさぬのを着ぬ日本人は一人もなく、苧を績み布を織らぬ女も皆無かいむにちかかった。それでこういう事柄はみな常識となつて、わざわざ言い教える人もなく、今となつてはかえつてこのめずらしい昔話の心持こころもちを、わかりにくいものになっているのである。

話は土地によつて少しずつちがつていようだから、これからもまだ数多く、たずね集めて見るひつようがある。青森県の東の端はし八戸市の附近の村里むらさとでは、こんな話になっている。二人の女おんな兄な弟きょうが苧を績んで着物を織つたが、姉さんのほうはたんねんな辛抱しんぼうづよい氣質で、できるだけ糸をほそくして、じゅう

ぶんな布を織りあげたから、とつぷりと頭から爪さきまで、身をつつむような着物を縫いあげることができた。ところが妹はせつかちで仕事がいらいなので、苧糸が太過ぎて一反の布になるだけには取れず、それで衣装をしたてたら腰までしかなくて、丸いおしりが丸出しまるだになってしまった。その姉というのが今の酸漿であり、妹はマハツブとなつて今でもお尻しりを出しているという。

マハツブとホオズキとどこがちがうかを、小さいころから見て知っている娘たちは、はじめてこの話を聴いてぷつと吹き出し、またはおなかの皮の痛くなるほど、笑いこけぬ者はなかったことと思う。睡ねむいさかりの人たちは独りひとではとても夜なべはできない。そのためばかりとも言えないが、冬の夜長よながになると五、六人以上、

じゅんまわりに朋輩ほうばいの家にあつまつてきて、いろいろ話などをしながらにぎやかに芋を漬ねむけんだ。夜がふけて睡氣ねむけのさすようになると、たれか年上としうえの者がおかしい昔話をしだして、みんなを笑わせようとしたこともふつうであつた。しかし、この話の本来の目的は、ただ芋漬おもうみ宿やどの睡氣をおい払うためだけではなかつたかもしれない。少なくとも結果において、もつと大きな役に立つていたのである。まさかマハツブのようなら**ん**ぼうな芋の漬みかたはせぬまでも、常から糸が太いと小言こごとをいわれ、また自分でも氣にしていた女ならば、この話をただ笑つてばかりは聴かれず、なにか氣がとがめて自分が笑われてでもいるように感じ、むりにも忍耐して糸のわりようを細かくしようとしたことであらうし、また

細い糸を引くことのできる娘ならば、いよいよ安心して友だちにおくれぬように、日ごろの熟練に磨きみがをかけるようにしたことと思う。

三、農家と麻布

この一つの笑い話が、そう古くからあつたものでないことは、その話の中からもうかがうことができる。麻布あさぬのの糸の細さ太さは、以前はこれほど大きな問題ではなかったのである。麻あさは農家がめいめいの畠に栽培し、入用があれば多く作るから、さまで原料の節約をするにはおよばず、いっぽう働く人たちの衣類として

は、むしろ太い糸で厚々あつあつと、丈夫じょうぶに織りあげる必要もあつたくらいで、ただ朝ちやうてい廷ていへの貢みつぎもの、または領主への年々の献け上じやうひん品ひんだけが、上布じやうふといつて、精巧な布でなければならなかつたのだが、その分量はぜんたいの上からいうと知れたもので、これには一人か二人の特に技術のすぐれた者を、雇うて織らせてもよかつたのである。ところが中央の文化がすすんでから、優良な麻布を織りだすので名高くなつた土地がほうぼうにできて、これを租税の代りにまたは商品として、有利な生産をするふうがはじまり、紡織の手わざはまずそういった地方において、おいおいと発達してきたのである。冬はやわらかな絹きぬ織物おりものや真綿まわたをもちいる人たちが多くなつて、麻布が主として夏のものとなると、も

ちろん糸の細いかるい布がよろこばれ、ついにこのごろ見る蟬せみの羽のようなものばかりが、麻の上布だと思われるようになったのである。しかし奥羽おうう地方の人たちは、つい近ごろまで冬も麻を着ていた。そうしてかれらの手織ておりには、そんな薄い布は入用がなかった。それよりも地じのよくつんだ丈夫じょうぶ向きの、ちつとやそつとの荒仕事あらしごとでは、すぐに糸が片寄つてしまわぬようなのを賞美したのだが、それでも女の子は聴きいて知っているので、やはり糸の細く目方めかたのかるいのを、織り出すことを手柄てがらとするようになったのである。

秋田・岩手二県の境さかい、鹿角かづののある村に行われている話などは、

これから考えると今少し古いものかも知れぬが、衣服の好みも
う変つてきたので、話が少しばかりわかりにくくなっている。こ
れも酸漿ほおずきとマハツブとは、姉と妹か友だちかであつたようだが、
二人が日を切つてめいめいの着物を織り上げることになつた時に、
酸漿はどんなでもよいからと大いそぎで仕上げたゆえに、今でも
あの通りがさがさとした目の荒い着物だが、ともかく全身をつつ
むことができた。これに反していっぽうの毬酸漿いがほおずきは、あまり念
入りにていねいに、こしらえようとしたので時間が足らず、着物
はぴったりと身にあつていても、長さが短くてお尻しりが出ていると
いうような話になっている。これでは双方どちらもおかしくてい
やだから、どうすればよからうかと娘たちは考えたことであろう

が、酸漿のごとくぶくぶくした、地の透く^すような布を織る氣になれず、やはりマハツブのごとくひきしまった布を、精出^{せいだ}して織つてお尻の出ぬように、手ばやく仕上げるのがよいということになったろうと思う。すなわちこのほうの話は上^{じょう}手^ず下手^{へた}というかわりに、努力と勤勉とをすすめる教訓に、もちいられていたらしいのである。

四、かせ掛け蚯蚓

昔は機織^{はたお}りが全国の女性の仕事であつたように、これとよく似た昔話も、ひろく日本のすみずみに行われていた。マハツブの話

というのは、あるいは東北地方だけにしかないのかも知れぬが、この鹿角かづのの例ともつとも近くて、さらに今一段とおかしいものが、ここからもつとも遠くへだたった九州のほうにも、二つまでもう採集せられているのである。その一つは長崎県下けんか、壱岐島いきのしまのある村に行われていたもの、自分はかりにこれをカセ掛けか蚯蚓みみずと呼ぶことにしている。カセという言葉も、今日でははや説明が必要になった。カセは布を織る経糸たていとを束ねたもので、その糸を枡かせわとくくというやや大ぶりな枡わくにとつてから、染めたり色を合わせたり綜へたりするので、糸のかんじようにつごうのよいように、長さのちやんときまつた大きい輪になっていた。それを枡からはずしてのち、曲まげて捻ねじじつて紺屋こうやなどにも持って行くのだが、以前は機はた

を織る女がそのまま首に掛けていることもあつたらしく、それが大きな蚯蚓の首に白い輪のあるものと似ているので、こんな笑い話もそちこちに伝わったのである。

むかしむかし、二人の女が近いところに住んで、二人ともよく布を織っていた。その一人は仕事が早くあらく、今いっぽうの女は念入りなかわりにおそかった。市の日^{いち}がきたのに、こちらはまだ機にもかからず、となりの女は糸の太い、目の荒い布を織りあげて、もうそれを着物にして市へ着て出かけた。こちらは間^まにあわぬので、白い^{かせい}糸^{いと}を頸^{くび}にかけ、大きな甕^{かめ}にはいつて夫^{おつと}の背に負われ、市の見物に出かけた。その途^{みち}でとなりの女のあたらしい着物であるくの見かけ、くやしいものだから甕の中から悪口を

いう。その問もんどう答を島の言葉でこういうふうにいったと『壺いきのし岐
島まむかし昔話集』には出ている。

「あすけにや（彼処かしこには）糸太いとふとが行くばい、あり見ろあ
り見ろ」

といっぱうがいうと、相手も負けてはおらずに、

「糸太でも着てこそよかろう。甕打かめうちち割わればからだは裸はだか」

と笑いかえた。女房を負うていた亭主は、この口いさかいを聴き
いてはずかしくてたまらぬので、その甕を土の上にほうり出すと、
甕は割れて栳かせを頸にかけたはだかの女房がころげ出したが、多おおぜ
勢いに見られるのがつらくて、土のなかにもぐりこみ、とうとう

この蚯蚓になったという話である。だれが考えだした話かは知ら

ぬが、機にねっしんだった昔の世の娘たちには、このくらいおかしい話もちよつと類^{るい}がなく、頸に白い輪のある大きな蚯蚓を見るたびに、いつでも思い出して、つぎつぎと小さい女の子に、話して聴かせたことと思う。

五、女の工芸

しかしこの昔話だけでは、仕事がめんみつで、ただ手のおそいという女が、かわいそうな気もするが、いっぽうのいわゆる糸^{いとぶ}太^ととても、けっして同情せられていたわけでもないのである。

だから大分県の山^{さん}間の村などでは、これがまたよっぽどちがつ

て、^{ひき}墓と^{みみず}蚯蚓との^{まえ}前の^し生の話ともなっているのである。

むかしむかし、バツクン（墓）と蚯蚓は友だちであつた。二人の女は相談をして、めいめい着物をこしらえようということになった。蚯蚓はほそい糸でなるだけ美しいきものを作りたいというし、墓のほうは「わしやもう大けな糸でん、早く作ろう」といった。それであらい布の着物だが、墓のほうのは大そう早くでき、蚯蚓はあんまり細い糸で織ろうとしたので、もつれてしまつて手が付けられぬようになって、いつまでもあの通り、かせを^{くび}頸にかけたまんまでいる。そうして墓の方の着物はまにあつたというばかりで、今でもあんなにきたないなりをしているのだといっている。

布を織る女の技芸は、工場や大機械のもちいられるようになる前も、永い間にはだんだんと改良せられていた。わたしはくわしくその歴史を皆さんに語ることはできぬが、沖縄県などの遠い島々に行つて見ると、今でもまだカセというものを作らずに、小さな糸いとまき巻からすぐに機はたいと糸を綜へている女が多い。糸を染めてから機はたにかけるということは、縞しまが流行し木綿もめんがさかに織られるようになったから後の事だつたと思われる。頸に女が白い梶かせい糸いとをかけてあるくなどということは、今から考えるとみような風俗のようだが、あれでも梶かせわく梶わくの新たにはじまった当座には、そうしてあるくことも一つの見えであり、また一つの楽しみでもあつたので、それでこのような笑い話が、新たにかれらのあいだにもて

はやされたのではないだろうか。

もしもそうだったとすると、今一つ、やはり同じころの若い娘たちのあいだに、おかしくおもしろい話が生まれていたのであつた。これは目的が直接にこの技芸を奨励しょうれいするものではないが、それでも比較的人のよく知っている昔話だから、このついでにざつとそれも話しておきたい。以前は若い人たちの教育に、昔話というものがなかなかよく働いていた。それを知るのにはちょうどよい例だからである。

六、孝行な雀の昔話

その話はわれわれのあいだでは、すずめこうこう雀孝行という名で知られている。むかしむかしすずめつばめ雀と燕、または雀と啄木鳥きつつきとは、姉と妹であつた。あるいはそのいっぽうをかもめ鷗といい、南の島では魚狗かわせみだともいうが、かたいいっぽうはかならず雀ときまつている。この二人の母親が病氣をして、もう危あぶないという通知がきたときに、二人の女はちようどお化粧をしていた、という話が地方には多い。燕・啄木鳥または魚狗はおしやれだから、色とりどりの着物や帯を出して、どれにしようかなどと考えているうちに、おくれてしまつて親の死目しにめに会えなかつた。雀だけはちようどお齒黒はぐろをつけかけていたところで、知らせを受けてすぐに飛んで行つたから、間まにあつて母をよろこばせることができた。今でも雀の頬ほつぺた

に黒いもののついているのは、そのお齒黒のよごれだが、孝行の徳によつて一生のあいだ、米を食べて暮らすことができるのにはんして、燕はおめかしをして家にかえるのがおそくなつた罰に、土や虫を食つて口をしぶくしているといい、啄木鳥も衣裳だけは美しいが、一日木をつついてるので夜になると、くちばしが病めるといつて啼く、などというようなおかしい話が多く、もとは大ていの子どもはいちどはこの話を聴いたものであつた。

ところが娘が嫁になり母になるころに齒黒めをする風習は、五十年ほど前からなくなつて、まだそういう事を聴いていない人があり、あの雀の頬の黒い斑が、鏝漿のよごれだという話をして、笑いたくならぬ者がだんだんと多くなつてきた。しかもこの鏝漿

づけの風習は、京・江戸・大阪をはじめ、大ていの土地の良い家庭には行われていたのだけでも、それでも日本全国を見渡すと、まだすみずみには最初から、そういうことを知らぬ女たちがいくらかも住んでいて、この雀のほつぺたの黒いわけなどは、それらの土地でも通用しないのであった。

しかしお齒黒というものをつけることを知らない土地にも、やっぱり雀孝行の昔話はあった。そうして姉妹二人の小鳥が、ちようどお化粧をしていたときにというかわりに、その二人も酸漿ほおずきとマハツブとのように、めいめいの着物を織ろうとしていたという話になっているのである。たぶんはこのほうが一つ前のもので、のちに齒黒の風習がひろく流行してきてから、それが珍らしいの

でこの点だけを、話しかえることにしたのだと思う。そうにちがいないとまでは言えないが、ともかく自分の今知っている三つの実例をならべて、この話をおわることになしよう。

七、島の女性と労働

その一つは鹿児島県の南の島、奄美大島あまみおおしまで採集せられたもの、
 雀すずめと啄木鳥きつつきとの姉妹は奉公ほうこうに出ていて、家に年とった親をのこ
 していた。ふたりが相談して飛白かすりを織つて着ようと、そのしたく
 をしていると、親の大病を知らせてきた。啄木鳥はその緋かすりのきも
 のを織りあげて着てかえろうといい、雀はまだ染めない袴かせいと糸いとを

頸くびにかけたままで飛んでかえった。そのために雀だけは親の死目しにめにあつてよろこばれ、啄木鳥はとうとう間にあわなかつたので、今でも飛白の好い着物は着ているが、いつも枯木かれきをつついて食べ物を見つけるのに苦勞をしなければならぬ。雀は孝行を神にめでられて、自由に米が食べられるのだが、そのかわりには頸に桙糸をかけたままで、いまでも雀の首のまわりは白いのだという。

これとだいたい同じ話が、奄美大島のとなりの喜界島きかいじまという島にもあつた。ただしここでは啄木鳥の代りに、いっぽうを魚かわせ狗みだったといっている。魚狗の羽には飛白がないので、ただ糸を染めてきれいな着物をこしらえるためにおそくなり、雀ばかりが染めない桙糸をかけて、いそいで飛びかえったから、今でも首

のまわりが白いのだと言われている。

それからこの二つの島からずつとはなれた、瀬戸内海の志々島しじまという島にもおなじ昔話があるが、ここでは不孝な姉のほうを鵜かもめだったといっている。鵜は器量よしだから、髪をなでつけたり化粧をしたりしてから、ゆつくりしてかえったので親の生せい前ぜんにあることが出来ず、その罰で今も日に三どずつ生なま水みづを吐いて、ひもじい思いをしているが、雀は機はたごしらえをしていた苧おがせ杵せを首にかけたまま、いそいで飛んできたという話になっている。志々島の若い女たちは、お齒黒はぐろというものをむろん知っていたのだが、まだあのほつぺたの黒い斑まだらが、お齒黒のよごれだという話を聴きいていなかったの、なお以前の柿掛雀かせかけすずめの話をもち伝えている

ものかと思われる。男は海に出るので島の女たちは、畠の耕作を一手にひき受けるのみでなく、なお、おりおり浜の手つだいもしなければならぬのだが、そういう間にも少しの時を見つけては、苧棒を頸にかけて布ぬのはた機たのしたくをしたのであった。町に出てきて反物たんものを買いもとめたり、または仕立屋したてやに縫ぬってもらうなどということは、こういう昔話に笑い興じた娘たちの、夢にも予想し得ないことであつた。それで雀であろうが蚯蚓みみずであろうが、すべてこの世の女性はみな布の糸を棒にして、首にかけてあるいたという話が通用したのである。今日はそれにはんして、大ていの女の人の着物は、お金をはらつて買うものとなつてしまった。それだからこういう昔話にも、説明がいるようになったのである。つ

まりは世の中が変ったのである。

三角は飛ぶ

一、屋根の形

今から十七、八年まえに、我^{わが}邦^{くに}にきていたフランスの全^{ぜん}權^{けん}
 大^{たい}使^し、ポウル・クロウデルという人は名のきこえた詩人であつ
 た。この人が国へかえろうとするにさきだつて、日本を詠^{えい}じた一
 篇の詩をつくつて、世に公けにした。その文句はもうだれも覚え

ておらぬだろうが、各節のおわりの一行に、

ああ三角^{さんかく}は飛ぶよ

という言葉のあったのを、どういう意味であらうかと、あの当時のひとはひょうばんにしたものである。

のちになつて考えて見ると、それはべつにむつかしい謎^{なぞ}ではなかつたようである。東京は大正十二年九月の大震災^{だいしんさい}にあつて、目ぬきの大通りの町屋^{まちや}は、ほとんどみな焼けくずれて、その跡^{あと}へはまるで以前のものとはちがった、屋根の平たい堂^{どう}々たる、ビルというものが建ちならばうとしていた。すなわち三角はもう飛

んでしまったのである。帝都以外の大きな都会でも、家を建てな
おす場合には、たいていはこの形をまねて、屋上に庭園があり、
運動場のあるような家をつくることができないと、建築家でない
ように思う者が多くなった。高いところなどにのぼって見ると、
町の形がまるでかわって、日本にいるような感じがしなくなりか
けていた。それをクロウデルが惜しいことだと思つたのである。

しかし日本の屋根の三角は、けっしてまだ飛び去ってしまったて
はいない。田舎いなかはもちろんのこと、大きな都会でも、あたらしい
平屋根ひらやねが目につき出したというだけで、われわれの住んでいる家
は、たいていは三角にとがったままである。ただその三角の形が、
だんだんにかわり、またそのちがった三角が、ひどく入りまじつ

て、おそろいではなくなった。それがやっぱり古い美しさの消えて行くすがたとして、惜しいといえ惜しいのである。美しいとみにくいとは、そうかんたんには、わたしたちではきめられないが、それよりもさきに知っておいてよいのは、どうしてこのように日本の屋根の形が、だんだん変って行くのかということ、およびこれからもお変って入りまじって行くだろうかということであろう。

二、三角の二つの種類

汽車の窓から見ていれば、だれにでもすぐわかるように、屋根

の三角の角度はゆくさきぎきでかわっているが、それはたいていは屋根を葺く材料のちがいにとまなうもので、同じ草屋根でも土地によつて、すこしは傾斜がちがうけれども、そのちがいは、じつはわずかなものなので、それが板屋根となると、三角のとがりがきゆうに目に見えてかわつてくるのである。中央線というならば、山梨県は小仏こぼとけのトンネルからはじまり、向うは日野春ひのはると富士見じみの二つの停車場ていしやじようのなかほどでおわるのだが、見て行くうちに屋根の形がいつの間にかまるでかわつてしまう。それというのが東のはんぶんは萱かやで葺いた家ばかりであり、西から西北へかけて長野県に近づくにつれて、板屋根がおいおいと多くなつてくるからである。小仏から笹子さやこのトンネルまでのあいだは、甲州で

は郡内ぐんないという名をもつて知られている。郡内の萱屋かややは、山からこちらの東京都西部の民家みんかとは、だいぶん形がちがつていて、横に長い家はだんだんすくなく、二階のある高い家が多くなっているが、それでも三角の角度だけは、両方がおおよそ同じくらいである。これにはんして釜無川かまなしかわの岸にちかい信州境しんしゅうざかいの農家は、粉板そぎいたをもつて葺くものだから、東の郡内やそのつづきにくらべると、屋根がずっと扁ひらたくなっているのである。同じ日本の屋根にも、このいちじるしい形の差のあることは、山梨県だけをとおつて見ても、注意する人にはすぐわかるのである。

そうしてまた、この理由ほど、かんたんなものはそうほかにはない。板屋根を葺くのは粉板そぎといつて、もとは杉すぎだの檜ひのきだのの桎ま

さめ目のよくとおったふとい材木を、鉋なたのような刃物はものでそぎわったうすい板であつた。これを釘くぎで打ちつけるとひびがはいりやすく、またそこから腐りやすかつたので、板屋根には釘くぎをつかうことを非常にきらつた。その代りには、たくさん重ねた粉板のうえを、枝のある木でおさえたり、または石をのせたりして、その板の風に吹きとばされることを防がなければならなかつたのである。屋根の斜面を急にして、あの三角をとがらせておくと、石や材木がすべり落ちるかもしれない。それで板屋根だけはどうしても、できるだけ平たくする必要があつたのである。

三、板葺きの變化

これとは反対に、萱^{かや}で葺^ふく屋根のほうは、あまり平べったくしておくと雨の水がよく流れず、萱^{くき}の茎^{くき}のあいだに湿気をもつて、やわらかくなり、また早くくさつて、葺きかえをしなければならなくなるので、どこの地方に行つても、葺くのにさしつかえのな
いかぎりには、なるだけあの三角を尖^{とが}らせようとしている。それがこの二つの種類の屋根の形が、だれにも気がつくほど、はつきりとちがっている理由である。

そこでわたしたちの、つぎに知りたいと思うことはこの萱屋根と板葺きの屋根と、二つの葺きかたは二つとも、昔から日本にあったものか、ただしはどちらかが後からはじまつて、他のいっば

うの前からあったものを、変えあらためたのかということであるが、それをまだはつきりと答えられるまでに、日本の屋根の歴史は明らかににはなっていないけれども、まずよつぽど古いころ、今から一千年も千五百年もまえに、もう両方ともあったということと言える。そうしてどちらもだんだん変ってきたという中でも、板葺きのほうは少しずつ後へさがり、萱葺きはいち近ごろまで、数も多くなり、また技術も進んでいた、ということが言えるようである。

どうしてまた、そうなったのであろうか。その理由も皆さんがすこし考えて見ればわかる。一言^{いちごん}でいうならば、うすく割つて屋根葺き板にするような、大きな素性^{すじょう}の良い木材が、おいおい

にとほしくなつてきたからである。日本はめずらしく山によい木の多い国であつたが、国が栄え、人の数がふえるにつれて、家具にも家の柱や梁うつぱりにも、使い途がみちますます増加してきて、りっぱな木をそいで屋根などに葺くことが、なんだかもつたないようになら考へられはじめた。それで山間の樹木の多い村々までが、大きなものはみな世間へ送り出すようにして、自分たちの屋根葺きには、なるだけ小さいので間に合わせるようになった。以前の粉そぎ板いたの大きな型のものはなくなつて、寸法のごくみじかいこけら板というものを、たくさん用いることになつたのである。コケラというのは魚などの鱗うろこのことであつたらしい。これも上手じょうずに重ねて葺けば、なかなか見ごとな屋根ができたが、それには、遠くから専

門の職人をたのんでこなければならぬ。ゆえにたいいはかんたんな葺き方になり、毎年毎年損じたこけら板だけをさしかえて、多くの小石を載せておさえておき、またはとん葺きなどと称して、かまわず釘で打ちつけるような、そまつな葺き方もはじまつたのである。

四、一種のピラミッド

屋根を葺く材料の種類は、我邦では思いのほか数多いのだが、だいたい今でもこれを二つにわかつことができる。その一つは板葺き一派の三角のゆるい扁たいもので、さき板やこけら板で葺

いたのから、檜^ひはだ、杉^{すぎ}皮^{かわ}の屋根まであり、現在さかんに建っている瓦^{かわらぶ}葺^ききもその中にふくめてよい。いっぽうはまた萱^{かや}屋^や根^ねだけでなく、藁^{わら}やその他の植物で葺いたものがいろいろあつて、それはいずれもみな三角がうんと尖^{とが}つてゐる。北陸地方へ行くと、前のほうを総称してシユク屋^{しゅくゑ}というが、この名はもと、宿^{しゆく} 駅^{えき}の家^{いえ}ということで、街^{かい}道^{どう}往^{おう}還^{かん}の左右の家だけは、なるべくこういう屋根ばかりを、葺^きかせることにしたのである。これに対して、他のいっぽうの総称は、草^く屋^さ根^{やね}またはクズ屋^{くずゑ}というところが多い。草屋根はもと萱^{かや}で葺^きくのがおもであつたからかも知れぬが、クズ屋^{くずゑ}というのはどういう意味であらうか。わたしの想像では、やはりありあわせの屑^{くず}物^{もの}を利用したということ、さいしよは

ただ臨時の小屋、または貧しい人たちの住居すまいだけに、こういう屋根を葺いていたものとおもう。愛知県の日間賀島ひまかじまなどでは、もとは大小をとわず、すべての草屋根をイホリといっていた。すなわち秋の田の苧穂かりほのいほも同じで、かりの建物たてものばかりに萱や藁、その他の不用品をつかつていたので、こんな名が今ものこっているのかと思う。

ところがこの草屋根の葺きかたは、中世からこのかたひじょうに進歩した。よその民族の田舎家いなかやとくらべても、または素人しろうとの仮小屋かりごやなどとくらべて見てもすぐにわかるが、日本の萱葺きには、たいへんな手のかかった見ごとなものがすくなくない。専門の職工には、技術のすぐれた者が多く、鋏はさみとか、槌つちとか、こて板とか、

その他いろいろの道具の使い方をかんがえ出して、二尺三尺の厚さにはしを切りそろえ、あの美しい屋根の形をつくりだしたのは、空中の彫刻といってもよく、これとくらべあわせると、板葺きはむしろ単調に見える。

東京都下でも多摩川上流の山村、千葉茨城二県の沼沢^{しやうたく}地方、

または奥羽^{おうう}や越後^{えちご}の一部などにも、りっぱな作品がいくつとなく

のこっている。建物の大きさからいっても、住心地^{すみごち}の上からい

っても、また保存年限の長さから見ても、こういうのは、もうけ

つして苳穂^{かりほ}のいほではない。屑屋^{くずや}どころか材料にえらい費用がか

かっている。つまりわたしたち日本人は、あの小さなぼやぼやと

した草小屋から、だんだんと工夫^{くふう}をかさねて、色といいまた形と

いい、今までまるで見られなかった美しいものを築きあげて、それを全国にふきゆうさせたのであつて、だれの力ということがたずね難く、また毎日見なれてしまったゆえに、これをあたりまえのように思う者ばかり多くなつたが、人が集まつて大きな事業をなしとげ、かつ生活を改良したという点から見れば、これもまた民族の一つの記念、一種のピラミッドであつたと言うことができる。

五、ユイに屋根葺く

しかも大震災のような、意外の激変もなく、また西洋文化の影

響もなくて、ただ眼の前のなんでもない原因から、この草屋根の三角も、やがて飛び去ろうとしているのである。みなさんが親になり、祖父母になるころには、もう日本の子どもたちは、絵や写真で見えるか、または山奥へでも入って見ぬ限り、この見ごとな大きなくず屋というものは、眺^{なが}めることがむつかしくなるであろう。物がなくなってしまうえば説明もよくはできず、また説明をもとめる者もすくなくかもしれないかもしれぬ。それだから今のうちに、もつと注意をはらい、またわたしのするような話を聴^きいておくひつようがあるのである。

どうして草屋根の、あの三角は飛ぼうとしているか。これもすこし考えて見ればわかることで、つまりは材料の萱^{かや}がもうないの

である。萱にはいくつかの種類があるが、まず東京でいう薄尾^{すすきお}花^{ばな}のことで、郊外のわたしの家の狭い庭でも、お月見^{つきみ}に挿^さすくらいなら、栽^うえなくとも自然に生える。しかしそれを苳^かりあつめて一軒の屋根を葺くには、萱野^{かやの}というものが近くになればならぬ。大きな家ならば、五年三年の前から心がけて苳^かりためておくか、また遠くへ人をやつて、えらい入費をかけて集めてこなければならぬ。厚く丈夫^{じょうぶ}に葺いた萱屋根は、三十年以上はもち、たくみに挿^さぎ^{がや}萱をすれば、五十年は葺きかえをせずともよいと言われている。その代りには、さあ葺くべしとなると、ちつとやそつとの萱野では追いつかぬのであつた。それで本家とか旧家^{きゅうか}とかいうような、もつとも念入りの葺きかたをしていた家から、最初

にこれをやめて瓦屋かわらやになろうとしている。

もう少し小さい家々では、この草屋根をつづけて行くために、ユイという団結をつくっていた。ユイは土地によつて萱講かやこうとも、また萱無尽かやむじんともいう者があるが、その目的はできるだけ少ない萱野から、組じゅうの屋根の萱を得ようというにあつた。屋根は天気を見さだめて一日のうちに葺くから、手伝なわいもいるし、縄や竹も集めねばならぬが、それだけならば傭やといも買ひもすることができ。萱ばかりはなんとしても、ユイの共同によるのほかはなかつたのである。

ユイのじつさいを今すこしくわしく言つて見ると、たとえばここに三町歩ちやうぶとか四町歩とか、ちやうどふつうの家の屋根が二戸こ

葺けるだけの、萱の生える共有地があるとする。それを家々から勝手にでて苅るならば、一戸はさておき半分の用にもたらぬほどの萱も、持つてくることができぬであろう。よく葺いた萱屋根は、大よそ三十年ぐらいはもつとすれば、順番をこしらえて、ある家はいくぶんか早めに、またある家はなんとかして少し長くしんぼうすると、五十軒以上の農家が、たったこれだけの萱野によつて、つぎつぎに屋根を葺いて行くことができるのみか、仲間が助け合つて、五十束七十束と苅りあつめてくれて、苅り時をおくらすしんぱいもないのである。萱が野山にいくらでもあつた時代にも、こういう助け合いはひつようであつたが、萱野が狭くなつてくると、いよいよこのユイを親密にしなければならぬわけである。

六、藁の一つ屋

村についた共有の萱野というものは、広くなる場合などはひとつもなく、狭め^{せば}られる原因はいくつもあつた。第一に土地がはんじょうして、働く人が多く、食べる人が多くなれば、だれしもこういう野原をひらいて、なんか作つたらという気になる。ことに^{かわら}瓦で屋根を葺いた家が、何軒でも新築せられるようになると、萱野などはなにかもつとよい利用の途^{みち}がありそうなものだという考えが起こりやすく、以前の^{てぢか}手近なところの萱野はなくなつて、だんだんとべんりの悪い、遠い山の上などに苅りに行かねばならぬ

ことになる。家をぜひとかやぶも萱葺きかやぶにしておりたい人は、自分の持も地のなかに生やして置けばよいのだが、それをするは大へんな地面の費つひえだから、やはり多くの仲間のユイによつて、材料を集めてくるひつようがあり、そういう希望者が少なくなれば、たとえ自分ひとりほどのように萱屋根をつづけたくとも、しまいに断念するのほかはないのである。

村に生まれて萱葺きの家にそだった者は、年を取ると、みようにこの住心地すみごちの恋しくなるものである。ことに都会のさわがしい音につかれて、なんとかして今一ど、しずかな葺屋ふきやの雨の音をきいて睡ねむりたいと、思っている人はぞんがいに多く、げんにわたしなどもその一人であつた。ところが今から三十年まえ、まだ東

京の郊外が武蔵野であつたころに、今の多摩墓地のすこし東のほうに、たった一軒だけこの萱葺きの家を新築した人があつた。そのじぶんには、まだ武蔵野は薄^{すすき}だらけであつたが、つぎの葺きかえの時のことを考えたものか、この家では周囲を広々とかこいこんで、いちめんに萱を生やしていた。おもしろい考えだなと思つて、散歩のついでにはおりおり通つて見たが、どうも長くは住みつづけていなかったようである。このようなことをすれば、出入りに不便で、さびしくてしかたがなく、第一に火の用心がわるい。地面が安ければあそばせて置いてもよいようなものだが、いくら萱野^{かやの}でも、管理にはやはり手数をようする。春はいちどか二度火を入れなければならぬし、秋はまたすっかり刈り取つてしまわね

ばならぬ。それをおこたると古株ふるかぶはすぐ弱つて、ほかの地へ出でて店を出してしまふからで、いつでも葺ふき萱かやを得られるようにするには、やはりユイの協力は欠くべからざるものであつた。むりに一人でこういう家を維持しようとする者は、金にこまらぬ人のなにはまだあるかも知らぬが、それらはびつくりするような高い価あたいを、以前は無代むだいであつた萱のためにはらつてゐる。ふつうの農家ではとてもそのまねはできない。だから今日でもまだまったくなくなつてはいないというだけで、萱野はもう一つのおごりになりかけてゐる。それを以前のままになお持ちつづけてこられたのは、一つは改革のそうたやすすくないためと、今ひとつは我邦わがくにに発達した、ユイという団結のおかげであつた。

七、古代瓦と今瓦

日本の畠はたさく作農業の進歩、ことに稲いがいの穀物の栽培は、二百年このかた、ひじょうにさかんになってきている。萱の生産地のせばまり、または遠くなったことも、けつして近年にはいつてはじまったことでない。ただそれが屋根の三角の角度を、こんなに扁ひらたくしたのは新らしいことで、手みじかにいうと、瓦かわらがわたしたちの手にはいりやすくなった結果なのである。

瓦をもつて屋根を葺く習わしは古いが、もとはその利用者がかぎられていた。寺を瓦葺かわらぶきといった言葉が伊勢神宮いせじんぐうにもあつて、

宮きゆうでん殿

や神のお社やしろでさえも、

さいしよは瓦をつかつてはいなか

った。それがおいおいと広く行われるようになってからも、ふつ

うの人民には許さなかつた地方は多く、たとえ許されても、人は
そういう目に立つことはしなかつた。それが明治の維新を境さかいに

して、だれが瓦で屋根を葺いても、すこしもかまわぬことになつ

たのである。土のなかから出てくる古代の瓦にくらべると、堅さ

も重さも、また大きさも、ともに大ちがいな安物ではあるけれど

も、安いだけに人がもとめるに手がるであり、これを遠くへはこ

ぶことは、損じやすく不便であつたゆえに、かえつて村々に小

さな瓦を焼く竈かまどが数多くできて、いつそうそのふきゆうを早くし

た。わたしなどの若いころには、どの地方へ旅行して見ても、瓦

を焼くけむりの見られないところはなかった。燃料はたいてい松の枯枝かれえだで、土はそこいらの粘土ねんどを持ってきて、水でこねて型かたにとった。瓦の型などもこのさいに大いにかわり、雌瓦めがわら雄瓦おがわらを一つにした、浪型なみがたのものばかり多くなったようである。瓦屋根の葺き方もおどろくほどかんたんになった。もとは板屋いたやの上に土をうんとおせて、それを瓦で覆うようにしていたので、その重みがかかり、よつぽど丈夫じょうぶな柱やつかをもつて支えなければならならず、したがって屋根の三角もとくべつの形でなければならなかったが、のちには材木を儉約して、むしろこのようなかるい瓦をよろこび、土もあんまり使わずに、そつとのおせて置くようになって、屋根の形は板葺いたぶきとひじょうに近くなった。そうして握り拳にぎこぶしでた

たいて、何枚わったというような瓦なのだから、火事にあっても、また寒さに凍^{こお}つてもすぐくだけで、火の用心にはあまりならなかった。そうしてまだ昔の瓦^{かわらや}屋のじぶんの安全感だけが、のこっているらしいのは少々あぶない。

火事の話もみなさんのためになるのだが、直接に三角とは関係がないからあとまわしにして、ここにはまず草屋根の角度が、すこしずつ變つてきたことを話して見よう。萱^{かやの}野の萱がだんだんと足りなくなつてきて、木材ももう少ないのだから、ふたたび板葺きにもどることもできず、瓦はまだそう容易には手にはいらぬという時代には、ふつうの日本人はいろいろと、ほかの材料をかわりに使う工夫^{くふう}をした。青森県の十三^{じゅうさん}瀬^{がた}のような、広いあさい

沼ぬまのほとりに住む村々では、細い一種の蘆あしを苅かりつてきて、葉をむしり棄すててそれで屋根を葺ふいている。栃木県の西部のように、麻あさを多くつくる地方では、その麻あさ稗がらをもつて葺く風習がはじまつた。その以外にも、ごく細い篠竹しのだけ、紙を製するところでは楮こうぞの小枝、養よう蚕さんのさかんな土地で桑くわの枝、または笹ささの葉で葺ふいている例もわたしは知っているが、そういうのは全国いっぱんということができないであろう。これに対して藁屋わらやすなわち藁葺わらぶきの家うちというのは、今やすでにどの府県に行っても、見られぬところはないというまでに広がっている。そうしてこの藁屋の三角は、また少しばかり萱葺うなぎきとちがわずにいられたのであつたのである。

八、新式の藁屋

藁屋わらやという言葉は、古くから我わが邦くににあつた。

世の中はともかくてもありぬべし

みやも藁屋も限りなければ

こういう歌もわたしたちは記憶している。しかしそれだからいまのような藁わら葺ぎきが、昔もあつたろうと思うのはあやまりである。

昔の藁屋は仮小屋かりこやで、それにいつまでも住んでいなければならぬ

のは、よつぽど貧しい人だけであつた。その点は、さいしよの藁わら葺ぎきでも同じだったかもしれぬが、これがいったん発達して、専

門のよい職工が出て国々をまわつてあるき、ついに今見るような

大きなみごとな草屋根を、たくさんにのこして置いてくれた後に、
こんどは材料の萱の不足ということがはじまって、何かかわりの
ものを使わねばならぬようになり、あらためてその技術をあらた
な藁葺きに伝授したのである。昔ふうな藁の仮葺きは、今もまだ
そちこちに見られるが、それとこの新しい藁屋とのちがいは、
誰の目にもはつきりとしている。皆さんはただ注意して見ればよ
いのである。

新旧二つの相異は、いろいろとあるが、一番よくわかるのは葺
き草の方向である。今でも年々あらたにする屋敷神やしきがみの祠ほこら、また
は山小屋や積み物の雨覆あまおおいなどは、たいていは藁の穂先ほさきのほう
を外へ出すことにしている。あの秋の田の苅穂かりほのいほなども、多

分はこれと同じかつたろう。これをまた苦葺きとまぶとも呼ぶのは、舟の苦とまなどもこの葺き方だったからで、田舎いなかではまた逆さ葺さかともいって、ふつうの住居すまいにはきらってこうは葺かず、ちやうどその反対に根本のほうを軒のき先さきに向けて、はしをきれいに鋏はさみで剪りそろえている。それから今一つ、ひと目で氣のつくちがいは三角の頂点、すなわち屋棟やのむねの葺き合わせかたが、近ごろの葺屋ではひじょうに複雑になっている。もとはかんたんに四方から葺きあげて中央にまとめ、上へ一束ひとたばの葺をひろげてのせてもよく、またはしまいの藁を折り曲げてでも置いたか知らぬが、こんな事では長くはもっていない。それでどうすれば、ここから雨や雪が入ってこぬようになるか、これには永い間、家を建てる者がみな苦心した

かと思われる。いろいろの考案が萱葺きの盛んだったところから、この点については試みられている。たとえば竹や木をわたした上に土をのせ、その土が流れてしまわぬように、根の強い植物をうえたのが関東地方には多く、東北のほうではまた野芝のしばを土とともに切ってきて、屋の棟むねにかぶせて置くものがあつて、ときどきはそこに百合ゆりの花が咲き、または小松こまつなどの生えているのを見かける。あるいは箱はこ棟むねといって、舟の形をした木をさかさに伏せ、もしくは瓦をもつてこの部分だけをつつんだものもあるが、日本全国を通じてもつとも多いのは、やはり萱とか藁とかの同じ材料と、多量の竹木たけきとを利用して、横に枕のように棟の上をおおうたもので、いちいちくわしくは話していることができぬが、これに

も土地によつての幾つもの種類がある。写真にとつてくらべて見てもおもしろい。だいたいここは風あたりが強くてそんじやすく、またそうたびたびは登つて行きにくいところだから、もつとも念入りに丈^{じょうぶ}夫に、かつ遠くから見た目も好ましいように、作りあげようとした努力がよく現われている。屋根^{やね}屋という専門の職人の、腕をふるう領域はますます多くなり、これまで久しい間農民の持ちつたえた技術は、これと反比例に、おいおいと隠れてしまったのである。

九、天井と鼠

家も食べ物や衣類と同じように、以前は皆めいめいの手製であつた。国の文化が大いに栄えてからのちも、都の宮殿とか、神のお社やしろとか城とか寺とかには、遠国の職人をよび寄せて働かせたが、それは全体からいうとわずかなことで、その他の建築はみな土地かぎり、結ゆいでたすけ合い、また手伝いにきて、なんとか安樂に住めるようなものを作りあげていたのである。大工だいくを番匠ばんしょうというのは徴用ちようよう工こうという意味であつた。壁をぬる人をシャカン（左官）というのは、その補佐役ほさやくということであつた。それで地方によつては屋根葺きのことを、左官と呼ぶところもあるわけである。その番匠と左官とが、たくさんたくさんの弟子を取り、大きな工事ならば皆出てはたらき、ご用がすんでしまつて手があまると、そ

れぞれ縁故のある土地にかえって、おいおいにふつうの人の家も造ることになったのだが、それでも飛驒ひだの白川しらかわのような辺鄙へんぴな土地では、たった一人の大工だいくがきて棟上げむねあまですむと、あとは村の人にまかせてかえったそうである。土佐の山村でも、隅葺すみふきさんというただ一人の屋根葺き職を頼み、隅すみのむつかしい仕事だけを引受けてもらうことにしていた。だから土地土地の昔からの葺き方などが、しだいに改良せられつつも、なお久しく残り伝わることができたのである。

専門の職人には職人氣質といって、なるたけ手の込んだ見ごとなものを作りたいたいという念がつよい。それからまた腕に自信があるので、土地の者の経験をかるく見ようとするかたむきもあつた。

そうして思わぬ失敗をした場合もないとはいわれぬのである。そのおかしい一つの例をあげるならば、萱葺き藁葺きの家には、もとは板天井いたてんじょうというものがなかった。家にはいると屋根裏の見えるものが多く、そうでなくともツシという竹や木の棒をわたしただけの二階で、風が吹く日には、すき間まからごみが落ちてきた。板をびつしりと張はったほうが見たところもよいので、大工にすすめられると、たいていは板天井をつけることにしたが、草屋根のためには、これは損なことだった。こういう家では、よほど大きな破風はふの窓を開いて風通しをつけないと、家のなかのしめった空氣が上に滞とどつて、屋根のいたみが早いだけでなく、炉の煙をじかにあてて燻いぶして、防腐をすることもできなくなる。もつとこまっ

たことには、天井は鼠ねずみの牧場となり、猫ねこをたびたび征伐せいばつにつかわさぬかぎり、鼠ねずみ算さんといつてたちまち繁殖してしまふ。それをまた狙ねらつて青あお大將だいらうという蛇へびがそこから入ってくるのだが、この蛇は屋通やとおしという別名もあるくらいで、しばしば屋根の萱や藁のわずかなすき間から出入りして、飛んでもない大きな穴を明けるのであつた。そうして草屋根の保存年限が、三十年のものから二十何年しかもたなくすることを、板天井を張る大工たちには、気づかぬ者もあり、または気にしない者もあつたのである。

一〇、昔の屋根縫い

草屋根が次の葺きかえまで、何十何年ほど持つかということとは、
労力のうえから見ても農家には重要なことであつた。それに入用
な人の手は、ユイによつてたやすく得られるにしても、耕作のあ
い間に^まそれだけの労力を、村としては余分に出さねばならず、保
存の年限がみじかくなればユイは小さくなり、したがつて一人が
たくさんに出て働くことになるからである。萱野の萱がたりなけ
れば、いくらでも藁を代りに使えばよいと、いうことのできな
かつた理由もそこにある。藁のなかでは小麦^{こむぎ}稈のよくすぐつたの
がいちばん萱に近かつたが、それでもいっぽうの三分の一も持た
ない。大麦や裸^{はだか}麦^{むぎ}は藁のたけもみじかく、且^かつぶよぶよして
いるのもっと早く腐れる。稲の藁は、日本でこれほどいろいろ

の役に立つものはないのだが、屋根葺き材料だけにはまったく向かない。しかしこういう不適當な代用品でも、萱が手にはいらぬときまれば使つて見るほかはない。幸いなことには、農業には藁類の堆肥たいひがひつようであつて、三種の麦稈などは、刈かつた年のものを積み肥づゑにするよりも、さんざんに雨に打たせ煙にいぶして、もろくくだけやすくなつたもののほうがよかつた。そこで農家では鼻の穴をまつ黒にして、八年十年というみじかい期間に、たびたび屋根をおろしては葺きかえたのである。こうなつてくるとむろん人の手がたりない。家の者やごくしたい人は働かずにはいられないが、その他の労力は外からくる者を雇あいつつてくる。関東地方では茨城県の筑波つくばとか、遠くは福島県の会津地方のような、田

畠がすくないか、または秋の農作のはやく片づく村から、群れを
なしてその屋根葺き職の者が出てきて、大よそけんとうをつけ、
または前の年からやくそくをして、ことし今年葺きかえる家々を廻つて
いた。すなわち彼らもまた農民のかたしようにばい片商売なのだが、数をかけ
ているのでかんたんな技術をおぼえ、また道具をそろえていて、
ふつうの人よりは仕事のはやく、手ぎわもよく葺きあげたのであ
る。ただそのためにユイという一つの労働組織はくずれたのみな
らず、わたしのいう手製建築法の、さいごの部分までがほろび去
ったのはやむを得なかった。

伊豆いずの八丈島はちじょうじまなどでは、屋根葺きおわりの日の祝宴をニイ
トメ祝いといっているが、これが縫ぬいとめであることはもう気づ

かぬ人が多くなつた。むかしは草屋根も菅笠すげがさなどとおなじく、葺くことを縫うといつていたのである。屋根の三角の斜面には、まず何十本もの木竹をくくりつけて、それをヌイボクといった。それから竿さおのさきに穴のあいたものへ縄なわをとおして、助手が下からさし出すのを、上にいる葺き手ふきてが取りあげて、それをもつて萱かやを縫いわらぼくにむすびつけるのが、ちょうど着物を縫うのと同じだった。それでその長い竿さおを針はりといい、今でも沖縄などではこの助手の役を針刺はりさしとよんでいる。爺じいは屋根にあがり婆ばあは下から針をさしたということは、昔話ではまだ語られているが、今日の屋根は葺ふきわらをふかく積みかさね、要所要所を手持ちの縄でくくるだけで、もう一針ずつはこんで行くような悠ゆう長うちようなことはし

ない。

一一、新らしい三角

屋根の三角は萱葺きが藁にかわってから、自然にすこしずつとがって来ぬわけには行かない。わたしの生まれた家なども小麦の稈からをもちいて、かなりじょうずに葺いてあつたが、その角度は関東の古い大きな萱屋かややとくらべると、氣づかずにいられぬほどの鋭角であつた。全国をくらべてみると、佐賀県の北海岸地方から、壱岐いきその他の島々が、ことにとがっているように思うが、ここはあるいは大麦の稈を、つかっているのではないかと思う。斜面が

急になれば棟^{むね}も高く、のぼって葺くのは不便が多いのだけれども、すこしでも長くその屋根をもたせようとするには、こうして雨水を早く流し、藁のあいだに湿気をふくませぬようにすることが必要であった。島では全体にとがった屋根が多いようである。鹿児島県南方の島々などは、萱をまだ葺くものもあるかと思うのに、家が小さなわりに高くとがり、その上に、屋敷に小屋のかずが多いので、高くから見るとかわった印象を受ける。これもわたしは雨が多く湿気が強いから、こうして水を切るひつようが一層大きいのかと思っている。今後建築の材料が一変してしまわぬ以上、この三角などはなかなか飛んで行ってしまわぬであろう。

あるいはまた屋根の角度はあまりかえないで、材料の加減で保

存をよくしようとする試みも、職業屋根葺きになってから、いろ
 いろと実行せられるようになった。たとえば、南に面したよくか
 わく側はひら小麦藁こむぎわら、日陰になるほうは萱ひかげとか、丁ていの字形の屋根の
 谷になる部分には木や瓦を当てるとか、場所によって使うものを
 ちがえ、または始めから材料を混合して、萱は半分三分の一とい
 うのもあり、または上葺うわぶきを萱にして、下の厚みは藁その他のも
 のでつけるといふようなものもある。むろんこういう巧こうしや者なこ
 とは素人しろうとにはできない。職人はまた腕前うでまえをしめすべく、棟や
 軒のきの端はしの切りそろえに、蘆あしとか篠竹しのだけとかの切り口を、順序よく
 ならべて見せている。関東東部の田舎いなかをあるく人は、すこし気をつ
 けていれば、この例がよく見られる。

石川県の東部を汽車で通ると、笹ささの葉をたくさん葺きこんだくず屋が大分だいぶんある。これなどもただ材料の不足をおぎなうためだけでなく、こうすればいくぶんか屋根のもちが良いのであろう。奈良県の東半分から京都府の一部へかけての、屋根の葺きかたには特色がある。これは稲藁いなわらを材料に使ったほとんどただ一つの例で、遠くからながめた白っぽい色もかわっているし、家の形もめずらしく、三角がかなり急であるが、これなどは萱の欠乏をおぎなう目的で、はじまつたものではなさそうで、下にじゅうぶんな萱を葺いた上に、うすく稲藁が覆うてあるのだから、美観を主としたもののように思われる。屋根の形も四方葺しほうぶきでなく、切妻きりづまと称して前まえ後うしろは壁になったものが多い。こういう形の家がか

ず多くあつまつて、建っていた時代の風景は美しかったにちがいないが、今日はもはやさまざまなものが入りまじつて、何かただわたしたちの理解を困難にしているようにしか見えない。

一一、江戸の三角

都会も最初のうちは、屋根の形や葺き^ふかたがおそろいであつたらしいことは、火事にあわないいくつかの小さな町の、家^や並みを^な見ても大よそは想像し得られる。それが、あとからあとから人がはいつてきて、今のようにな大きな市街になると、とても統一は取れなくなってしまうのである。そういう中でも、土蔵^{どぞう}造りと

いう瓦葺きなどは新らしいもので、大きな商人の多量の財貨を

かかえた者でないと、必要もなく、また持ちこたえることができ

ない。しかし火災に対して少しでも安全なのは、このほかにはな

く、ことに市民の半分は借家人しゃくやにんであつたために、家は焼けるも

のと始めからきめてしまつて、火事があると身のまわりの物を持

つて、さつさとにげて立退たちくさんだんばかりしていた。これが東

京などの大都会に、大火の多かつた原因の一つで、そうしてまた

屋根の三角が、いよいよ不揃ふぞろいなものになる種たねでもあつた。

東京はその地勢からいうと、木がすくなく萱かやや葦あしが周囲に多く、

自然にまかせて置けば草屋根の大きなものが、幾らでも立ちつづ

くべき御城下ごじょうかであつた。『慶長見聞集けいちようけんもんしゅう』という本を読ん

で見ると、今から三百四十年ほど前の、けいちよう慶長六年霜月二日、

江戸丸焼まるやけという大火があつたのち、幕府は命令をだして草葺くさぶきき

をあらためさせ、新築はなるべく板屋根いたやねにするようにと指図さしずした。

火事の用心に板葺きというのはおかしいが、その板の上には蠣かきの

殻からを多くのせて、火の子の燃えつくのを防がせることにしたので

あつた。蠣殻かきがらはこの海岸の一带に多く産し、瓦かわらはまだふつうの

人が利用するまでに、普及していなかったからである。この際に

大通りの本町ほんちよう二丁目に、滝山弥次兵衛たきやまやじべえという金持があつて、

家を新築するのに町に面した屋根だけを瓦で葺き、棟むねから裏のほ

うは板葺きにした。それがめずらしいといつて遠くから見物に來

る人が多く、半瓦はんがわらの弥次兵衛あだなという綽名あだながつけられて、大評

判であつたという逸話いっわも伝わっている。

皆さんが多分おどろかれるだろうと思うのは、この慶長の大火事のころまでは、江戸の市中には棟の高い大きな家が多く、そのてつぺんには鳶とびだの鷺さぎだの、また鸛こうの鳥だの、巣をくつたのが見られたということである。板葺きの三角は平たいから、どんなに大きくてもそう棟が高くない。またこの時分は二階屋というものも少なかった。だからそういう鳥の巣のあつたのは、萱屋根の上に棟むね押えおさの木を組んでのせたもので、現在奥多摩おくたまの山村などにある農家よりも、今一ひとかさ偉大なものが、昔の東京市内には立っていたので、それがこの大火に焼けて、もうふたたび造られなくなつたのである。しかし萱かやぶき藁わらぶきの家が、これを限り

に全くなくなつたのではないこともちろんである。現にこの時から百二十年の後、享保十二年の大火事の翌年にも、藁葺きの新築は禁止するというお触れがでており、そのまた次の年には、なるべく下地総塗りしたじそうぬの家作かさく、すなわち今いう土蔵造りを建てよという命令も発せられた。それにつけくわえて、「但し土留め迄ただつちどに蟻か殻きさし置き候分おそうろうぶんは勝手次第かってしだい」とあるから、屋根はまだ瓦ではなく、ただ板の上に土をのせて、火の用心にしていたのである。『塵塚談ちりづかだん』という書物は、ちょうどこれから少し後に生まれた老人の、若いころの見聞をしるしたものだが、これには目抜きめぬの大通りだけでなく、山の手端はしばしの武家町家ぶけちやうかともに、こけら葺きに蟻殻をのせた屋根がふつうだったと出ているから、ところど

ころには、まだ小さな藁屋^{わらや}だけはのこっていたのである。

一三、経験と実験

蠣^{かき}の貝^{かい}殻^{がら}をのせた板屋根は、海近くの村へあそびに行つて、見たことがあるという人は多かろう。あんなみすばらしいものはないと、わたしなどは思っているのだが、それがこの東京都の、もつとも本式な屋根であつた時代も一度はあり、さらにその一つ前には、これすらめずらしかつた時代さえあるのである。やはり江戸の初期にできた『老人雑話^{ろうじんざつわ}』という本には、「昔は江戸中に蠣殻^{かきがら}葺^{がらぶ}き四、五軒のみ。近年は大方^{おおおかた}蠣殻葺きに成り、これ

も火の用心よろし」とある。萱藁かやわらで葺いたり、板ばかりをのせた

りした家よりは、なるほど燃えつきかたが少しはおそいかも知れぬが、あんまり安心のできないことは、これから後にもおそろしい大火が、何十回もあつたのを見てもわかる。それで最後には瓦ならよからう、または瓦に限るということになったことと思うが、これとても屋根にたくさん土を置いて、それが雨の水に流れぬように、すきまなく覆いをするならよいが、それにはまた、じゅうぶんな重みを支えるように、今よりも何倍か丈夫じょうぶな木柱きばしらを使うひつようがあつた。ところが材木は遠くから持ちはこぶので、成るだけ儉約するために屋根の上を軽くし、ついに今日のような見たところばかりの、屋上制限おくじょうせいげんというものがなり立つたので

ある。あるいは板屋根の上に土や土留めつちどめをのせるといことが、はじめから無理だったのかも知れない。蠣殻はさいしょこの附近に多く取れたというだけでなく、石のちつともない地方だから、これも藁葺わらぶききと同様に、その代りに用いはじめたものらしく、石よりはかるくて都合のよいこともあつたが、石にはもと防火の目的はなく、ただ屋根板やねいたの風に吹き飛ばされるのを、押えようというだけの趣意であつて、火事にはむしろこの石のおちてくるのがあぶなく、早くにげ出すひつようさえあつた。それで近頃はただの丸石をころがしておく代りに、うすくて幅広、よく剥はげる石のある地方では、これを採ってきて、いちめんに敷きつめ、又はまさいた枳板にまじえて直接に屋根を葺いているものも多くなつたので

ある。わたしたち日本人の生活は、かんがえて見ると、毎日の改良であつた。以前これは便利だつごうがよいといつて採用した技術で、そのままいつまでも使つていられるものは少ない。また最初の通りだと思つていて、知らぬ間に中味のちがつてきてしまつたものも多い。ことに住宅などはまだその改良の半途はんとであり、敵の空襲というような、前にはかんがえて置くことのできなかつた危険と不安とが、大きいから小さいのまで、いくつもあるということがよく判わかつてきたのである。新たにこれに応ずる改良を、しなければならぬ人は皆さんである。どこに親たちの苦心した点があるかを知ると共に、べつにまたどの部分がまだ十分でなかつたかを、見きわめるだけの目と判断とを自ら養うように心がけな

ければならない。

一四、帝都の美観と安全

そこでもう一つだけ古い書物を引いて見ると、これは今からわずか九十年ほど前に、大阪から出てきて江戸を見た人の『皇都午睡』^{こうつとごすい}という本のなかに、こういうことが書いてある。江戸は年々^{ねんねんさいさい}歳々^{さいさい}の御触出し^{おふれだし}あるがゆえに、通り筋^{すじ}と間筋^{あいすじ}は大方^{おおかた}瓦葺^{かわらぶ}きとなつたが、はしばしにはたたき屋根が多い。風吹きに屋根板の散らぬように、細い竹を伏せて手ごろの石か瓦のわれをのせて置く^{かき}とある。すなわち蠣^{から}の殻はもう使っていないので、た

たき屋根というのは、釘くぎをもつて板を打ちつけた屋根のことである。それからまた、中くらいの場所は表おもてがわ側側だけ瓦葺きで、いわゆる半瓦はんかわらの家はめずらしくなく、まして場末ばすえには瓦一枚もつかわぬ家ばかりであつたが、わずか四、五年をへだてて二度目くだに下つて見ると、もう瓦葺きがよほど多くなつていたから、のちには京大阪の市中と同様になるであらうともいつている。すなわち上か方みがたの二つの大都會では、この時もう瓦屋根がふつうになつたのである。

しかし、火事は江戸の花などといつて、とくに江戸のほうに多かったのはそのためでもなかったらしい。あれから瓦葺きが急激に増加してきたけれども、なお明治のなかば過ぎまでは、二千三

千というような大きな延焼えんしょうが、毎年のようにつづいていた。一つには丘陵きゅうりょうのあいだが狭くて風の道がとおり、また冬分の風がつよいからとも言われていたが、それが近年になってから、回数はもとと同じでも、焼ける家かずがめつきりと少なくなつたのは、まったく消防の技術の進みといつてよい。その技術といふなかには、隊の組織や報知機関の完備、機械の精巧さとか、消火栓かせんの配置とか、道路のとりひろげとか、なおいろいろの要件がふくまれているが、屋根の葺きかたや諸材料の改良が、その一つにかぞえられるかどうかはまだ疑問である。ただ、戦国時代の城下じょうかの町のように、民家みんかは焼けるもの、火がくれば家財をかかえて、逃げればよいものというような考えかたがだんだんと消え

て、ここは一国の大切な都だ、みやここれを美しくし、また安全な場所にしよう、焼いてはあいすまぬという共同の念慮が、日増しに強ひまくなってきたということだけは、想像することができるのである。ただし、そのためには、災害が目の前にせまつてから、これとひつしに闘うというだけではまだ足りない。どうすれば日本の国土に相応し、風景と調和し、無事の日にはこころよい住心すみごころ地と、たのしい安全感とをあたえるような住宅の群れを作りあげて、いよいよわたしたちの愛惜あいせきの念を、深くかつ切なるものにし得るかを考えなければならぬ。こういう大きな任務が、これから成長してゆく若い国民にゆだねられている。それはむつかしいことだ、できない望みだということは、まだ皆さんは言い切る

ことができない。何となれば皆さんは今まで、ちつとも屋根の歴史というものを調べたことがないからである。今まで知らなかったことを少しでも多く知って、それを友だちと共にかんがえて見ることが必要である。雨のよく降る日本では、三角は恐らく飛んでしまわないであろう。ただその三角をどういうふうに組みたてたら、いちばん安全であり、また見た目にも美しいかを、きめてくれる人を我^{わがくに}邦は待っているのである。

三度の食事

一、人生の宿題

この戦争のはじまる前、二食主義にじきしゆぎといつて、お昼の食事をしない人が、東京などにはかなり多くいた。一体に朝が農村よりはずっとおそいので、仕事に取りかかつて程もなく、やつと身がはいる頃にもう十二時になる。そこでまた一時間ばかりも、息いきを抜ぬく

のが何だか惜しい。消化のためにはもしかまんができるなら、あ
いだを長くするほうがよいというのが、主たる理由のようであつ
たが、なおその以外にも昔の日本人は、朝と夕の二度の食事です
ませていた、これを三度にしたのは新らしい習慣だから、もう一
ぺん古い方式にもどつたほうがよいという、歴史を重んずる考え
も働いていたかと思う。歴史がわたしたちの将来の生活をきめて
行く上に、大きな参考になることは疑つて見るまでもない。ただ
その知識はじゅうぶんに精確なものでないと、何かの折にはまよ
いが起こつて、うごかない判断の根拠にはならぬのである。われ
われの知っておきたいことは、できるかぎり歴史の全体でありた
い。すなわち昔は朝晩の二度だけしか、食事をしなかったという

のが、ほんとうであるかどうかをたしかめるだけでなく、そんならまた如何^{いか}なる理由と事情とで、このごろのように三度三度の食事といい、二度しか食べない子どもを欠^け食^{しよくじどう}児童などというまでに、それがふつうの習わしになってしまったか、この点もあやまりなく答えられるような、歴史を学ばなければならぬ。そういうことまでを説明した書物は、まだ出ていないようであり、仮^{かり}にこういうわけだろうと言った人があつたところで、たしかだと思^{おも}うことができなければ役には立たぬ。しかし皆さんがなるほどそれは大切な歴史だ、どうかしてその点を明らかにして後^{のち}に、これから二食^{じき}にしてもよいか悪いかを、決したいものだと思うようになれば、今にかならずその答えは出てくるであろう。どうしても

判^{わか}らぬというほどの、秘密な事件でもないからである。私たちが知っておりたいと思わなかったばかりに、まだ知らずにいる事柄は、食事の問題以外にもいくらもある。さあ入用だという時になつて、あわててたずねまわつてもそう急にはわからない。

二、お昼とは何か

だから若い人々は、これから必要がおこるであろうと思う歴史を、今のうちにおぼえて置こうとしているのであるが、それを片^か端^{たっぱし}からみな覚えるというわけには行かない。何か機会があつて、これはおもしろいと思つたことから、つきへつきへと注意し

て見るのがよい。興味をもつて見たり聴^きいたりしたことは、そんなに骨を折らずとも、いつまでも覚えておられるものだからである。食事の習慣が皆さんのと非常にちがった村々に、しばらく住んでいるということは一つの機会である。わたしがこういう話をしなくとも、気のつくことはきつと多い。ただ他の土地ではどうかということだけを、つけ加えて一ぺん話して見るのである。

お昼を食べない家は、現在はもうなくなっている。わざわざ朝晩の二食^{しよく}にしようときめた人でも、家の者をのこらずその流儀にさせることは、ちよつとできそうにもない。それほどにも一日三食ということが、今ではもうあたりまえになつているのである。しかし氣をつけて見ると、そのお昼の食べかたというのが、土地

により人によりまた仕事の種類によつて、思ひのほかまちまちになつてゐるようである。家に入つて^{たたみ}畳の上に^{すわ}坐つて、お膳^{ぜん}を出して朝飯^{あさめし}夕飯^{ゆうめし}と同じに、食事をする者は上流の家、または都会に住む人のところでも、決して全部とはいわれぬのである。かず多くの農村漁村はいうにおよばず、町の人たちにも外^{そと}へ出て食べる者はひじょうに多い。食堂とか飲食店とかのできたのはもちろん近い世のことで、その前はみな家から食事を持ってきて、仕事^{しごと}場の片わきでお昼を食べるのが、今とても働く人たちのふつうの習いである。そうして以前の日本人の仕事は、屋外のものがもつとも多く、日^に中^{つつちゅう}も家にいて膳^{ぜん}で食事のできるような人は、男はもとより女や年寄^{としよ}りにも、ほんのわずかな数だけであつた。お

昼と朝晩の食事とのちがいは、ちよつと考えて見てもいくつかある。第一に家族が順序よく一列にならんで、同じ時刻に同じ物を分けて食べるということがない。次には食事の器うつわもの物が、持つてあるくようにできたもので、家で食べる時とまったく別であり、同時にまた分ぶんりよう量も前からきまつていて、なんでも勝手に食べてよいという品かずがはなはだ少ない。べんとうという言葉はいつごろからあるか、またどういうわけでこんな名をつけたか、わたしなどにはまだわからないが、田舎いなかではこれをモチビルという人が多い。一つの飯櫃めしびつや鍋なべの物を、みんなして共々に食べるのではなく、前からめいめいに分けあたえられて、一人一人が自由に食べるという点は、なるほど餅もちとよく似ている。餅をモチという

のも多分はこれと同じく、「持つ」という語から出たものであるう。

三、ケドキは飯時

だから三度の食事というなかでも、ひるめし昼飯だけはよほど形がちがつているので、それが三度ともほぼ同じことになったのは、朝から晩まで家にいられる職業、たとえば小売商の自分でみせばん店番する者、またはしたてや仕立屋などのように家で仕事をする者が、多くなつてから後のことである。村にもこのごろはそういう人ができてきたが、もとは市街地だけにしかないことであつた。お昼を包んで

家のそとへ持つて出て、べつべつに食べるのも食事のうちに
入れるとすると、昔は二食じきであつたということがよっぽど疑わしい。

たしかにそうだったとは、今はまだいうことができないのである。

そればかりではなく、現代は食事が三度になつたということも、
国の全体からいふと事実にはんする。お昼と朝晩とのようにまる
でちがつた食べかた、場所なかもも仲間も分量も器うつわ物も、共に變つ

ているものも皆食事だとすれば、村では三度ではなく四度か五度、
まれには六度以上も食べている家があるのである。中華民國をは
じめ、アジアの南方の国々はどうなっているか、くらべて見たい
と思つてまだできずにいるが、少なくとも日本の歴史においては、
この二通りの食事は最初からべつべつのものであつた。これから

後^{のち}もやはりわけて考えるほうがつごうがよいと思う。そうしてこの家の外^{そと}で食べる分をべつにすると、以前はたしかに二食^{じき}であり、近ごろはまたいろいろの新らしい理由から、三食^{じき}の人がしだいに多くなつて行こうとしているのである。

朝と夕との本式の食事を、古い日本語ではケといつていたらしい。今でも朝げ夕げという名を使う人がすこしはあり、また神さまにさし上げるお膳^{ぜん}は、朝^{あさ}みけ夕^{ゆう}みけと昔から敬語をそえてとなえている。お昼の食事^{ひる}も昼^{ひる}げということになつたのは、なんか特別に日^に中^{ちゅう}にこのお膳^{ぜん}をこしらえる場合だけに、限つたことだつたろうと、わたしは思っているが、のちのち外へ持つて行くべんとうまでも、昼^{ひる}げだと思ふ人が多くなつてきて、そのケという

語の意味が、はつきりとせぬようになったのである。最初の起こりは膳^{ぜん}碗のような、きまつた食器がケであつて、それで食べる食事だけを、朝け夕けといったらしいことは、

る
家にあればケに盛る飯^いを草まくら旅にしあれば椎^{しい}の葉に盛る

という有名な古歌からも想像し得られるが、いっぽうにはまた家庭生活、日常生活のこともケといっているから、あるいはかえつてこちらがさきかも知れない。近畿地方の一部、または中部地方のそちこちに、飯^{めしどき}時をケドキという言葉がある。岐阜県の南の

ほうなどでは、このケドキにたいして、そとでする食事をお茶^{ちやど}時^きといつてくべつしている。

四、飯時と茶時

めし時という言葉は東京などでもよく使うが、これもケドキと同様に、家のなかでの食事のことであつた。田の畔^{あぜ}にこしかけて黄粉^{きなこ}握飯^{むすび}などを食べている人に、路^{みち}をたずねたりするときには、よくわたしたちも飯^{めし}時^{どき}に失礼などというが、これは誤りでないまでも一種のたわむれで、むこうでも大ていにつこりとする。メシは本来「きこしめす」また「めしあがる」のメスから出た語で

あつて、ちやうど「賜たまわる」から出たタベルに相對する敬語であつた。今はクウという語が失敬になつて、そのかわりにひろく用いられているが、もとは目上めうえの人に向かつていったものですなわちお給仕きゆうじをする者のある食事がメシであつた。戸外の労働にと
もなう午食ごしよくが午餐ごさんでなく、したがつてメシと呼ばれるべきものでなかつたことは明らかである。この心こころもち持もからいつて見ると、
一日五度も六度もある農民の食事は、これを飯時またケドキと、
そうでないものとの二つに分けることができるので、お茶時ちやどきと
いう名は古いものでなくとも、今ならば他の一方をそう呼ぶのが
もつとも適している。

このお茶時が以前の世にくらべると、おいおいと回数も多くな

り、また欠くべからざるものになってきたことはまずたしかである。最初のケドキシすなわち朝飯と晩飯との時刻は、朝日の豊さとよか昇りのぼと夕日のくだち、日の出と日の入りとを本式としていたことは、神をお祭り申す祝詞のりとというものの中に、そういう文句のあるのを見てもわかる。しかし、これではその中間が約十二時間で、なにも食わずにはとてもしんぼうがでしなかつたろうと、今の人の心持では、そう思わずにはいられないようであるが、これにはまたわたしたちの忘れかけている一つのことがあった。それは体質のちがいと言おうよりも、むしろ今と昔との習慣の差であつたかも知らぬ。以前は一度にうんと物を食つておいて、そのあと一日も二日も食わずにいられる人、またはながい間飲まず食わずに、

平気でいられる人がずいぶんと多かったのである。近世になつてからでも、血氣さかなな壮年の中には、まれにそういう男があつて、溜^{ためじき}食と称して、これも武芸の一つのように、評判にもすればじまんにもしていた。じつさいまた戦国の時代には、急な使いに遠くへやられるとか、もしくは敵の中にひそみかくれているとか、この特技のひつような場合が毎度あつた。こんどの大戦でもおそらく経験したことであろうが、なにか食わぬとすぐに弱ってしまうようなのは、活躍する者にとってかなり不便だということが、昔は一般の常識であつたゆえに、この溜^{ためぐい}食のできる人は重んぜられ、またわざわざその練習をする者も、少しずつはあつたのである。もっともこれによつて食料の儉約などはできず、したが

つてまた栄養の低下ということもなかった。こんなことのできる人は、むしろ大ていは大食いであつた。

五、臨時食物のある日

人が生命をつなぎ養つて行くための食物と、人のよろこび楽しみを深くするための食物と、二つははじめから二通りのものであつたかと、わたしなどは考えている。これがなくては活いきていられぬことは、そうほう少しも甲乙がないにしても、一方はとにかくに毎日の事であるにたいして、こちらは日が定まり季節があり、またその食べかたやこしらえかたに、一つ一つの特徴があつた。

だいたい、時に時と手数のかかったためずらしい食べ物が後のほうに多く、それゆえにまたこれかわり物とも、品しながわりともいっていいところがある。家にいてみんなといっしょに食べることもあるけれども、この品がわりは家からそと、仮小屋や幕の内かりごや まくうちまたは青空の下で、賞しょうがん翫くわんする場合のほうが昔から多く、それはまたわたしたちの親々の、なにか変った仕事をする日でもあつた。いちばんよく知られているのは神を祭る日、正月と盆ぼんと彼岸ひがん、その他せつく節供せつくといつて一年のうちに何回か、業を休んで祝う日にも品しながわりができた。こういう日の食物は、まず神々に供え、先祖せんぞの靈れいにすすめ、それと同じ物をわれも人も、ともどもに食べるから、ことに楽しかったのである。それから家々としては婚礼の夜やお産

のとき、または年祝としいわいといつて老人の長命を祝う日、いっぽう
 にはまた人が亡なくなつて野辺送りのべおくをする後先あとさきから、しだいに月つき
 日がたつて月忌年忌げつきねんきの祭りをする日まで、身うち知合いの人々の
 あつまつてくるようないには、今でもかならずただの朝飯あさめし夕ゆ
 飯うめしとちがつた物を調理して、食べさせなければならぬものとな
 っている。

しかしそういう場合が、まだこの以外にもいろいろあつたこと
 は、もう心づいた人が多いかもしれない。一年の間にやっと一度
 か二度、もしくは今一段と稀まれまれ々々にしかおこらぬ事件で、人がそ
 のために全力をふるい、精魂をつくして働かねばならぬようない
 にも、やはりふだんとはまったくちがつた食べ物を用意し、か

つでできるならば酒もそえて、日ごろは一座で食事をするこもな
いような人たちと共に、あらたまつた氣持でしかも楽しく食べ
ていたのである。かぞえあげて見るとそういう機会は多かつた。
戦いも昔からその一つで、いそがしくなれば食事どころではな
かつたろうが、出陣の始めの日とか凱旋がいせんのよろこびの日とか、そ
うでなくても明日あすは決戦という前の晩とかには、たいていの場合
この食べ物が出た。慰勞にも前祝まえいわいにも、常の通りの膳立ぜんだてで
は、とても引きしまつた晴れの感じにはなり切れなかつたのであ
る。日本の食事の習慣が、戦国時代と呼ばれている室町期むろまちきのお
わりの頃、諸国に小さな戦争の非常に多かつた百年ほどの間に、
目に見えて大きく變化した理由は、まったく戦時の食べかたの常

とちがつていたためであつた。

六、狩と伐木と旅行

戦いくさとくらべると事はずっと小さいが、人が家々から出て大きな働きをするという点で、よく似ているものには狩かりくら倉があつた。

これにも働く人々の意気込みを統一し、仕事にたいする熱意をかめるために、やはり品がわりの食い物がたくせられた。宮みやとかご殿てんとかの建築や船造りのために、山に木材を採りにはいるときもその一つ、それから木を運びきりけずつて、いよいよ船のかわら（底材そこざい）をすえ、または新築の棟木むなぎをあげる日なども、一

同があつまつてこの食事をする。屋根葺きのグシをつつむ日も、もとは同様に大切な日であつた。それとは反対にその家が火災水災にあい、多くのその人がきて働いてくれた時にも、成功不成功にかかわらず、やはり焚出しの握飯と酒とがでた。今では罹災者に給与するもののように考えられているが、本来はこの特別の労働が、かならず特別の食物を以てねぎらうべきものであつたことは、葬式の時などとも変りはないのである。

つぎに今一つ殊に大切なものは、旅行の人々にたいする給食であつた。宿屋は今でも宿泊者をお客といつて、人を招いたときと同じような饗応をするが、そういう設備のまったくなかつた時代でも、えらい人の一行がある土地を通過するということは、

附近の住民にとつては大へんなさわぎであつた。中世の記録を見ればいくらでも実例が出ているが、京都から奈良へというほどの一日路じの旅でも、前まえ以て通知があつて、昼の用意をする者があだる。駄餉だしょうとも雑ざつ餉しょうともこれをいつて、飯めしは屯食とんじきという握にぎりめし。飯めしで、汁は添しるわなかつたようであるが、そのかわりにはいろいろのご馳走ちそうが櫃ひつや長持ながもちで持ちはこばれ、上下じょうげ何十人の者が路傍の森の蔭かげなどで、草にむしろを敷いてゆつくりとこれを食べ、馬や車くるまうし牛うしまでが結構な秣まぐさにありついたのであつた。あの時代の有力者はそれを一種の見えにして、常からそういう奉仕てあをする者を、ゆく先々に見つけて置いて、じゆうぶんな手当ててあをしたのであるが、そういう縁故えんこをもたぬ貧乏な旅人たびびとには、旅は誠にう

いものつらいものであった。昼飯ひるめしをカレイというのは枯れた飯いい、すなわち干飯ほしいを持つて歩いたからである。ふつうは清水しみずのそばで水をかけて食べたのだが、涙がその上にこぼれて干飯がやわらかになったと、『伊勢物語いせものがたり』という本には書いてある。何日も何日も、そういうものを食べてゆく旅は苦しかったろうが、それでもこの食べ物食べ物が品がわりの一つであったことは、他のすべての場合と変りはないのである。つまり旅行というものは戦いくさや狩や建築工事などと同様に、家で朝晩に食べているものと、すっかりことなつた方式をもつて、食事をしなければならぬ人生の一部なのであつた。

七、農業と屋外の食事

家の内と外うち そとの食事、すなわち親子兄弟水入らずで、気楽に食べてしまう毎日の飯と、なにか事ある時だけにあつまつて、神さまや貴人の前で、またはよそからきた人々と共に、はり切った気持で食べる物とは、品が当然にかわるばかりか、これを調製する女たちの心づかいもちがい、またその材料の出どころもべつであつた。朝け夕けの常の飯はんりよう料は、ふつうにはげびつまたは糧米ろうまい櫃びつ、すなわち今いう米櫃こめびつの中に入れてあつて、それにはざつと二合半入りの、大きな木の椀わんを添えて置いて、頭あたまかずに合わせふちまいてそれではかり出した。すなわち一日一人の扶持米を、五合と立

てた計算のもとである。これにたいして屋外の食事には、前日から^{もみ}粃を搗くことが多く、飯を炊く^たにしてもこれだけは白米で、他のいっぽうの常食のいろいろ雑穀をまぜ合わせたものとは別であった。そういう中でも田植の日の飯^{はんまい}米などは、かたい家では早くから^{しら}精^{たわら}げて俵にして、用意して置くものが今でもある。またはその中へ正月の三方折敷^{さんぼうおしき}の米を、かならずくわえて炊ぐ^{かし}という風習ものこっている。こういう事実を知りぬいている人々は、だれでもあらたまった気持になって、これを味わわずにはいられなかった。ことにいさましい労働の後であつたゆえに、なにがなくてもこの田植の日の、^{ほおのはめし}厚朴葉飯や^{きなこむすび}黄粉握飯ほど、うまいと思つたのはなかったと、村から出た人はいつまでも話の種にしている。

毎年くりかえされる農耕の作業のなかで、こういう屋外の食事をともなうものは、土地によつて範囲が定まつておらず、夏中打ちつづくところもあり、わずかしかなところもあるようだが、如何なる場合にも田植前後だけは、これはかならず欠くべからざるものとなっている。そうなっている理由はいくつもあるが、手みじかにいうならば、田植は重要な労働であると共に、また一つの祭典でもあつたからである。若い男女はこの日はみな新しい仕事着で、たすきや白手ぬぐいの泥になるのもかまわず、朝は早天から田において、日の出にはもう田植唄をうたつていた。その唄の章句はかず多くつたわっているが、これにはみな田の神を田にむかえて、その神徳をたたえその御恵みにたよるということ

を、はつきり述べている。お昼も近くなると一人の若い娘が、この日の食べ物を頭にのせてはこんできた。中国地方ではこれをオナリド、関東から東北一帯では昼間持ちひるまもといっている。オナリドは煮に焚たき調理をする人ということであり、昼間はすなわちお昼の食べ物ちようじやをそういうのだが、それも田植唄のなかでは長者のまな娘、どの早乙女さおとめよりも美しく化粧し着かぎつて、いろいろの好い食べ物を持つてくるのが待遠まちどおだというふうに歌われている。以前はたぶんその人に御田の神の祭りを、奉仕する役目を持たせていたのである。そういう日の昼の食べ物が、そまつない加減なものであろうはずはない。ことに田植にはユイ組ゆいぐみといって、ある地方では近隣のしたい家々、またある土地では嫁よめ婿この縁家えんかさ

きなどがいい合わせて、たがいにきて助けてできるだけみじかい日数に、きそうて広い田を栽^うえおわろうとしていたのである。そういう人たちをよろこび勇ませ、ただ仕事の労苦をわすれしめるだけでなく、その上になお生産の前途にたいして、あかるい希望をいだかせようとするのが、この日の食事の本来の目的であつた。その起こりはよつぽど古く、事によつたら他のいろいろの祝いごとよりも、前からあつたかも知れぬのである。

八、三つの変遷

日本のもつとも古い書物の中にも女が田人^{たびと}に食べ物を持って行

くという話がのせられている。またそういう婦人になにかふしぎな事があつて、神に崇め^{あが}または塚^{つか}に祀^{まつ}つたという伝説は、今でもおりおり田舎^{いなか}にはのこっている。田植の日にお昼を田のへりで食べるという慣^{かん}習^{しゅう}の、昔からあつたという証拠は、もうならべる必要もないほど多いのである。わたしの皆さんに話して見ようとするのは、それが今日の三度の食事、または一日に六度も食べるしきたりと、どういうつながりを持っているかということ、これだけは知っておくと、きつとなにかの役に立つ時がくると思う。食物をもつとも楽しくまたもつとも有効に食べるには、何回にわけ、どう割り振るのがよいかということ、これからかならず問題になり、そうしてそれをきめる人は皆さんだからである。

三つほど大きな変遷^{へんせん}が、近世になって始まったことにまず心づかれる。その一つはこの臨時の食物が甘くおいしく、かつだんだんと珍らしいものに移ってきたことである。第二にはそういう臨時の食物を食べる日が、しだいにかず多くなったこと、第三にはまた一日のうちにも、その回数が一度以上、二度も三度もくり返されるようになったことである。この三つの変遷のなかで、一は原因が他にもあったようであるが、二と三とはもっぱら田植の日の影響であつたと見えて、農業以外にはぜひともしなければならぬというきまりがない。それでこのほうを先に見てしまつてから、最後に皆さんとも関係の深い、甘い物の話をするにしよう。

田植のあとさきには、同じように骨の折れる大きな仕事がい
 いろある。にもうさく二毛作といつて田にも麦を作るようになると、稲の
 蒔か跡あとは冬にはいるまえに、馬などを使ってさっさと起こしてし
 まうが、以前は春になりやつと田の氷がとけるのを待って、若い
 男が総出で一つ一つ去年の蒔かり株かぶを掘りかえして行く。これが春
 田打ちで、まず一年の農事のはじめであつた。それから苗代なわしろの
 こしらえがすぐにつづき、もみだね粃種もみだねをまいてしまつた日にも小さい
 祭りがあり、たねもみ種粃たねもみのあまりを焼やき米こめにして、袋に入れてもらつ
 て子どもらはよろこんで噛かんでいる。そのつぎは池いけ浚さらえ溝みぞなお
 し、田にかかる水の路みちをよく通して、土がだんだんとやわらかく
 になると、あらくれという大きな土の塊かたまりをくだき、水が漏もれないよ

うに田の畔くろを塗りかためて、それへ大豆だいずなどを蒔まくしたくをして置くのである。いよいよ田植となつて代掻しろかきえぶりすり、苗もその日の朝取るのがふつうだったが、いそがしい日には、前日の日暮れに取つて置くようになった。植えみて・さのぼりなどという祝いの日が休みで、そのわずかな期間がすぎると、ほどなく田の草取りがはじまつて、それがまた三番草四番草まで続くのである。田植を農民の重要な祭りだと気づかなくなつて、昼間の食事をこの日だけに、かぎるわけがないと考え出したのは当然であろう。それで家々の男女のあつまつて働く日は、ユイ組の助け合いはない場合にも、やはり大田おおたうえ植の日と似たような、臨時の食物をもつてねぎらう風習が、だんだんと拡張して行つたのである。

九、昼飯と昼寝

ちようどそれは日の永い汗ながの出る季節でもあつたゆえに、たび
 たび少しずつの休憩をしないと、かえつて力一杯ちからばいの働きができな
 かつた。多くの若い者を使つていた農家では、線香せんこう一本のたつ
 あいだなどという、おかしいほどみじかい時間の昼寝ひるねをさえ規則
 にしていた。卯月うづき八日（旧四月八日）の花の日にはじまり、八月
 一日の八朔はつさくをおわりとして、毎日それだけの昼寝を、働くひと
 たちの権利のように思っている地方は今でも多く、ヒノツジとい
 う言葉が日の頂上、すなわち日盛りひさかの意味だったのをわすれて、

昼寝をヒノツリといい、八朔の日をヒノツリの取上げという人さえあつた。田圃^{たんぼ}が広々と開かれて好い樹蔭^{こかげ}がなくなると、家が近ければ日^ひの辻^{つじ}にはかえつてきて、昼間の食事だけは家でする風習も生じたのである。この休憩の時間をきつぱりと切りあげて、はやく人の手をそろえるためには、ここでもわずかな食物をしたくして、食べて立たせるようにする必要があつた。それでひるねの前とそのあとの眼さましと、午後は二度まで小昼間^{こびるま}を出すところもできたのだが、それはいずれも人をつかう家の考案で、最初の趣旨からはやや遠いものであつた。

ひるまがもとは日^に中^{ちゅう}というだけの意味であつたのを、いつかその中間の食物の名にしたのは、今わたしたちのつかうヒルと

いう言葉も同じことであるが、これだけはまだ久しいあいだ、朝飯夕食のような家のなかでのきまりの食事にはなっていないかった。そのことはこれから言おうとするコビル・コビルマが、今でも屋外の臨時の食事であるのを見てもわかる。コビルマは疑いなく

「ひるま」の小さいものという意味だろうが、現在この名のおこなわれているのは、中国・四国と九州との端のほう^{はし}だけで、その他の広い区域にはコビルというものがもつとも多い。東北地方の一部、紀州や北陸の二、三の土地で、これをコビリといっているのは、たぶん昼飯を「ひるいい」という古語ののこっていたためと思うが、その由来がすでに不明になって、信州ではコビレ・オコビレ、富山県ではコブレまたはコバレ、^{のとはんとう}能登半島ではコベリと

いつている者もある。全国を見わたすと、大体は午後の休みに食べるのがこのコビルで、午前のはナカマ・オナカイリ、またはアサコビリなどの名で呼ぶ土地が多いが、中にはそうほう共にコビリで、これをヒルマデコビリとヒルカラコビリとに、言いわけしている大分県のような例もあり、稀^{まれ}にはまた午前のだけがコビルで、午後のをわざわざヒルコビリ、もしくはユウコビリといっているところもある。土地によってややまちまちになっているのは、時をことにして始まったためかと思う。岐阜県の北部山間などでは、六月農事のもつともいそがしい時、午後に二度まで出る小昼^{こびる}の二回目を、オトコビルと呼ぶ名もある。そうかと思うと秋田県の雄^お物川^{ものがわ}すじから、津軽地方^{つがるちほう}までのかなり広い区域で、ただ田植の

日の豆の粉握飯こなむすび、または強飯こわめしのような食べ物だけを、コビリノママという例もあるのである。

一〇、小昼飯とコバサマ

こういう序ついででないと、もう皆さんが聴きくこともあるまいと思うから話して置くが、まだこの以外にいくつかの変った名前がある。たとえば東京の周囲の村むら里さとから、北は福島・宮城の二県まで、西は甲州と信州の一部、東海道すじは愛知県の東部にかけて、コビルという名はなくてその代りにコジュウハン、またはオコジヨだのオコジだのという語が行われている。これを小中飯こじゅうはんという

漢字をあてる人もあるが、じっさいは昼飯ひるめしまたはヒルイイを、しやれてチュウハンと言ひ出してから後の名である。そうしてこれにもまた午後の小昼こひるをそういうところと、午前のもだけをコジウハンというところができているのである。

次になお一つ、中国地方は鳥取・島根、また広島などの各県に、夏の農作のはげしいころ、三度のほかに出る食事をハシマという名称がある。これは箸間はしまと書き、箸はしで食べる食事のあいだのものだから、そういうのだと説明してくれる人もあるが、これはこじつけで、じっさいは昼間ひるまのマと同じく、ただ中間の食事というに過ぎぬことは、村によつては小こをつけてコバシマ、又はコバサマという人のあるのを見ても知れる。ハサマはすなわち物と物との

中間のこと、今いう間かんしよく食をアイダグイ、またはハサグイというのと元もとは一つである。これも春の彼岸ひがんから秋の彼岸まで、毎日出るといふところと、盆ぼんの十三日のハシマを以もつておわるといふところと、田植のあいだだけしか出さぬといふのとがあり、時刻も午後が多いが午前のをハシマという例もある。もつとめずらしいのは、後にいう茶ちゃの子こと同様に、早朝のかんたんな食事をそういつている村もあることである。しかしこの最後のものだけは思いちがひと言つてよい。つまりはハシマやコバサマが、中間の食事といふことだったのを忘れて、かんたんな食物なら皆ハシマと、考えるようになってから後のことなのである。

日本の北の端、岩手県の九戸くのへ郡ではコワエコといふのが、午前

の九時ごろと午後の三時ごろ、仕事の一ぱく休みに取る食べ物のことであつた。これに對して九州の一部、たとえば佐賀県の三養基郡などでは、おなじ小昼こびるの食事をヤーノメシ（あいの飯めし）ともいつている。国の両方に遠くはなれてはいるが、この二つはともにあいだの食事ということで、名をつけた起こりはハシマやコバサマもかわるところはなかつたのである。ひるまのマも最初のうちは朝夕二つのケの中間ということだったのが、いつか毎日の三度の食事の一つになってくると、もうその他の小さな間食を、マということではできなくなつて、べつにアイとかハサマとかいうような、意味は同じで音おんのちがつた言葉を、用いるひつようが生じたものと思われる。

一、間食という言葉

間食という二つの漢字は、古く奈良時代のおわりごろに、書かれた本の中にもすでに使っている。日本の最初の口言葉くちことばでは、それを何といったのか明らかでないが、少なくとも今のようになンシヨクという人はもとはなく、ケンズイと字音じおんで呼んだのが古いことであつた。食をシーまたはスイーと読むのは呉音ごおんというもので、仏教を学んだ人はみな呉音をつかつていた。たぶんは大きな寺などに行つて働いた人々が、おぼえてきてはやらせたものであろう。近畿地方の各府県の住民は、今でも小昼間こびるまや小バサマと

いうかわりに、このケンズイという語を用いている。そうしても
 うその語がどういふところからはじまったかを忘れていたのであ
 る。間炊^{ケンスイ}と書いてあいだに炊く飯^{めし}だからという者があり、また
 は粥^{かゆ}を出すからケンズイのスイは吸うことだと思つてゐる者もあ
 り、または硯^{すずり}水^{みず}などというところでもない字を書いて、昔咸^{かんよ}
 陽宮^{うきゆう}で冬の日、硯^{すずり}の水が凍^こつた時に、酒をそそいでその水を
 とかしたので、それから酒を硯水^{いんすい}というなどと、ありもしない故^こ
 事^じを引用した者もある。しかし中央部の多くの例^{れい}でもわかるよう
 に、ケンズイに酒を出す場合はむしろすくなく、ただの飯の残り
 を出すこともあれば麦のお粥もあり、土地によつてはまた厚朴^{ほお}の
 葉でつつんだ強飯^{こわめし}や、餅饅頭^{もちまんじゅう}の類^{るい}だけを、そういつてゐる

ところもある。そうしてこれも小昼こびるのように、午後を主として午前のを朝ケنزスイ・四つケنزスイといたり、あるいはまた一方を七つケنزスイといたりしている。

このケنزスイという言葉を、知っている区域はかなり広いが、端々ではその意味が少しちがってきたことは、これも秋田県な

どのコビリ飯と似ている。新潟県の一部のように、小豆餡あずきあんの饅ま頭んじゅうというような念の入った品がわりだけをケنزスイというの

は、年に一度か二度のとくべつ労働の日らしく、中国地方の西北海岸や、九州の南部から島々にかけて、ケنزスイというのは親類からの見舞品で、主として大病人のあるときとか、家の普請ふしんに大だ工職人いくしよくにんのはいつているときとかに、手つだいの気持で酒や米、

または重^{じゅう}詰^{うづ}めの肴^{さかな}を贈^くつてくることであつた。もとは家々の間食もみなケンズイだったのが、のちのちこういう見舞品に力を入れる風習が起こつて、なにか特別のものと見るようになったことは、今でもわざわざ家^や建^たてケンズイなどといつてゐる地方があるのを見てわかる。建築に専門の職人をたのみはじめてから、きゆうに間食が大層なご馳^ち走^{そう}になつてきたのである。東京などの大工たちも、建^たて前^{まえ}・棟^{むね}上^あげの日に酒^{さけ}肴^{さかな}が出^でて、それをケンズイということはよくおぼえている。ただもうそれをまちがえて、ケズリという者が多くなつてゐるだけである。

一二、お茶の始まり

こういう職人たちに給与する間食を、現在はお茶というのがふ
 つうになった。村ではこれと今までの小昼こびるや小ジユウハント、ベ
 つべつに見ている人もまだ多いが、農家にもおいおい年季ねんきの奉ほうこ
 公人うにんがすくなく、日雇ひやといの働き手を入れるようになると、食べ
 させる物も一つになり、したがって名まえもちがえる必要がなく
 なる。関東地方でも、千葉県などではコジャという言葉がひろく
 もちいられ、中国地方も隠岐島などは、田植の日の午前の小バこ
 サマを小茶こちゃ、午後ひるねに昼寝をして起きて食べるのを、立ち小茶たちおちゃとも
 いつている。広島県の漁村などには、夕食に近い間食を、孫茶まごこちゃ
 という言葉もある。もちろん小茶よりも小さいものという洒落しゃれで

あつた。京阪けいはん周囲の村々でも、ケンズイという名はもう知らぬ人ができて、市街地同様にお茶という語がよく通じ、前まえ茶・朝あさお茶・四つ茶というのが午前の茶のこと、八つ茶・七つ茶・二番茶などというのが午後のである。もう知っているひとは多いだろうが、四つ・八つ・七つはむかしの時のかぞえかたであつた。七つというのはおおよそ午後四時、八つはその前の午後二時ごろ、そうして子どもたちのオヤツという語のものであつた。

お茶をかんたんな食事の意味につかうことは、西洋もよく似ている。人を働かせる日の間食にはかぎらず、本膳ほんぜんを出さぬほどの手がるな饗きよう応おうを、お茶というところは田舎いなかには多く、ことに九州などでは婚礼の前後にもお茶、また仏事ぶつじの日にもお茶とい

つて人をまねいている。このお茶にはむろん酒が出る肴さかなが出る。しかし名称の起こりはやはり茶を飲んだからであつた。茶は鎌かまく倉時代くらの始めごろに、えらい禪ぜん宗しゅうの僧が支那から持つてかえり、九州では肥前ひぜんの背振山せふりやま、それから都近くとがのおの梶尾うじや宇治に栽うえたということになつてゐるが、この説の半分はまちがつてゐる。輸入をしなくとも我邦わがくにの中央山脈には、東は東京のまわりの山々から、西は九州の南のはしまで、いたるところに自然と生えていて、焼畑やきばたを止めるとまつさきに芽を吹くのは茶の木であつた。ただ隣邦となりくにのようにこの葉を煎せんじて飲むということをもとは知らなかつただけである。茶には十徳じゅつとくがあると、禪宗の人たちはいうが、農民にとってはその半分はありがたいこ

とだ、というような話も古い書物に出ている。少なくともこのおかげにあたたかい飲み物ができ、口のよろこびが一つ加わったので、今でも茶人以上に茶を多く飲むのは、じつさいは農村に働く人たちである。この流行の大きな力となっているのは、何といつてもこの飲み物が、何かかんか食べる物もそえずに出なかつたことであろう。最初は茶塩ちやしお気といつて梅干うめぼしか漬物つけもの、まれには小匙こさじ一ぱいの塩しおということもあり、そうでなくとも腹を太くするほどの多量の物はともなわずに、ただかんたんに一時の口さびしさをまぎらし得るということが、おそらくは茶の人望じんぼうの基もとであつた。みじかい休憩の回数がそのために多くなり、一方にはまた何の仕事もせず、腹もへらない人たちまでが、たいくつだといつ

ては盛んにお茶を飲むようになった。そうしているうちに、砂糖という曲^{くせもの}者が、いよいよ姿を現わしてきたのである。

一三、砂糖の魅力

いちばん大きな変動を受けたのが子どもたちであるが、それもずっと後のできごとであつた。砂糖が日本にはいつてきたのは、四百年近くも前の話だけれども、始めのうちはただ名を聴^きいたばかりの珍^{ちんぶつ}物で、都会に住む人々、それもよっぽど良い暮らしの家でないという味が入らなかつた。しかしそのころを一つの境^{さかい}として、甘いという味がおいおいと普及することになったのは、やはりお

茶というものの影響であろう。子どもはただ味をおぼえたら忘れぬというだけで、自分でさがし出すことはできないのに、砂糖以外のいろいろの甘味あまみが、つきからつきと日本の食べ物に加わってきているのである。

茶を飲む風習が農家にはいつてから後のちに、はじまつたろうと思ふ食べ物はいくつかある。一つ例をあげるとオケジャまたはウケジャというもの、全国諸処しよしよにあるが、名まえだけは同じで、物は少しずつちがっている。播磨はりまの一部では挽割ひきわりむぎ麦と蚕豆そらめとをまぜて、塩加減しおかげんをして飯に炊たいたもの、備中びつちゅうの吉備郡きびでは麦と豆を炒いつてまぜて煮た米の飯めし、出雲いずもの松江附近では番茶ばんちゃを煮立にたててそのなかに飯を入れて煮たもの、どれもこれも旨うまくも

なさそうだが、香氣こうきがあるのでちよつと愛相あいそうになつたものであ
 ろう。越後えちごの高田たかだ辺でも、米と大豆だいずをざつと炒いつて飯に炊いた
 ものがオケジャ、駿河するがの志太郡しただでは飯を炒つて味をつけたのをウ
 ケジャまたは茶菓子ちやがしともいつており、紀州きしゅうの熊野くまのなどでは、炒い
 り米こめと薩摩薯さつまいもとをまぜて炊いたものがオケジャである。飴あめや砂
 糖とはくらべものにもならぬが、甘藷かんしょや黒豆くろまめには少しの甘味
 があり、まためずらしいのでお茶の相手によかつたのであろう。
 ともかくもただ空腹をしのぐというだけでなしに、しだいに口を
 よろこばすという目的がつけ加えられたことは、餡餅あんもちなども同
 じである。

農村には今でも砂糖をあまりあてにせず、戦争中の配給から使

いはじめたという家もまれではないらしい。小豆^{あずき}の餡^{あん}などはわたしたちから考えると、ただ砂糖^{やど}の宿^{やど}としか見えぬのだが、その砂糖はまったくなくて、餡^{もち}だけを餅^{もち}にぬって食べていた時が、ずいぶん久しいことづづいてるのである。これにはなにか特別の理由もあるらしいが、総^{そう}体^{たい}に昔の人は歯をおもんじ、咬^かみしめて味の出るものをよろこんだにたいして、このごろは舌の触覚を主にするようになっていゝ。栄養という言葉は使わなかったけれども、食べて身の力になるということが、以前は食事のただ一つの目的であつたのが、後にはかえって口の楽しみに引かれるようになった。ことに砂糖の食べ物^{かんしよく}が得やすくなつてからは、子ども^{かんしよく}の食事などは回数が多く、茶と茶の中間にまた新たな間^{かんしよく}食^{しよく}を、

ほしがる者さえできていたのであった。これも一つの習慣にはちがいないが、オヤツやお三時の起こりは存外ぞんがいにあたらしいものなのである。以前は食べる日が一年のうちに、指をおつてかぞえられるほどしかなかった。それを毎日かならずもらうことにしたのは、子どもとしては一つの大きな歴史であつた。

一四、お菓子かしの歴史

おしまいおしまいに今一つだけ、お菓子かしの歴史というものを、このついでに話しておこう。菓子はその文字がしめしているように、もとはただの果実のことであつた。果実にも桃もも・梨なし・楊梅やまもも・覆盆子いちご

等、やわらかくて甘いものがいろいろあるが、生で食べられる日
 は幾いくにち日もないから、年中いつでも出るのはほして貯たくわえて置か
 れるものだけであつた。それをぼつぼつと摘まんで食べたのは、
 客などのきたときのただの慰なぐさみであつて、飢うえを凌しのぐというのは始
 めからの目的でなかつた。家でも正月だけは集まつてこれを食べ
 たと見えて、干柿ほしがき・榧かや・搗栗かちぐりというような、今はお菓子とい
 わない昔の菓子が、三方折敷さんぼうおしきの上に鏡餅かがみもちと共にかならず積
 みあげられる。昆布こんぶや山やまの薯いもや野老ところなどは木の実でないが、これ
 も早くから菓子かしのうちに加えられていた。それよりもつとよろ
 こばれたのは白黒しろくろの大豆だいずの炒いつたの、つぎには蚕豆そらまめという大
 粒の豆などで、わたしたちの小さいころには菓子というものはべ

つにあつて、これらを菓子とはいわなかったが、村の子どもはじつさいはこういうものばかり食べていた。

京都その他の大きな都会に、菓子屋かしやという店のできたのは古いことであるが、最初はただ昔からの菓子、すなわち木の実や豆や昆布や薯を、味よく食べられるようにしたものだったらしい。そこへ砂糖がはいったので、さつそくとそれを利用し、今いう干菓ほし子がしというものをいろいろと考え出して売ったが、まだしばらくのあいだ、餅団子もちだんごの類るいはお菓子のうちには入れなかった。生菓子なまがし蒸菓子むしがしというような名まえは、上方かみがたから西の子どもは知らなかった。餅菓子もちがしというのと餅と菓子と、二つをならべたもののように思っていた。菓子がやわらかな噛かみくだく必要のないものになつ

たのは新らしいことである。

そんならその干菓子でないほうの、今いう生菓子なまがしをなんといつたかというと、百年前までの日本語はお茶ちやの子こであつた。お茶の茶受けは塩でも梅干でもよかつたのだが、何かことのある日には念入りに、こういうものをこしらえて出したので、今でも年とつた人にはまだこの言葉を知っている者が少しはある。腹にたまるまでのたくさんの分量は出さぬので、どうしても味をおいしくする必要があり、甘味なども少しずつこの方面から加わってきたのだが、それでもまだ田舎いなかには、ちつとも甘くはないお茶の子、どちらかというと少しまずいお茶の子がのこっている。これから夏のはじめ頃にかけて、皆さんのように朝早く起きる人たちは、気

のつくときがきつとあると思う。農家の若い男女は床をとこをはなれるとすぐに、鎌かまを持ち馬をひいて山へ草をか刈りに行くが、その時にはいろり囲炉裏の灰の中から、昨晚入れて焼いて置いた大きな団子だんごを掘り出して、ふうふうと灰をはたき、路々みちみちかじりながら出かけるのが、多くの農村のふつうの例であつた。そうして一仕事ひとしごとしてきてから、かえつて本ものの朝飯あさめしを食べるのであつた。この団子の大きさはメロンほどもあつて、材料は蕎麦そば・稗ひえの粉こ、たまにつちぼ土穂つちぼといって米の調整のときに、一番あとにのこつた屑くず粉もみを粉ひに挽ひいたものもある。塩しおも入れないのが多いから決してうまい物でないが、若い者はよろこんでこれで空腹をみたしたのであつた。この団子の名はどこへ行つて聴きいても、大ていはお茶の子であつ

た。すなわちもとはお茶の相手に食べたものを、後にはお茶なしに、「子」だけ食べていたのである。

一五、遅い朝飯

このお茶の子ばかりは、じつはわたしなども食べて見ようという気にはなれなかった。それで旅からかえってその話をする、もとは東京などの人はびつくりしたり、笑ったりしたものであった。しかしそういうのはもう歴史を忘れたので、前には江戸といった大きな都会でも、草こそは^か苳りに行かなかったけれども、やはり早朝にこのお茶の子を食っていたのである。その証拠として

は何によらず、それくらいな仕事はいと容易だ、またはちつとも

こまらないというような場合に、朝飯前だともいえばまたお茶

の子だともいつていた。すなわち二つの言葉は同じで、もと朝

飯しを食わぬうちに、お茶の子だけで、一仕事をしていた名残なごりで

ある。『宝曆ほうれきげんらいしゅう現来集』という書物を見ると、今から百六、

七十年前の安永あんえい年間までは、朝々江戸の町を「お茶の子お茶の

子」といつて売りあるく商人があつた。そのお茶の子は今いう鶯う

餅ぐいすもちのように、餡あんをつつんだ餅に黄粉きなこをまぶしたものであつた。

手のない家ではこれを買取つて朝茶を飲み、それで朝飯をぬき

にした人が多かったということである。農家のように味くらいうちか

ら起きるのでなければ、この茶の子のあとで朝飯を食べ、それか

らまた昼のしたくをするというのは、なるほど必要もないことであつたろう。フランス人などの生活を見ても、朝は起きぬけにコーヒを飲みパンを少しかじるだけで、われわれが朝飯と訳している食事は十一時過ぎ、お昼の少し前になつて食べるのをふつうのようにしている。日本の田舎でも朝飯は昨日きのうの残りもの、そのほかいたつてかんたんいなかにすませておいて、その代りには昼飯をずっと早く、十時少しすぎるともう食べるというところもあるが、これなどは果して昼飯であるやら、または朝飯の時刻をおそくしたのやらわからない。というわけはこういう土地においてはきつと朝飯のことを茶の子と呼んでいるからである。そうして一方にはまたひるまの食事は屋外おくがいで食べるものとして、茶の子の

つぎにくる朝飯をおそく、かつじゅうぶんに食べる土地も、東北などにはあるのである。何もしないで一日に三度、毎回膳ぜんごしらえをして食事をするというのは、かならずしも日本のふつうの生活ではない。都会の住民でもそうしている人は、じつは半分もないのである。二度にしたからとて食料の儉約にはならず、やはり身を養う分量だけはへらせないが、それでもこれにともなう手数と気づかいとだけは、二度にもどすことによつてはぶくことができるであろう。それがまた剛健なる古代日本人の生活でもあつた。ただそのために急に口淋くちさびしくなる人が、年寄としよりや子どものなかに多くなることだけはお気のどくだといわなければならぬ。そういうのはげしい時代なら、年寄りは多分我慢がまんをするであろう。そ

れから小さな人たちも母の注意によつて、だんだんと間かんしよく食も
少なくする習慣をつけられている。砂糖の甘さなども、忘れてしま
わねばならぬ時があるかもしれない。しかし今から二、三十年
前までは、それはそれは子どもがよく食べた。一つには大人おとなもな
んとかとかいって、茶を飲み甘い物を食べる回数を多くしてい
たからであつた。昼間または中ちゆうかん間のマという言葉をはじめと
し、ハシマも小こバサマもケンスイも、もとはすべて間食というこ
とであつた。それがさらに進んでそのまた中間にもなにか食べる
のを、中国地方ではハスワ食い、四国ではアイマ食い、九州の各
地ではハザ食い、南の島ではマドモノ、中部地方にみるとコバミ
ともコマグチともいう者が多く、近畿地方ではどういふわけか、

これをホウセキともヒズカシともいつていた。またタラシともいう人があるのを見ると、ヒズカシも幼児をすかす物ということであろう。越後から北^{ほくしん}信地方にかけては、これをまたスサビという語があつて、古い名のように思われる。わたしなどの生まれた村では、オヤツだのお三時だのという言葉はなくて、小さい児^こはこれをナンゾといつていた。東京でナンカというと同じく、なんでもよいからくださいということから出ている。このナンゾを連発しつつ、わたしたちは成長してきたのであつたが、それとくらべると今の時代はまた大いにかわっている。

棒の歴史

一、風呂敷包み

日本人の特徴は、眼鏡めがねに風呂敷包みふろしきづつだと、よく外人らがもとは言ったものである。もちろんそんな特徴ばかりを見ていたからいけないのだが、なるほど考えて見るとこの二つはよく目につく。眼鏡は日本人でなくとも、少しは掛けているが、風呂敷包みのほ

うは、よその国の者はあまり持つてあるかない。そうして眼鏡は近視眼きんしがんさえなくすれぱうんと減るが、風呂敷包みのほうはどうであろうか。皆さんは大ていカバンを掛けるようになったが、そのためには、風呂敷はちつともまだ不用になつてはいない。風呂敷とは全体みような言葉である。もとは風呂を出たときに、こんな四角しかくな布で足をふいていたからという人もあるが、それがどうして荷物を包むものになつたのか、今は風呂にも敷かないのに、どうしてそんな名をつけたのか、その説明にはちつともなつていない。東北地方では、風呂敷は女の顔をつつむ頭巾ずきんのことで、これは風呂敷頭巾ふろしきずきんを略した言葉かもしれないが、あちらでは、わたしたちほどには風呂敷包みを持つてあるかない。九州地方には風

呂敷という名はなくて、平^{ひら}油^ゆ単^{たん}というのがこの風呂敷のことである。油単はもと行^{あん}燈^{どん}などの下に敷く敷物、のちには箆^{たんす}筥^なや長^な持^{がもち}の覆いに掛けて置く布の袋のことで、それを平たくまた四角にして、べつの用に使うから平油単なのであろうが、ともかくも三百年まえには聞いたこともないものであつた。

然^{しか}らばどういふわけで、このような物が日本に始まつたのであろうか。またはこの風呂敷包みが始まるまでは、何かわりの役をしていたものであろうか。こういうことは判^{わか}るならば知つて置いたほうがよい。ことに昔からこの通りであつたものと思つて、あたりまえのことだとしていた人は考えたほうがよい。人によつてはもと服^{ふく}紗^さともいったものを、たれかが風呂敷などと名をかえ

たのだというが、この二つは同じ物ではない。服紗は絹きぬの美しい
小さなもの、一方にはそまつな大風呂敷おおふろしきもあつて、物を包むだけ
にしか使わぬが、服紗には物を包む以外のいろいろの使いみちが
あつた。あるいはまた平包ひらづつみというのが、風呂敷包みのもとの
名のようにいう人もあるが、それもまちがつている。平包みはた
だ物を平たく包むだけで、これならば支那からくる呉服ごふくしやうにん商人
なども持つてあるいている。こちらの風呂敷包みは、四隅よすみを紐ひもの
かわりにして結ぶのである。平包みや服紗包みが前に、なかった
ら、風呂敷包みということとはかんがえ出されなかつたろうとまで
は言うことができる。ただ、こういう包み方のできたのは新らしい
ことで、それはまた新たな必要からであつた。

二、歴史は単純でない

わたしの話の題は棒の歴史、あんな棒見たような何でもない物にも、なお人間のほうから見て、見のがせない大事な変遷^{へんせん}があるということ、皆さんに気づかせたいために、こんな題をつけたのだが、それは同時にまた風呂敷包みの歴史でもあるのみか、ひろくいうならばわが邦^{くに}の、運搬方法の昔から今まで、だんだんと進んできた途筋^{みちすじ}を説くことにもなるのである。

なにかここに^{けものあり}ある物をあそこまで運んで行きたいと思う場合、鳥や獣^{けものあり}や蟻^{はち}・蜂^{ちんぼ}・蜻蛉なども、足でつかんだり口にくわえたりし

て、持ちあるくことまではする。猿^{さる}だけは手に取つてある距離を運び得るが、手というものは、元来ほかにもいろいろの用があるので、永^{なが}く持つてもおられず、またそう大きな物も持てない。人は幸いにはやくから考え深く、手もさまざまの形にして利用したばかりか、なおつぎつぎに頭と背と肩とを使つて手を休ませ、また手では持ちきれない物までも遠くへはこんだ。それが今^{こんにち}日のように高い空から、または海の底から、自由に送りとどけられるようになるまでに、人が人にたのまれ、もしくは牛^{ぎゅう}馬^{うば}駱^{らく}駝^だや船^せんしゃ車^{しゃ}などを使いこなして、それはそれはいろいろの新らしい運送方法を、近世はことに頻^{ひんぱん}繁^{はん}にかんがえ出していたのである。それが一つとして手数が今までよりもすくなく、効果が今までより

も大きくならなかつたものは無いのは、棒の改良も風呂敷包みも皆おなじだった。これだけはだれにでも、考えて見ればすぐにわかる。

わたしたちのふしぎに思うのは、これほど改良に改良をかさね、村には手^{てぐるま}車やリヤカアが行きわたった今日^{こんにち}、どうしてなおいくつも古風な方法、たとえば棒というならば、前からあつた三通り以上のものが、今でもなお使われているのか、または風呂敷包みのような昔からあつたわけでもないものが、何^{どこ}処に行つてもまだこのように流行していて、古いものと新しい方法とが、ならんで共々に活^いきているのかということである。土地の事情というようなかんたんな言葉でも、ひと通りは説明し得られるのかも知

れぬが、つまりわたしたちの一人一人の必要には、まだ改良のできないこまごまとしたものが、かず多くのこつていたのである。そうして現在あるものが、ともかくも今では一番つごうのよい方法であるということが、だいたいには想像し得られるのである。それを折角せつかくいろいろの新らしい便利なものがもうあたえられているのに、頑固がんこで物知らずで古いものにくつついているのだと言おうとする人もあるが、そんな事をいうのは、今すこし一つ一つのもののお実際の働きを、くわしく知ってから後あとでなければならぬ。

三、荷造りと入れ物

ただし皆さんはまだそう多くのものを知っていない。村に住んで朝晩見ていると、この風呂敷包みにはかぎらず、今まで知らなかったいろいろな物の運びかたが、あつたということに気がつくばかりであろう。わたしはそれをかず多くあつめて見ると、ながい間の日本の交通輸送の歴史が、だいたいにわかつてくるのだから、忘れぬようにしなければならぬということを話して見たいのである。

最初には博物^{はくぶつ}の学問もおなじように、まずじょうずな分類とすることが必要であつて、それには自分たちよりも多くの事実を知っている人の、いうことを聴^きいて見なければならぬ。物を遠

なんにち

くの土地へ何日もかかつて、または人をたのんで送ろうとするには、荷造りということをしなければならぬが、それが近まわりを自分で持ちあるく場合ならば、大した丈夫じょうぶな荷造りにもおよばず、またそうすればかえって解くのに手数料がかかつて損なことも多い。わたしたちの運搬は、まずこの近まわりのほうから始まっているのである。家の前うしろや隣家となりまでなら、猿さるも同様にむき出しでもかかえて行けるが、散ったりこぼれたり人に見られたりするのをいといえば、容器すなわち入れ物がほしくなる。それで入れ物は荷造りの最初なのである。もとは貯蔵用とかねていたろうが、たいていは手製なのだから、いろいろと自分たちの必要にあわせて、べんりな大きさや形がかんがえ出され、のちにはそれ

をやや遠方への旅行にもたずさえて行けるようになった。そういう中にもいくつとなき種類があつて、古い絵巻物えまきものなどの画えにつたわっているのは、木の櫃ひつや袋のたぐいであるが、二つとも手製が容易でないうゑに、櫃のほうは持つのに二人かかるものが多く、袋だけはそまつなごわごわした物を入れてあるくために、絹きぬや布以外の多くの材料をつかつたのが、今でもまだ弘ひろくもちいられている。それよりも日本という国のありがたいことは、竹と葛蔓かずらとが野山のやまにありあまつて、これをいろいろの容器に利用する技術が、まことにらくらくと国民のあいだに進みかつひろまつてきたことである。籠かごというものの古い日本語はコであつて、そのコの形状は、我わがくに邦では無数である。写真やスケッチにしてあつめて見る

と、かえつて分類にまようほど千變万化であるが、幸いにして使いかたが大よそきまつており、また名称もよく似たものが多いから、かんたんにその系統をたずねてみることができる。それは手に持つか腰に下げるか、頭にのせて行くか背に負うか、はた棒にくくりつけて肩になうか、これによつて大小もかつこうもきまり、また区別のために名まえもかえている。そうしてはじめは、ある一つの方法のためにできた籠または袋を、のちには第二第三の運搬用にも、使いだしたということがわかつてくるし、どの点がとくにつごうがよくて、改良をしたかということも明らかになつてくるのである。

風呂敷はつまりその改良の一つの端であつた。袋には底があつ

て出し入れにすこし不便であり、籠のほうはまたからっぽになつても、嵩^{かさ}だけはちつともすくなくならない。だから持つて行つておいてくるような品物には（イ）最初には背をやすめ、また背負いかたを手がるにするために、平^{ひら}包^{づつ}みの布の二隅^{ふたすみ}を紐^{ひも}に代用して、そのまま肩にかける方法がかんがえだされ、（ロ）次には下げたりかかえたりする袋や籠のかわりに、用がすめばなくなつてしまうほどの、かわいい服紗^{ふくさ}にちかい小風呂敷^{こふろしき}というものはじまったのである。だから風呂敷包みがどうしてできたかを説明するのには、やっぱり今ある手と背との運搬方法を、気をつけて見る必要があるのである。

四、女と運搬

小風呂敷はもとは女のもので、これを男までがさかんに使いだしたのはいたつて新らしく、明治以来といつても言いすぎでない。そんならその前にはどうしていたかということが、当然に問題になるが、これにも男女をわけてかんがえて見るのが順序である。まず男のほうには負うとかになうとか、他ほかにいろいろの持ち方があり、すこし大きな物なら供ともの男をつれて、持たせて行くという途みちがあつた。だから供という者のなくなつてしまふまで、男には小風呂敷の用はなかつたのである。女も背や肩を使うことは村の内では少ししているが、遠くへゆく時には貧しい者でもあまりそ

れをしなかった。その理由はべつにもう一つ、頭の上にのせてゆくという技術が、かれらのあいだに発達していたからである。

それで最初にまずこの戴き^{いただ}という運搬法を話して見なければならぬが、これは近世の百年か二百年のあいだに、急にすくなくなつて行こうとしている。東京の附近で、そだった人などは、これを見ようと思えば伊豆^{いず}の大島^{おおしま}か、それから南の島々に行くよりほかはないが、わずかに以前は伊豆半島の南部でも、また房州^{ぼうしゅう}にもそれがいくらかあった。京都で名物の大原^{おはら}や北山^{きたやま}の柴売^{しばうり}女^{おんな}をべつにすると、だいたいこの風習は海近くの村里^{むらさと}、こゝに魚^{うお}などを売りあるく婦人にばかり多いので、なにか職業や家筋^{いえすじ}にむすびついた特別の技術のように、かんがえている人もあ

るらしいがまちがっている。頭のまんなかに重いものをのせて、手ばなしであるいてくるなどということは、ちつとやそつとの巧こうしや者ではまねられるものでない。かならず身のこなしや足の運びように、祖母そぼから母への代だいたい々の練習が、積み重なっているのである。その練習の機会がわずかでもすくなくなれば、たとえば続けるにしても、だんだんと骨折ほねおりが多くなつてきて、ついにはこれで一生の暮らしを立てる人たちだけの、職業の技術のようになつてしまうのである。伊豆の大島などに行つて見てもわかるし、また同じ習わしをもつアジアの国の、多くの民族の例をきいて見ても同様だが、どこでもはじめには水汲みずくみから稽古けいこするのである。大島の女の子なども、わたしの行つて見たところには、学校へ来る

のに本の包みまで頭にのせ、またわずかずつの柴しばや秣まぐさまでささげていたが、親が教えるのは水汲しみみが主であつたとみえて、八つ九つの小娘こむすめまでが、年に似合つたちいさな水みず桶おけをこしらえてもらつて、それを頭にささげて遠い井戸いどに通つていた。朝晩時刻をきめて、女たちは一列にならび、一ばん年かさのしつかりとしたのが、水の桶を小さい子の頭に置いてやつて、しまいに自分は一人でささげて行くのであつた。降つても照つても一日に二度、この水を汲みに行かねばならぬ。家に使われる者のない小さな家庭では、これが妻や娘のふつうの役目であつたことは、もとは京都も同様であつた。その為ために多くの女たちは、頭のまんなかの毛が禿はげていたということが、鎌倉時代かまくらの書物にも書いてある。だ

からそのころの女の方は、みんな頭に物をのせてあるくことができたわけである。

五、水を運ぶ技術

それが如何^{いか}なるわけで今日のように、頭上^{ずじょう}運搬^{うんぱん}というものがめずらしくなったのかというと、これもわたしは飲水^{のみみず}が主たる原因であつたと思つてゐる。水道やポンプの普及するよりもまえから、横にも豎^{たて}にも水をひく工事は発達して、掘井戸^{ほりいど}は家々にちかくなり、共同の泉^{いずみ}まで汲^くみにゆくひつようが、多くの村里^{むらさと}ではなくなつてしまつた上に、さらに手桶^{ておけ}というものが発明せら

れて、あまり遠くない井戸からならば、これを片手にさげてこられるようになったのである。今からかんがえると何でもない事のようにあるが、以前に幅の広い薄板うすいたをまげてとじた桶、または水甕みずがめをもつて水をはこんでいたころには、これに手をつけてひつさげるなどということは、想像もおよばぬ話であつた。それが今見るような桶おけに變つたのは、女たちにとつては大へんなできごとであつた。樽屋桶屋たるやおけやの商売が我邦わがくににはじまつたのは、はつきり何時いつからということはできないが、ともかくもそう古いころのことでないらしい。これは曲物細工まげものさいくからの改良ではなく、全然あたらしいべつな工芸であつた。樽くれと称する檜ひのきや杉の木の四つわりを、円周にそうした線で厚く豎にわり、それをけずつて円まるい形に

つなぎあわせ、そこから葛かつらや竹の輪でしめつけて、底を入れたものが今日こんにちの桶であり樽たるであるが、これだとかくかんたんに、手桶の手をつけることができるのであった。手桶のさげ方にもうまいとまづいとはあろうが、だいたいに今はまだ形がきまつていないという感じがする。そうして三町と五町とへだたったところから、こうして水を汲んでくることは容易なわざでない。つまりは井戸が近くなつたことが、大いに手桶の利用を助けているのである。司馬江漢しばこうかんの『西遊旅譚さいゆうりょたん』という紀行は、今から百四、五十年前のものであるが、これには中国のある山村で、女が毎日谷た川にかわへ水を汲みにかようことが書いてある。往復一里もある路みちを頭に桶をのせて、路々も手を休めずに苧糸おいとを績うみながらあるいて

いるとある。手桶で水をはこぶ人には、もちろんそんなことはできない。千代能ちよのうという尼あまさんは江戸期のはじめ頃に京都にいた人だが、この人が悟りを開いたときに詠よんだという有名な和歌がある。

千代能がいただく桶の底抜けて

水たまらねば月もやどらず

すなわちこの人もまだ水桶はいただいていたのである。「松まつ風村雨ぜむらさめ」という二人の女の舞まいは、『源氏物語げんじものがたり』にもとづいて作ったというが、それが二つの桶を棒の両方になつて、潮しお

を汲みに行くところを舞うのは、えそらごと絵空事というものである。手

桶ができて後あとならばバケツというものも考えだされようし、棒で

両方に下げる担にない桶おけを、男にかつがせることも始まるであろうが、

それがもしふつうであつたら、女の頭上運搬はこのように久しくは行われなかつたはずである。今となつては、なんだか氣のどくな労働のように思われるけれども、近ごろまでこれの行われていた地方では、女の姿勢はすらりとし、足腰の筋肉もよく発達して、今見る前かがみの内足うちあしなどは、むしろ小風呂敷のさかんに用いられるようになってからのことだった。物を持ちこぶ方法は、一般に手から背へ肩へまたは腰へと、なるだけ手を明けておこうとする方針であるのに、この風呂敷包みというものだけは、

新たに始まったものとしては、ふしぎに手の自由を制限しようとしているのである。

六、額を使う負いかた

女が頭と頸くびの骨とを使う運搬のしかたが、もう一つあることは知らぬ人がきわめて多いであろう。それは日本の端はしのほうの、わずかな区域だけに行われているからで、それもあるいは遠からず消えてしまうのではないかと思う。人が背なかに物を負う場合、力の半分は肩に持たせるのがふつうだが、九州の南に遠くはなれて島々と、中部では八丈島はちじょうじまと、北は北海道の前からの住民と

のあいだに、負^{おいひも}紐^{ひたい}を額にあてて背負うものがあつて、これも女

の運搬に多く行われている。わたしなどのめずらしいと思つてい

るのは、南の島では、これにはつきりとした境^{さかい}の線があつて、た

とえば沖縄本島ではあの島のもっとも細くなつているあたりが一

つの境で、それから南では荷物を頭の上にのせる。沖縄より北の

島々では、宝^{たから}海^{かい}峡^{きよう}がまた一つの境の線であつて、それから

南には今もぽつぽつとそれが見られ、北は七島^{とつ}から九州の内陸沿

岸までは、一帯に皆頭上運搬のほうである。あるいはこの人たち

も重い荷物だけは八丈島のように、もとはこうして背と額とでさ

さえていたのが、のちに一方をやめたのでないかとも思われるが、

ともかくも現在は南北の両地とも、額を使う人々のあいだにはも

う頭の上にいただく風は見かけない。そうして一般に棒とか大風呂敷包みとかいうような、肩を以前よりも多く使う運搬法が、だんだんとひろく行われてきている。

今からかんがえてみると、負搬ふはんすなわち背で物をはこぶ方法には、べんりと言え言われる点が二つあった。その一つは両手の自由につかえること、山へ登るのに木につかまり萱かやをわけ、または杖つえとか少しの武器とかをとって、急場の危害をふせぎ得られること、その二は練習と忍耐または持前もちまえの力によつて、荷物の分量をよほどのところまで増加し得られることで、そのために人が余計な労苦をすることになったけれども、一方にはまたこの二つの長処ちやうしよを利用して、中世いろいろの我邦わがくにの交通は、いちじ

るしく開けすすんだのであつた。手に物を下げたりかかえたりする場合はいうにおよばず、頭にのせるものもそうそう遠くまでは行けない。まれには病氣の夫おつとふとんを蒲団ふとんにくるんで、京都のお医者へかよつたなどという話ものこつてゐるが、そういうことは重さだけでなく、かさからいつてもむりな話で、その点は棒に通して肩になう場合もほぼ同じことだが、つまりは人間の背なかだけが、あんな大きな物をはこぶ可能性をもつていたのである。車や役えきち畜くのいくらでも利用せられるようになるまでは、どんなに骨が折れてもこの方法は世の中のためにひつようであり、したがつてまたこれを少しでも楽に軽便にするように、今でも改良はなおお少しずつつづいてゐる。しかもその改良はどれもこれも、そういち

じるしいものでなかったからであろうか。ちがった土地に行くと
まだもとのままのところも多く、皆さんが疎開そかいの村里むらさとにおいて、
直接見ているものをなるべくくらべてみても、ほとんど昔からの変へ
遷んせんの、すべての段階を知ることができるのである。比較とい
うことがこういう場合において、分類について大切なことがわかる。
一人でのこらず見ることできぬ人々は、それをたがいに話し合
って見るために、できるだけ確実に物を観みて、書いたりおぼえた
りする習慣をつけておくと、将来つごうの好よいことがひじょうに
多いであろう。

七、駄荷と歩荷

人がみずから働く昔からの運搬法のなかでは、ただこの背を使うものだけが遠方の輸送に供せられ、したがってまた職業になっていた。わがくに我邦の中央山脈では、これを横断する無数の交通路があり、いずれもこれによつて物を向う側へ送つていたと思われるが、そういう中でも北陸の各県から、主として海で採つたものを持ちこんで、麻あさや米麦こめむぎなどの内陸の産物と、交易したものがもつとも有名で、わたしたちはこれをボツカと呼んでいた。いそいで今のうちによく見ておかないと、もうこれもだんだんと少なくなり、絵や写真などにもそう残るまいと思うが、この人たちだけは遠方へ物を持って行くのだから、よつぽど村々のあいだを背負い

あるく者と、ことなつたしたくをしていたのである。

ボツ力は文字に書くと歩荷、古い日本語ではカチニといつていたのを、いつの頃よりかしやれて字音じおんで呼ぶようになってゐるのである。駄荷だにすなわち牛や馬の背ではこぶものにたいして、人が徒歩で負うゆえに歩荷かちにであつた。人はもちろん牛馬のように、その多くの重い物は負つてあるけない。それならどうして駄荷になつてかたかと、あやしむ人があるうも知れぬが、その答えはいたつてかたんである。つまりは山越えの路みちを、牛馬の通るように平たいらにすることは、ひじように金のかかる仕事だつたからである。多くの昔からある峠とうげ路みちのふもとには、軽井沢かるいざわという地名がまだ残つてゐる。富士や日光山の馬返うまがえしというのも意味は同

じで、ここまで馬の背に積んできた荷物を、この沢の口でおろし
 て小さくして、人がかるうことになつていたところなのである。
 縄なわで背なかに物をくくりつけることをカルウという言葉は多くの
 人がまだ知っている。奥羽おうう地方へゆくと、家々の若い働き手をカ
 リコというが、これもかるい子で、かるうのが、かれらのおもな
 仕事だつたからである。江戸の町にも元もとはカルコという者が多く
 住んで、引越しその他の運搬にやとわれていたらしく、今も軽かるこ
 子坂ざかという地名がのこつてゐる。ちようど牛込うしご見付めつけと飯田いいたばし
 橋とのあいだを、北へ登つて行くほそい坂道さかみちがそれで、馬は
 いくらも使える江戸のような土地でも、やはり人の背を借りたほ
 うが、べんりな場合がいくらもあつたのである。

八、連尺あきない

このついでに今一つ、江戸の古い町の名で、東京になるまでのこつていた、かんだ神田の連れんじやくちよう雀町という地名も、もとは運送業者の住んでいたところであつた。これは明めいれき暦三年の大火事に焼けて、今までそこに住んでいた人たちを、西の郊外にうつして村を立て開墾させた。それが三鷹みたかの駅の近くにある連れんじやく雀という村だつたということが、古い書物には書いてある。百余年以前には、村の戸数こすうが上じようげ下をあわせて百六、七十、まだその以外にも同じ火災のあとで、利根川とねがわの川口に近い新田場しんでんばへ、疎開そかいさせた家が

数十戸もあつた。これが全部みな連雀を職業にしていたのではなく、もうその頃にはいろいろの人が入りまじつて住んでいたのかも知れぬが、ともかくも連雀は背に物を負う方法の一つであり、それがちょうどこの大火のころから、だんだんとこの大都会には、入用が少なくなろうとしていたのである。

かる子とこの連雀とのちがいははつきりとしている。これを職業にしていた者の出所^{でどころ}も、また習慣もおそらくは別であつたろう。かる子のほうはただ長い荷繩^{になわ}をもつて、物を直接に背にかるう者だつたにたいして、連雀も長い繩^{になわ}をもちいたことは同じだが、べつに木でつくつたかんたんな杵^{わく}のような物があつて、それへ荷物をくくりつけてから負うたのであつた。連雀はがんらい小鳥の

名で、連れんじやく鵲つばきとも書くことがある。左右の翼つばきに一本ずつ、長い

羽があつて垂れているのが、この背せ負おいわく棒とすこし似ていたので、

だれかがたわむれにこのような名をつけたものであるが、それも

江戸になつてから始まったものでなく、まだ織田信長が尾張おわりにい

たころから、秀吉ひでよしの伯母おばむこ賀かになるすぎはらしちろうざえもん杉原七郎左衛門という人が、

清洲きよすに住んで連れんじやく尺あきな商あきないをしていたという話があり、また

「茶壺ちやつぼ」という能狂言のうきやうげんでは、路傍にねむっている男の連尺

へ片手を入れて、その荷物を自分の物だと、言いがかりをつける

悪者わるものの話などもある。すなわち荷をくくった縄のあまりを前に

まわして、それへ左右の手を通して負おいあるくような、かんたん

な仕掛しかけをかんがえ出した者があつて、それが商あきない物などを売り

あるくのに、かるいにくらべるとひじょうに便利なもので、利用する者が多かったのである。あるいは連れんじやくしゆう寂衆しやくしゆうという一種の部落があつて、ここで行ぎようしゆう商しゆうをしていたという言い伝えもある。そのためかどうかは知らぬが、農村の人たちはあまりこれを使つていなかった。

これが連雀という鳥に似ているからということ、今ではもう忘れてしまった人が多くなつた。ふつうは連れんじやく尺しやくという字を書いて、これを背負い杵りようわきの両脇りようわきに取りつけた紐ひものことだといひ、また山林のほうで働く人たちは、連尺はただ長いロープのことだともいつている。そうなつた原因はいつの頃よりか、この連尺にまた小さな改良がくわえられ、繩のあまりを前のほうにまわして

輪にするかわりに、べつにこれだけに両手を通す紐^{ひも}をつけ、それも肩にくい込むのをふせぐために、その部分の紐をひろく、布の古^{ふるぎ}切れで織ったものを使いはじめたからである。それで土地によつては連尺を背負^{しよいこ}子の手ともいい（三宅島^{みやけじま}）、あるいはまた荷^に縄^{なわ}のことだというものもある（佐渡^{さど}）のである。しかし連尺のべんりという点は、荷物がじかに背なかについて汗などでよごすことがなく、またおろしたり負^{しよ}つたりするのが手がかるだったことで、連尺という名はもう知らない土地でも、この両手を通す紐だけはよく採用していた。そうしてまた新らしい色々の名が生まれているのである。江戸というような大きな都会では、連尺ではこぼせるような大せつな荷物がいろいろあったが、そういう中でも最も

めずらしいのは、花嫁^{はなよめ}さんをこれで運んでいたことである。駕^か籠^ごという乗物はもとはおごりであつて、中流の家庭では、嫁は家^け来^{らい}に負わせてやったが、これには連尺のひつようが大きく、そのために足をのせる木を取りつけたものもあつたという。この風習も江戸では早くなくなつたらしいが、東北の田舎^{いなか}などは百年ばかり前まで、馬に乗せないで背に負うてゆく花嫁が多かつた。それにはべつに一本の木を横にしたものをつけて、その上に腰を掛けさせたが、それをモリ木ともまたウモレ木とも呼んでいた。ウモルというのは負うという語のなまりである。そのモリ木を大せつに^{いっしょうがい}一生涯しまつて置いて、死んだら火葬^{かそう}の薪^{まき}に使うものだった、というような話もつたわっているが、それはただ一つの話か

もしれない。

九、かるいの改良

大きな市街地では、もう久しい前からこの連れんじやく雀やくという背負いかたは見られなくなり、連れんじやく尺あき商ないという言葉も忘れてしまっているが、その旅したくの一部は歩荷ほつかたちのなかにつたわり、一方にはまたおいおいと、村々の運送法にも影響をあたえている。戦時の物資統制がはじまる前までは、東京附近の田舎いなか、ことに千葉県の成田線なりたせんにそう農村から、日に何百人というほどの小さな行商ぎようしようにん人が、籠かごを背に負うて物を売りに出ていた。信

んしゅう

州・飛驒ひだなどの歩荷ほつかとちがう点は、

かれらの全部が婦人であ

ることが一つ、汽車に乗ってくるので足ごしらえをしないことが

一つ、それから荷物の荷造りがかんたんで、大ていはそつくり入

れ物に入れてくることがまた一つであつたが、その負しよい方かただけは改良した連雀も同じで、竹籠たけかごの左右に幅のひろい裂織さきおりの紐ひもをむすびつけ、それへ両手を通して掛かけはずしを自由にしたものであつた。この竹籠ものちには長方形の、いくつも入れ子いこのあるよ

い格好のものになつていたが、五十年前にわたしなど見ていたの

は、ただ農家の桑摘くわつみや落葉おちば掻かきに、つかつていた目籠めかごもおなじであつた。つまりは田のすくない新開地しんかいちの女房にようぼうたちが、仕事のひまひまに畠の産物を持つて、稲作いなさくのいそがしい村々へ売

りに行つたので、それにつごうのよいような籠背負かごしよいというものが、もうこの方面には始まつていたのである。

しかし以前の農村の負ふ搬はん法ほうというものは、これとはまったくちがつたかるい縄なわ、もしくは荷縄になわ一式の仕事であつた。行きがけにはその縄ばかりを肩に引にかけて、身がるな姿で出て行くかわりに帰りには山から薪まき、野から馬の草、田畠からはいろいろの穀物の苅取かりとつたのを、山のように負うてこななければならぬのであつた。これにも荷かごしらえの上じようず下手へたはあつたろうが、ともかくも持てるかぎり多くのものを、その縄で背にくくりつけてくればよいので、歩荷ぽっかや籠背負かごしよいの行商人のように、とちゅうでおろしたり、分けたりする必要はちつともなかったのである。それがい

つの頃よりか、別に木で造つた背負い道具たずさを携えて、物を負いに
出かけるようになり、それも土地ごとにといつてもよいほど、形
と名称がいろいろとちがっているのは、つまりはこの改良がいた
つて新らしく、こういう運搬の必要がなおつづいてゐるからであ
る。一つにはこの労働がかなり苦しいので、少しでもこれを楽に
したいという希望があつたからでもあろうが、一方にはまた連尺
商いや歩荷るいという類の、これを専業にした人々と接する折がなか
つたら、そう容易にはこの改良をかんがえ出すこともできなかつ
たろう。連尺商いのもう一つ前には、日本は聖ひじりまたは山臥やまぶしとい
う旅をする宗教家があつて、それが修行のかたわらにわずかずつ
の物品を地方にはこんで、呉服こくふくとか小間物こまものとかの商売を開いたと

言われている。こういう人たちの永い^{なが}あいだの実験によつた考案が、あるいは間接に農村のほうに、働いているのかも知れないのである。

一〇、背なかうち

棒の話がいよいよおそくなるが、もう少しこの背負い道具のか
わつてきた順序を談^{かた}つておかねばならぬ。古い絵をみると、はだ
かで大きな荷を負うた人もよく描いてあるが、たいていの荷物は
突つ張つてごそごそするので、夏でもかるい子は荷摺^{にずり}という半
袖^{でこし}腰きりの仕事着^{しごとぎ}をきた。これも裂織^{さきおり}の厚ぼったい布で、荷

物にすれてもそう早くは破れなかつたかわりに、着物というよう
 なやわらかい感じのものでなかつた。あるいはその荷摺は着ない
 で、藁わらでつくつた背中せなか当てを、荷物と背とのあいだにあてている
 人もある。わたしなどの知っているのは、藁を楕円形だえんけいにあんで、
 まわりをきれなどで飾つたものだが、ところによつては袖そでをつけ
 手を通すものもあり、または木でつくつた負おい台だいのようなものも
 あるという。どういうわけか知らぬが、これを背中せなか打ち、または
 セナクチ・セナコージという地方もひろく、越後えちごではセナカンジ、
 美濃みのの山村にはゼンコウジという者さえある。勧進かんじんは神や仏の
 お姿などを背に負うて、諸国の信者に礼拝れいはいをすすめるいた人
 のことだから、かつてはこういうものにのせて、旅をしていたこ

とがあるのかもしれない。たんに荷物の積みおろしのべんりだけからならば、農村では木で作ったいろいろの背負い道具などは必要がなかったはずで、むしろ今までのように荷縄になわだけでかるうほうが、分量も多く、またなんでも、背負うことができるのであった。それがおいおいとこのほうに変わってきたのは、たぶんは品物の種類が多くなり、なかには直接に肌はだにふれてはいけないうような大せつなものもあつたからであろう。ということがこの背中せなか打ちの、ひろく用いられていることから考えられる。

九州の山村などでは、藁わらの背なかあてに似たものをシカタといい、道具はつかわずに縄とシカタばかりで負うことを地じかるいといっている。ほかの地方にはべつに名はないが、この地じかるいの

方法は奈良県の吉野^{よしの}地方、その他、^{ところどころ}処々^{ところどころ}の山村にまでのこつてゐる。そうして一方の木製の台は、名も形も土地ごとにことなつてゐるのである。絵にでもしてならべて見ないと、話だけではわかりにくいが、だいたいに関西のほうではオイコ、東にくるとシヨイコというのがこの木製の台の名で、東京のまわりだけでは^{しよいばしご}背負梯子^{あし}といつて、とくに脚の長いものが多い。脚の長いのは立つて休むのにつごうがよいようだが、それは平地^{ひらち}の多い場所のことで、左右が傾斜になつた山路^{やまみち}をゆくには、脚はかえつてじやまになるのである。^{えつちゆう}越中^{えちご}・越後などのボツカたちは、太い野球の棒のような、頭が撞^{しゅもく}木になり、もしくは^{ふたまた}二股^{ふたまた}になつたものを杖^{つえ}に突^ついていて、休む時にはそれで背の荷をささえる。それ

を荷股^{にまた}ともニンボウとも、またニズンボウともいろいろの名で呼んでゐる。東北地方などには、もとは路傍に休み石というものが、かれらの休憩のために処々に置いてあつた。それを近ごろはのけてしまった土地が多いので、荷持^{にもち}は一段くるしい労働になり、したがつてまた沢^{たくさん}山は運べなくなつた。そうして少しずつ何度にもかようなのがふつうになり、以前のように一日の仕事のおわりにうんと背負つてかえつてくるという、農夫の働きぶりはしだいに見られなくなつた。

それから他の一方にはべつに、いろいろの容器を作つて、物を入れて負うという方法もさかんになつてゐる。袋や竹籠^{たけかご}の類^{るい}は前からあつて、これも背なかに負うものが多かつたが、それらは

かくべつ重いものでなく、なにか荷物ができればその上に小附こづけ
してくるのだったが、後には仕事によつて、それぞれの容器をか
んがえ出し、それにも新らしいいろいろの名ができてゐる。中国
地方のトノスは鳥の巢に似ており、福島県から北ではそれに近い
ものをタガラといつてゐる。その他土や砂利じやりなどを背ではこぶ木
の箱の、立つていて蓋ふたの綱をひき、なかの物をあけるしかけなど
も、だれがかんがえ出したのか、このごろは始まつてゐる。総体
になわに荷繩になわの使用をすくなく、といたり結んだりする手数をはずき、
背板せいたの両端に鉤かぎをつけて引っかけたり、また下の方に枝をのこし
てのせる台にしたりしてゐる。近ごろはまた朝鮮風ちようせんふうの一つの
背負い方も、チゲという名まえと共にはいつてきてゐる。

こうしてだんだんに荷繩を儉約した最後の形が、大風呂敷おおぶろしきというものであつた。これだけはまだ農民はもちいないが、村にはいつてくる商人にはこれを利用する者が多い。すなわち平包ひらづつみの布の二隅ふたすみを引出して、これを紐ひものかわりにして背に負うもので、これは両腕の上部に力の半分を持たせるから、今までの荷負にいのように手を自由に使うことができない。すなわち道路の危害の少なくなつた今の世でなくては、発達し得ない一つの運搬法であつた。

一一、棒の始め

そこで最後に棒というものの歴史になってくるのだが、棒の発達は歴史としては新しいもので、道路の改良ということがその一つの条件となっている。昔の交通は坂路さかみちが主であつて、棒を運搬の用に供するばあいが、絶無ではなかったが、はなはだしく限られていたのである。棒はあるいは半分は武器であつたと、いうほうがあつてゐるかも知れない。そくぎに敵をふせいで荷物を保護し得るといふ、たつた一つの長処ちようしよをのぞいては、以前さかんに行われた背負繩せおいなわの運搬の、かわりになるだけの力もつていかなかったのである。それがどういふわけで古いころから、ともかくも交通の用に供せられていたかという、人の背なかでは運びにくいものがいくつかあつて、それだけは棒が引受けてい

たのである。たとえば大きな櫃ひつな長持ながもちの類るい、なかにはいった物をかたむけたり曲げたりしてはならぬ場合、ことに清せい浄じようをたもつて雑人ぞうにんの身に近づけたくない品物などは、しばしば六尺よりももつと長い棒のなかほどにゆわえつけて、平たいらにして持ち運ぶひつようがあつた。神の御輿みこしとか貴人の手輿てこしとかになると、二本の棒をあわせてその上にのせて昇かき、できるだけ土から遠くしようにとしており、今でも物によると天井持てんじようもちといつて、棒の下に通して昇かくことがまれにはある。もちろんこれには二人以上、ときとしては四人も六人も力をあわせるので、一人ですむということはぜったいになかったのみならず、急な坂だったら前がつかえるので、こういう運搬はまず不可能で、利用の道ははじめから

かぎられていたのである。

次に今一つ、棒の片方かたほうの端はしに荷物をしかとくりつけて、そ

れをななめに肩にかけることがあつた。これなら背に負うても同じことのように思われるが、物を背に負う者が一步一步、足をふみしめて道があるく習いであるに反して、このほうは奇妙に早はやあ足で行くことができた。もちろんこれは荷物のかるい時ばかり

で、またそういう物を運ぶために、走る練習をさせたものかも知れぬが、昔の大だい名み行ようぎ列うれつの挟箱持はさみばこもちは、馬とおなじ速力はやくで

ついて行かねばならず、飛脚ひきやくという者などは、状じよう箱ばこを肩に

かけて、街道を走り通さねばならなかつた。明治の御代みよになつてもややしばらくのあいだは、郵便脚夫ゆうびんきやくふという者が、これも棒

の片はしに荷をゆわえつけて走っていたほかに、東北地方の市場いちばに行つて見ると、村と浜べとから交易に出てくる男女が、やはりこういう荷物を肩にして、いずれもいそぎ足で町のほうへ出てくるのが見られた。

和歌山・高知等の諸県においては、この棒の片荷かたにで物をはこぶことを、クジユウといっている。クジユウとになうとのはつきりしたがいはい、この方は荷繩になわをもつて棒のはしにしっかりと縛りつけることであつた。肩にかたげて手で持つときには、棒はななめになつていたので、こうして置かないと、荷物がずれさがつてくるからである。どうしてクジユウというのかはまだよくは判わからぬが、地方によつてはこれをコジョウともいっているから、小背負こぜおい

かも知れない。とにかく棒はこの他の場合には、すべて平らにしてかたげるので、クジユウは要するに棒をななめにして肩に置くことであつた。

十二、棒と杓

棒という文字は支那のほうにもあるけれども、それと我々のボウとは、少しばかり物がちがうようである。そうして国内でもまだこの語を使わずに、もう一つ古い名を用いている人が多いのである。現在もつともひろく知られている名は大よそ三つ、その一つはオコまたはオーコ、これには木^き扁^{へん}に力という字をあてている

が、枋おこは日本でつくった新字しんじというものであつた。オコはわたしたちの梓ほこといつてゐるもの、および椋むくという木の名などと関係のある言葉らしい。昔の辞書にはアフコ、と仮名で書き、またアフコと詠よんだ古歌こかもあるが、それはたまたまそれに近い発音をした土地もあつたというまでで、元来が枋おこともつとも縁のとおい人たちの書いたものだから、それが正しいとまでは信用することができない。それから後の記録のちにはオコが多く、今も全国にわたつて皆オコかオーコであり、北九州のほうにはボーコというところもあり、薩摩さつまの甑こしき島じまなどははつきりとホコと呼んでゐる。漢字で銚ほこと書くものはすべて刃物にかぎるようだが、日本で木屨もくちくにかゝてゐる梓ほこのなかには、明らかに銚ほこをつけない、ただの木竹もくちくの

棒もふくまれていた。旗の竿さおを幡はた棒ぼこというのもその一つの例であり、草屋根くさやねを葺ふくにつかう棒にも、隅すみぼく・縫いぼくなどといろいろのボクがある。木の株や太い部分をボクまたはボクトというのも、木という漢字の音おんではなかった。つまりは木で作ったこういう長いものが、我邦わがくにではすべてホコまたはムホコであったのを、武器にはホコといい、他の棒はオコといって区別をしたので、棕むくを削くつてホコにするのにてきした木だったからこの名があり、現にまた、これをホコと呼ぶ例もある。棒という漢字をあてているけれども、ボウも、ことによるとホコという日本語から、わかれて出た言葉かも知れぬのである。ともかくも、昔は我邦にボウという言葉はなくて、こういう物だけはたしかにあり、それ

をホコともオコとも謂^いっていたのである。山で手ごろな細い真直ぐな木を伐^きつて、それを利用して獵の獲物などを、持つてくることは今でもする。そういうのがこの道具のはじまりではなかったろうかと、わたしは考えているのである。

こんな細かなことは、皆さんには入用がないように見えるが、棒の歴史の、これが第一章なのだから、やつぱりひと通りは聴^きいて置かなければならない。国の文化がすすむということは、どんな何でもないものが、だんだんと改良せられてくることである。それも現在まだどしどしと進んでいるものなら、人がなにかにつけて、その起原を考えずにいないだろうが、棒などはいったん広く用いられてのちに、今ではまた用が無くなってしまうおうとして

いるのである。もし、このままにして置いたら、たいていの人は忘れるであろう。そうして前代日本人の、いろいろの苦心と経^{けいけ}験^{けん}とが、わからなくなるであろう。それでは困るから歴史^{れきし}は学ぶのである。

一三、棒の分類

木扁^{きへん}に力と書いてオコとよんでいるもの以外に、地方ではまた棒をサスという者と、天秤^{てんびん}棒^{ぼう}という者とがある。東京などはその第三の天秤棒のほうであつて、これが棒という言葉のふつうになつたものであつた。この三つの名称は、三つとも使っていると

ころはやや少なく、多くはそのうちの一つ、または二つを知っていて、それで間に合うもののように思っている。つまりは棒の使いみちがいくらかもあり、そのこしらえもそれぞれに、ちがっていることに気がつかぬのであった。村にはいつて住んでいると、このちがいには注意せずにはいられない。現在もつとも多く見かけるのは、棒の両端^{りようはし}をずっと細くしたものだ、これにも二通りあつてただ先を尖^{とが}らしたものと、ツクと称する小さな突起を二つ、木または金属でつくつて嵌^はめこんだものがある。この二つは、共に比較的あたらしい改良であつて、以前はなるべく平^{たい}らな、まつすぐな棒を、少しもけずらずに使うのが枋^{おこし}であつた。重きな荷物をこの枋のなかほどにゆわえつけ、二人で両端^{りようはし}を肩

にのせて行くのを中ちゆうにな担たんい、または差担さしにないともいつていた。
小さい二人の兄弟が、こうして水をはこび、または親子で棒をや
や前まえ下さりに、荷物をなるだけうしろのほうへ引取つて、かつぐ
練習をさせるのもよく見られ、今でも道みちぶしん普請つちはこの土運びには、
これがふつうである。地方によつては中取なかどりといつて、こうして
物を運ぶのをいやがるところもあると聴くが、それはただ荷物を
棒にくくりつけるものだけで、多分はかんたんな葬式と、形がに
ているのが、いまわしいからで、綱を長く下げて棒に通すものま
できつたのでは、せつかく平らな広い路ができて、大きな重
い物は運ばれないことになるから、そのほうは構かまわずにやってい
るのであらう。

しかし人がふたり以上話しあつた上でないと、物が運べないの
では杣おこの効能は小さい。一人でも力のある男はそれを一方のはし
に引掛ひっかけ、または分けられる物ならば半分ずつ 両りょうはし 端につけて、
まんなかをかたげて運ぼうとするようになったのは自然のことだ
ある。一人で持つならばよつほどの山やまさか坂でも、杖つえを突き足もと
に氣をつけて持つてくることができた。関東・東北の働き人たち
が、荷繩になわばかりを背にかけて山に行き、田畠ふかうに行くにたいして、
もとは西さいごく国では杣をかかえて出かける風があつた。これは九州
ではヤンモコ、すなわち山やまおこ杣おこといい、またはヤマコとも山やまい行き
杣ともいつていた。山杣のさきには鎌かまをゆわえ、それにオコノコ
という長い荷繩をそえてかたげているのが、作さくおとこ男こびやくしよや小百

姓^うの常の出立^{いでた}ちであつたともいわれている。ところが、いつの間にかそれもまた變つて、他の地方ではサスといい、またはトギリ^{おこ}枋とも（岡山）トガラシ^{おこ}枋とも（大和^{やまと}）チヨガシ^{おこ}枋とも（熊野^{くまの}）という棒を、山枋とよぶ村々もできてきたようである。

十四、サスとノメシ棒

棒^{りようはし}の両端をとがらしたものを、東京の近在ではまたノメシ棒ともいつている。ノメシというのは^{なま}惰け者のことで、荷縄で棒にくくりつけるめんどろをいやがり、じかに荷物^{なま}のなかへ棒のしを刺しこんでになつて帰るから、そういうたわむれの名をつけ

たのだが、これも、じつはじゆうぶんにその便利を知った人の言葉であつた。これだと荷繩を掛けるための時間は、はぶかれるが、そのかわりには柴しばとか萱かやとか稲束いなたばとか、ぜひともしつかりと束たばにむすんだもので、棒を刺しても損じない物でなければならぬ。そうして、またそれらの物の束たばねかた、およびそれに使う繩なわとか蔓つるとかの材料も、問題になつてくるのだが、実際のところ村里むらさとには、こうして束ねたようなかんたんな荷物ばかりが多かつたのである。此方法このが始まると、いちいち長い繩で棒にくくりつけることがむだな手数のように考えられ、今までの山やま枋おこだけでなく地じかるいというような背で負う荷造りまで、なるべく荷繩をすくなく使おうとして、背板せいたや背負せおい梯子はしごの類るいにあらためられることに

もなつたものらしい。

サスという棒の名は、束に突き刺すからサスだと思ふ人が、今では農民の中にも多くなっているが、それだけは誤りである。尖^{とが}つた棒でもなおオコという土地が多いというのみでなく、サスはがんらい横にわたすという意味で、すなわち斜めにして肩にのせるクジユウという動詞に対する語であつた。直径をサシワタシというのと同じように、二人で棒の両^かはしを舁くことを、今でもサシニナイ、またはサシアイ持ちというのが常である。しかし、ノメシ棒やチヨガシ^{おこ}杵も、なんだか変だから、これからはさきの尖つた杵だけを、サスということにするのは便利かもしれない。ただそのために、一方のこれをオコという人を、笑うことはできな

いだけである。まちがいをなくしようと思えば、このほうをサスオコ、ほかの昔からあつた尖らない杓のほうを、熊野地方くまののよう
にマルオコと呼ぶのがよいかも知れない。

しかしまだこの以外に、わたしのこれから言おうとする天秤てんびん
棒ぼうのことを、サスと呼び、オコといって居る地方もあるが、こ

れだけはまぎらわしいから区別を明らかにして置かなければなら
ない。天秤棒もまことに変な名まえで、変だからまた覚えやすか
ったのかも知らぬが、天秤はがんらいはかりの器械のことであつ
た。ふつうの衡器こうきは、棒の根もとに近いところは衡はかりの緒おがあり、
それを下げていて他の一方の端はしのほうへ、分銅ふんどうを送つて行くし
かけであつたが、葉や金銀のような少しの物を量はかる天秤というも

のだけは、中央に支柱が立っていて、両方の皿さらが權衡けんこうを取るようになってゐる。それがこの棒をもつて物になう形と似ているので、天秤棒という名が始まったのである。その天秤が今ではただ、両りょうてんびん天秤などという言葉だけをのこして、だんだん使われなくなつてきたために、説明がむつかしくなつた。そうして、また、このいわゆる天秤棒には、何かかわつた名をつけてでも、區別しなければならぬ大きな特徴があつたのである。

一五、天秤棒の特色

この発明は、あるいは支那にはじまつたものかとも思うが、か

りに外国から学んだとしても、その便利をただちに理解して、これだけまでひろく国内に普及させたことは、なお我々の祖先のてがらと言わなければならぬ。同じく両端^{りようはし}をほそくした棒でも、東^{たば}に突きさすだけの尖^{とが}らし杓^{おこ}と、この天秤棒^{てんびんぼう}とはけずり方がちがい、またよく見るとこのほうは、まんなかのところもやや平^{たい}らめにけずつてある。これはになつて行く者の足取り^{あしど}につれて、両^り端^{はし}が少しずつ上^{じょう}下^げにうごき、そのわずかのあいだだけ、肩を休めるようにできているので、そういう動作のために、荷物の吊^{つり}縄^{なわ}がすべり落ちないように、丈夫^{じょうぶ}な小さい突起が、棒の両端についているのである。この突起をツクといい、またツコともチコともいう人があるが、ツクのほうは古い日本語であつて、小

舟ぶねの櫓ろなどにも古くからツクがついていた。つまり天秤棒はこのツクのあるおかげに、サスとはちがつて棒がよつぽどかたむいても、荷物はずり落ちてしまわないのだから、肩で加減をすれば、そうほうの荷が平均しくなくとも、そのままになつて行くことができる。その点がまた衡器こうきの天秤とよく似ていたのである。

このいわゆる天秤棒のことを、長崎地方ではまたツクオーコと
いうので、このほうがむしろよく当あたつてゐる。伊予いよの宇和島うわじまでは、
これをカリコ棒、このカリコは東北からもつてきた言葉であろう
が、この地方ではかる子も縄をもつて背にかるわずにツクのある
棒でになつていたのである。伊賀うえのの上野あたりでは、タビヨコと
いうのが天秤棒のことであつた。タビヨコはすなわち旅たび杓おこであ

つて、こういうにない方をすれば相応に重い荷物でも、かなりの速力で遠くまで持つて行くことができたので、旅の商いあきなをする人たちが、まずこれを利用し始めたのである。東京の市中で見ていると、多くの商人は手車てくるまを曳ひくようになったが、今でも天秤棒をかついでくるのは豆腐屋に金魚売り、その他液体のはいった容器をになう者に多い。農村のほうでも水を汲くむとか、下水を田畠にはこぶとかには、他の方法だったら容易のわざでないのを、タゴという桶おけならばよほどかんたんになるので、この特別の棒を早くから採用し、そのために畠作などはいちじるしい進歩をしたのであった。しかしそれも今日こんにちはもう歴史である。是これから先はどさきう変つて行くか、私たちはまた一つの新しい経験を積まなければ

ならぬのである。

町では天秤棒を生活の要具としていたのは、今までは八百屋と肴屋さかなやとが主しゅであつた。配給の時代には問題はなかつたが、その前にもすでに八百屋は車になつていた。肴屋のほうは走らないと新鮮だという感じが出ないので、また各地方で天秤棒をかついでいるが、これもだんだんと汽車電車などに乗る故に、長い棒がじやまにされて、しまいには亜鉛トタンの板で張つた四角しかくの箱を、カンカラといつてまた背負いあるくようになってゐる。水汲みみずくが手桶ておけになり、にない桶になり、また水道になつた結果、女の頭の上に物をのせる練習が足りなくなつたことは、もう前に話をしてしまつたが、これを専門さかなに魚などを売りあるいた女たちも、いよいよこ

の運送法の変遷^{へんせん}のために、あの古風^{こふう}な形をやめなければならぬ時に、出あっている。中国地方ではこの魚売^{さかなう}りの女をカネリ、またはカベリといっていた。カベルと被^{かぶ}るというのと一つの言葉である。その周囲の四国でも、九州でも、また北陸地方でも、まだイタダキという昔の名を持っている。しかもその戴^{いた}きが、すでに天秤棒をかつぎ、またはリヤカアを引張^{ひっぱ}つてあるいている土地は、もうだんだんと多くなっているのである。

青空文庫情報

底本：「いども風土記・母の手毬歌」岩波文庫、岩波書店

1976（昭和51）年12月16日第1刷発行

2009（平成21）年7月9日第12刷発行

底本の親本：「母の手毬歌」少年少女知識文庫、ポプラ社

1952（昭和27）年10月5日刊

初出：母の手毬歌「週刊小国民 第四卷一号」

1945（昭和20）年1月

親棄山「少女の友 三八卷二（三）号」

1945（昭和20）年1月、2月

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年5月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母の手毬歌

柳田国男

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>